
君に会いに

サイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に会いに

【Nコード】

N6645U

【作者名】

サイ

【あらすじ】

ヒスファニエは王位に就く資格を得るために試練を受けていた。試練の内容は、廃墟の島「神殿島」で、ナイフ一本を携えただけでたった一人で一月を過ごすこと。嵐が島を襲った翌日、彼は海岸で、難破して流れ着いた少女を拾う。やがて二人は心を通わせるが、彼女は敵国の姫だった。

出会い 1

昨夜は酷い嵐だった。石造りのはずの神殿さえ、一晩中どこかが始終ぎちぎちと軋み続けていた。

いつも寝起きしている厨くしやは無事だろうか。地崩れでも起きたら、あんな小部屋ひとたまりもないと思ってこちらに避難したのだが、だだっ広い神殿の中でさえ心安まることはなく、結局うつらうつらとしか眠れなかった。

ヒスファニエは扉の隙間から差し込んでくる光に目を細めて欠伸をした。

少し前に外は急に静かになり、鳥の声が聞こえるようになっていた。どうやら嵐は去り、朝がきたらしい。

いいかげんこのままぐつぐつと寝てしまいたかったが、そういうわけにもいかない。重い腰を上げて、一つずつ明り取りの窓を開けていく。最後に大扉を開け放ち、扉の脇に置いてあった棒を持って外に出た。

辺りは雨に洗われ、空気さえ透明度が増しているようだった。昨夜の名残の、植物の葉に宿った雫が日の光を弾き、目を射られる。ヒスファニエは思わず眼前に手でひさしをつくった。

もともとここは神域で、それほど信心深くないヒスファニエでさえ、なんとなく心身ともに引き締まるような、浮き立つような、そんな感じを受ける場所だ。そこが闇を切り裂いた朝の光に満たされた様は、非力な人など歯牙にもかけない荒々しい神々しさにあふれていた。

息をするたびに神気のせい、頭の中がはつきりとして、体が目覚めていくのがわかる。ヒスファニエは何度も深呼吸を繰り返した。ここ、主神セレンティアの大神殿のある神殿島は、古はエーランドディア一族の治める島だった。ここにはセレンティアの声を聞く神官がいて、ゲシヤン海域に住まい、生きるに迷った者たちは皆、

かの神官を頼り、神託をこいねがったものだったという。

しかしそれは、大災害の前の話だ。地が崩れ、山は火を吹き、海が陸を覆い尽くそうとし、天が裂けたと伝えられる大災害の寸前、神は神官に一つの神託を降した。

『東の大陸にある冥界の門を開き、そこに囚われし神を救い出せ』と。

神託はすぐさま島々の王たちに伝達され、王たちは遠征の準備を始めたが、それは実行されることはなかった。大災害が起き、船も家々も民も流され、生き残った者たちすら、その日を生きるのにせいいっぱいとなってしまうたからだった。

なんとか生きるだけの道筋が付き、ようやく船を建造して島々を渡れるようになってから、王たちは神殿へとおもむき、未だ遠征できぬことの釈明と、復興への加護を願った。

だが、神は黙して、決して応えなかったという。そして今に至るまで、どんなに祈りを捧げても、神託は降りなくなってしまった。

神の意に従わなかったために、怒りに触れたのだとも、主神も冥界に閉じ込められてしまったのだとも言われている。

それ以来、ゲシャン海域に住まう者たちの悲願は『冥界の門』を探し出し、再び神の加護を得ることとなった。

しかし、それには大海原を越えなければならず、それを越えられたとしても、その先には未知の大陸がある。王たちはそれぞれに何度が探索者を差し向けたが、戻ってきた者は一人としていなかった。

神に対する敬意は失われはしなかったが、神と交感できなくなつたエーランディア一族が衰退していったのは仕方のないことだろう。そうして2000年ほど前、エーランディアの最後の神官が自ら探索に向かい、とうとうこの神殿で祈りを捧げる者はいなくなつてしまったのだ。

神殿島から最も近い島の王家、すなわちヒスファニアの連なるユースティニアには、その当時の詳しい話が伝わっている。当時の王と最後の神官は、幼き日々を共にした親友同士だったのだという。

その神官は、親友が王位に就いた時に、探索の船を出せと要求したらしいのだが、王はそんな無駄はできないと突っぱねたらしい。真実とは思えないたかが神話のために、貴重な人命を差し出したりはできないと。

『人に行けとばかり言わないで、たまにはご自分で行かれればよろしかろう』

それは皮肉であり、冗談であり、それよりなにより、大神官の言葉を戒める意図が込められた言葉であった。衰退したといってもエーランディアの血はどの王族よりも尊ばれ、崇められていたのだから。その大神官が探索せよと命ずれば、王たちは生贄のように民を差し出さねばならない。それが良い結果をもたらすとは、思えなかったからだ。

だが、当時の大神官という人は、神官にしておくには惜しいほどの血気盛んな方だったとかで、売り言葉に買い言葉もあつてか、本当に、ただ一人で、誰にも止められぬよう闇夜に乗じて行ってしまったのだという。

王は己の言葉を悔いたらしいが、大神官殿を追わせなかったという。追いついたところで聞くような人物ではなく、ならば追う意味もなかったからだ。

そのかわり、今に至るまでこの島を預かり、この神殿を維持してきた。

いつか、エーランディアを名乗る者が帰るとすれば、それは宿願を果たした時だろう。そのお方がご帰還されるまで、この地を守ることこそ、ここに残った者の使命であろうと。

そんないきさつから、ここはユースティニアの王領となり、代々その話と共に王にゆだねられてきた。

ヒスファニアもあと一月もしないで王となる資格を得る。この島でナイフ一本で一月を生き抜くことができた者には、神の祝福が与えられると信じられており、ユースティニア王家では、それが王位に就く条件となっていた。

それはさほど難しい話ではない。この島は温暖な上に実り豊かで、真冬でさえなければ、食べられる植物がいくらでも自生している。それに海も非常に豊かだった。まっとうなゲシヤンの男ならば、一月程度、生き延びられないわけがない。

問題は、王位に就くのに反対する者がいる場合だ。国王候補は、ここで一人で過ごさねばならない。つまり暗殺するにはもってこいの状況なのだ。

反対する者もいれば、賛成する者もいる。国王候補をめぐる争いは、この島を囲む海域で行われており、それが破られた場合は、彼一人に対応しなければならなかった。

ヒスファニエは側近であるデュレインたちを信頼していた。それでも、あの嵐では本島にでも退避しなければならなかっただろう。

つまり今、ここは非常に無防備になっているはずだった。もしもを考えて、海岸を見回りにいかなければならない。幸い北側は断崖絶壁で、上陸するのは無理だ。島の南側半分を見てまわればいい。

そうは言っても丸一日はかかるのだが。

ヒスファニエは大きな伸びをして、神殿に戻った。

腹が減っていた。とりあえず、厨が無事だったら、一緒に避難した鍋を竈にかけて、中のスープを温めよう。まずは空腹を満たして、他はそれからだと思ったのだった。

今現在、国内に表立ってヒスファニエに反対する勢力はない。

現国王に男児は彼しかおらず、もう一人の候補者は叔父アフルで、ヒスファニエは彼の娘、つまり従姉妹であるルルシエを娶る予定だった。その他、同盟国家からも数人の姫の輿入れが決まっていた。

だから、国側になる東ではなく、まずは西の浜に下り立った。この海の向こうには、積年の怨敵であるプリステイン王国がある。

今回の試練の儀式も、今までと同じように極秘の内に行われていたが、どこでどう情報が漏れているかわからない。何かあるとすればこちら側の方が危なかるうと考えたのだった。

その懸念はどうやら当たったようだ。浜には多くの木切れが打ち上げられていた。昨夜の嵐で船が難破したのだらう。

ヒスファニエは改めて手に持った木の棒を握り締めなおして、人が上陸した跡はないか、辺りに気を配りながら探していった。

時々、色のついた木切れを拾い、絵柄を確かめる。船体に描かれる魔除けの目は、島ごとに異なる。青い目玉に赤と黄色の隈取くまどりという鮮やかな彩色は、確かにプリステインのものだった。

ヒスファニエは、砂浜に突き出した低い岩を回り込んだところで立ち止まった。人がひときわ大きな木切れの上に、おおいかぶさるようにして倒れていた。ずっと先の砂浜まで見遣ったが、とりあえず見える範囲では他に人はおらず、足跡も残っていないかった。

服装から見るに、女だと思われた。しかし、女だからといって油断はできない。相手は暗殺者かもしれないのだ。

それでもヒスファニエは、彼女をもう一度海に放り込むことはできなかった。ゲシャン海域では、海から打ち上げられたものは、何であろうと神からの賜り物であり、ありがたく受け取らなければならぬという風習がある。

たとえば死者であるならば、丁寧に弔えば航海の守り神になって

くれると言われていた。かわりに海に返せば、同じ死に方をすることになるとも。たとえ暗殺者だろうが、ゲシヤンに生きる者として、なにはともあれ捨われないわけにはいかなかったのだ。

棒が届くところまで足音を忍ばせて近付き、わき腹を突付いてみた。反応はない。もう少し近付き、体の下に棒を差し入れ、ゆつくりとひっくり返してみる。う、と呻く。どうやら生きているようだ。面倒なことになったと思ったが、鎖骨あたりに棒を当て、すぐには起き上がれないように強く押さえつけた。痛みも感じているはずだ。厭うように棒をふりはらおうとするが、力が入らない様子である。顔色も悪く唇も青い。体が冷え切ってしまったているのだろう。やがて目を開けた彼女は、ここがどこかわからないという顔を、辺りを見回してヒスファ二工を見つけて、恐怖に顔を引き攣らせた。かたかたと震えだす。

めまぐるしく表情が変わっていく。恐怖に耐え、必死に自制し、この状況から逃れようと考えをめぐらせているようだ。最後には怒りに近い色をたたえて、投げつけるようにして言葉を吐き出した。「何者です。なんのつもりでこんなところに攫さらってきたのですか」高飛車な口調だが、精一杯の虚勢なのは見え見えだった。ろくに体も動かせず逆らうこともできないくせに、相手を逆撫するような態度はどうかと思うが、気が強く誇り高いことは確かだろう。

「君は昨夜の嵐で難破してこの島へ流れ着いた。俺は君を拾う義務があるのだが、姫はお気に召さないようだな」

彼女は何かに思い当たったようで、あ、と声をもらした。次いで、矢継ぎ早にいくつかの名前を口走る。

「さあ。姫の他は、見ていないが」

「船は。船はありませんか。波間で助けを待っているかもしれませんが。どうか力をお貸しください」

二度口にした「姫」という呼び名を当然と流して、助力を請うてくる。

「すまないが、船はない」

「お礼なら、国に帰ったらいくらでも」

「そうじゃない。俺もこの島に一人で置いていかれたんだ。力にはなれない」

「そんな」

彼女の目から涙があふれだした。ヒスファニエは途中から力を抜いていた棒を手元に戻し、相変わらず震える彼女のすぐ傍でしゃがんだ。

「君も体が冷え切っているだろう。服を乾かした方がいい。あちらに建物がある。そこに案内しよう」

彼女はしばらく彼を見詰めたまま煩悶していたが、瞬きして涙を落としながら、こくりと頷いた。

ヒスファニエは手を貸して、彼女を起き上がらせてやった。すると彼女はふらふらと上体を揺らしながらも、胸の前で左の拳を右の掌で包んで、顔の前まで持ち上げ、正式な礼をほどこしてきた。

「お世話になります。よろしくお願ひいたします」

「ああ、たいしたもてなしはできない。堅苦しい挨拶はいらない」

ヒスファニエは苦笑した。

「俺はフアー。君は？」

これからしばらくは彼女と過ごすことになる。呼び名がないのは不便だと思っ、愛称を教えた。プリステインとユースティニアは仇敵だ。お互いの素性は知らないでいた方が良さだろう。彼女も少し考えた後、同じように愛称を教えてくださいました。

「アライです」

アリスティン、アリシラ、アルトティア、アルミア、ざっといくつもの名前が頭に浮かんだが、それらはどれも目の前の彼女の名前としては、よそよそしく感じた。

「アライ」

一度呼んで、口に馴染ませてみる。

「はい」

彼女は素直に返事をした。緊張はしているらしいが、警戒の解け

たそれに、悪くない、と思う。

この拾い物は、思ったよりも悪くない。

不思議とプリステインの姫だということは気にならなかった。たとえ彼女の父親や祖父に恨みがあっても、やっと蕾が開きかけたかという程度の少女が、ユースティアに仇を為したことがあるとは思えなかった。それに、彼女は神からの賜り物なのだ。あまり粗略に扱えば罰があたるだろう。

「君の帯も、貸してくれないか？」

「え？」

そう言いながら、彼は自分の上着の帯をはずした。彼女は再び表情を固くして、胸元を押さえて後退った。

「建物まではけっこう歩かないとならない。君を背負っていこうと思っただが、俺の帯だけでは背負い紐にするには短すぎるから」

途端に彼女はばつの悪そうな顔になって、すぐに帯をはずしにかかった。ところが指に力が入らないらしい。いつまでたっても結び目をひっかくばかりだった。

「失礼しても、いいかな？」

声をかけると、下唇を噛んで、上目遣いで頷く。それはそうだ。女性の帯をとくのを許されるのは、本来は夫だけだ。背負い紐がなくても行っ行って行けないことはない、ちらと頭をよぎったが、あつた方が格段に楽で安全だ。それに。

震えながら恥かしげにうつむく彼女を見下ろす。じっとしている可憐な彼女の帯をとく。やましい気持ちは欠片もなかったが、その行為に胸が躍った。

うん。悪くない。

ヒスファニエは、もう一度心の中で、さっきと同じ言葉を呟いた。

彼女は背中揺られているうちに眠ってしまったようだ。すぐに体が傾いで重さがかたより、歩きにくかったが、そつと揺すり上げるにとどめて、声はかけなかった。

触れている肌はどこもかしも冷たい。いつまでたっても温まっていこない。ふと、死んでしまっているのではと考えて、足を止めて彼女の様子をうかがった。震えている、ような気がする。また揺すり上げると、息の音が耳元で聞こえた。安堵して、今度はさつきよりも足早に歩き出した。

彼女が死んでしまっても、ヒスファニエには何の損にもならない。むしろその方が、あとくされがなくていいくらいだ。けれど、一度拾って自分の腕の中に抱えたものを死なせるのは、後味が悪い。

神殿に戻ると、すぐに裏手にまわって、無事だった厨くりやに入り、竈かまどの前に彼女を下ろした。中の埋み火を掻き出して火をおこす。それから、寝蓐代わりに集めて使っていた乾いた枯葉を半分だけ彼女の横に集めた。

「おい、起きろ」

頬を叩くのはどうかと思い、背を叩いたり、さすったりしてみるのが、小刻みに震えているばかりで意識が戻らない。

とにかく、濡れている物を身につけているのが一番良くない。眉間に少し力が入ったような彼女の顔を眺め、困って、つんと可愛らしく上を向いている鼻をつまんでみた。しばらくそのままで見ているが、小さく口を開けた程度で他の反応はなかった。手を離して頬を一撫でしてやり、ヒスファニエは意を決した。

彼女の襟元に手をかけて、肩を露出させる。思ったとおり、濡れてはりつき、するりとはいかない。布地をひっくり返して、剥くようにして脱がせていった。青白い肌が現れる。大きくもなく小さくもない、けれど形の良い胸を見ても劣情はわかかった。まるで死

体のようだ。ひどく同情して、胸の奥がくつと締め付けられた。

下穿したはきだけはさすがに残し、枯葉の中に横たわらせて、その上からも残りをかけてやる。意識があれば、そんなところに裸で入ろうなどと思えないだろうが、今は他に濡れていないものがない。ヒスファニエの服も、彼女を背負ってきたためにぐっしりと濡れていた。

それらを桶に入れて持って外に出た。神殿脇の泉に行く。真水をすくっては海の潮を洗い流し、力任せにぎゅうぎゅうと絞り上げて、木の枝に引っ掛けておいた。

少し考えて、自分も頭から水を浴びて汗を流した。そうしておいてから拭く物がないのに気付き、仕方なく自分の服を枝からとって拭ってから、もう一度絞って掛けなおす。濡れたままの下穿したはきだけを身につけて、厨くひやに戻った。

室内にいい匂いがただよっているのに気付き、竈かまどに掛けっぱなしにしておいたスープが焦げつかないように、水を足した。島に来てから、食材を見つけては次々に足して煮込んでいるせいで、どろどろのぐずぐずなものができあがっていた。だが、どういうわけか非常に旨く、我ながら首を傾げたくなるようなできばえだった。滋養もあって、食べやすく、病人食にも良いはずだ。

彼女の顔を覗き込み、口にかかっていた髪を後ろに撫でつけてやった。すると、ふっと目を開けて、虚ろな顔で、何か囁いた。

「なんだ？」

耳を口に近づけて尋ねると、「さむい」と呟く。顔色を確かめようと顔を上げた時には、もう目をつぶっていて、また意識を失ったようだった。

竈かまどの前のここは、ヒスファニエにとっては熱いくらいだったが、彼女にはまだ足りないらしい。だが、他に暖めてやれるものは、ここには後一つしかなかった。

いろいろ考えるのはやめて、ヒスファニエは枯葉の中にもぐりこんだ。彼女を背中から抱き締め、足も冷たいそれに絡ませる。

小さな体だった。震える細い肩に顔を埋める。体温を与えながら、腕の中のものを、大事にそっと抱き締めた。

彼の成人の儀で添い寝役をし、時々体を合わせるルルシエを抱き締める時とは、違う感情が胸の内いつぱいにわく。

稚い彼女を、^{いとけな}ただただ守ってやりたかった。こんなに小さく華奢なのに、冷たく強張った体が哀れで、温めて、元気にしてやりたかった。娘ができたらこんな感じなのかもしれない、とも思う。

本当は、海岸の見回りを続行するべきだった。それはわかっていた。それでも、彼女を置いて行く気にはなれなかった。この腕を離したら、彼女が死んでしまう気がした。

ヒスファニエは彼女の髪の毛の潮の匂いを嗅ぎながら、神殿のまわりに張り巡らせた鳴子が鳴らないか、耳を澄ませた。

しかし、寝不足だった彼も、いつの間にか深い眠りに落ち込んでいつてしまったのだった。

それから3日は無我夢中の日々だった。

彼女は体が温まってくると、今度は高熱を出し、熱いといっては枯れ草を蹴散らかしたり、そうかと思えば寒がったり。汗で張り付いた草が痒いだの痛いだのとしくしく泣き、結局彼女の服とヒスファニエの服を、汗で濡れるたびに交互に着せては洗って干した。その上、食べ物は何を抱えて支えながら、一口一口吹き冷まして、口まで運んでやらなければならなかった。

そんなわけで、4日目の朝、突然彼女がむっくりと起き上がったのに驚きつつも、ヒスファニエも眠い目をこすりながら起き上がった。

「どうした。腹がへつたか？」

胡坐をかいて欠伸びながら、彼女の髪に手を差し入れて、寝癖をなでつけてやる。

「いえ、あの、外、に」

「外？」

「外で」

と言ったきり、恥ずかしそうにしているのを見て、もしかして、と思いつく。

「わかった。行こうか」

体を抱き寄せ、腕に乗せて立ち上がる。彼女は小さくて、不安になるほど軽い。熱でほとんど食べられなかったから、更に痩せてしまっていた。

「いいえ、いいえ、いいえ、けっこうです！一人で、行けます！」
ヒスファニエの肩に手をつけて、一所懸命突っぱねている。が、ものすごく、信じられないほどに非力だった。

「ぜんぜん力が入ってないだろう。今更遠慮するな。連れて行ってやる」

「遠慮じゃありません。本当に、けっこうです！」

必死に声を張り上げる姿に、ヒスファニエは安堵がこみあげてきて笑った。

「元気になったなあ」

よしよし、と抱えている手で背中をこすった。彼女は急におとなしくなると、うなだれた。

「なんだ、どうした。まだ体が辛いのか」

尋ねても、なんでもないと首を振るばかり。言わないものを根掘り葉掘り聞いてやるほど、ヒスファニエは親切的な性格ではない。それならそれでいいと、勝手に彼女を連れて外に出た。

この島に、用を足すための専用の施設はない。俺はあの辺でするから、君はこの辺にしろ、と適当に案内した。彼女を地面に降ろしてやると、案外しつかりした足取りで茂みの奥へと歩いていったのを確認して、踵を返した。

厨くひやに戻って、まず火を熾し、次に窓を開けた。泉にも水を汲み、と思つて桶を取り上げたところで、外に彼女がいるのを思い出し、今はまずいか、と所在無く立ち止まった。

彼女がこれだけ元気になったなら、今日は一人にして、遠出してきてもいいかもしれないと考えをめぐらせる。

海岸の船の破片をあのままにしておくのはまずい。全部拾つてきて、燃やす必要があった。迎えが来た時に、彼女がブリスティンの姫だと知れたら面倒なことになる。あれさえなければ、記憶がないことにもまして、神からの賜り物を、ただ預かっていただけだと押し通せるだろう。

その前に、彼女に自分の素性も話して、口裏を合わせるように諭さなければならぬ。それとも、もう彼女は気付いているのだろうか。

ヒスファニエは、肩口から自分の背中へと手を滑らせた。触ったところでわかりもしない、そこにあるはずの、自分では見たことのない刺青を探したのだ。

扉が開いて、彼女が戻ってきた。

「大丈夫か」

ヒスファニエは手を下ろして彼女に聞いた。

「はい」

彼女は扉を入った所で立ったまま、厨くちやの中を、迷ったように見まわした。

「まだ横になっっている。俺は水を汲んでくるから」

外に出ようと近付いて、桶を少し持ち上げて示す。だが、彼女は突然、扉の前で跪いて、胸の前で作った拳を顔の前まで持ち上げ、最敬礼をとった。

「助けていただいて、ありがとうございます。たいへんお世話をおかけしました。このご恩は一生忘れません。必ずご恩に報いることを誓います」

至極まじめに言っているのはわかったが、正直嬉しくなかった。あんなに為すがままで可愛かったのに、急に一線を引かれたようで、おもしろくない気分になった。

ヒスファニエはしゃがんで、ぎゅうつと握っている小さな両の拳を片手で包んで、そつと下げさせた。

「礼なら神に言えばいい。俺は神からの賜り物をありがたくいただいただけだ。自分のものを大事にするのは当たり前だろう。俺は君に恩を感じてもらうほどのことはしていないよ」

気にすることはない、それを伝えただけなのに、それを聞いた彼女は泣きそうな顔になった。震える声で、謝罪を口にする。

「ごめんなさい」

「謝らなくていい。遠慮もするな。俺の物だと言っただろう。もっと元気になってもらわなければ、俺は満足できないぞ。元気になるまで、しっかりと甘えてろ」

彼女はきつく目をつぶって、横に激しく首を振った。

「違うんです。ごめんなさい。私、私は、プリステインの者なのです。あなたは、ユーステイニアの方なのでしょう?」

やはり気付いていたようだ。男児が赤ん坊のうちに背中に施される魔除けの刺青は、島ごとに異なる。仇敵のものともなれば、たとえ女であっても、知らないわけがなかったのだ。

迂闊にも、それを忘れていた。刺青は当たり前のもので、しかも自分からは見えない場所にある。そのことに思い至ったのは、昨夜、彼女がやつと一人で食事をして、それだけで疲れてへたりこんで眠りに落ちたのを、きちんと寝藁の上に寝かせ直してやった時だった。肌蹴て見えてしまっている首から背中を、襟元を直して隠してやりながら、己の背中中の刺青を思い出して、ぎよっとしたのだ。

祈るような気持ちで、女である彼女が刺青の判別ができなければいいのにと願っていた。もう今更隠したところで、どうしようもないほど遅すぎた。それまでの間に3日も、彼は上半身裸で過ごしていたのだ。そして、もちろん今も。彼の上着は、今、奇しくも彼女が着ていた。

自分の間抜けさを呪っていると、彼女はとうとうたのか、ヒスフア二エの手から慌てて自分の手を抜き出し、自分の帯をほどき始めた。

「これ、お返しします」

「脱ぐな」

「で、でも」

「昨日、干したまま取り込み忘れた。きつと朝露で湿ってる」

「それでいいです」

「子供でも、男の前で服を脱ぐな」

少しきつめに言い聞かせると、彼女は、びくりと体を震わせて固まった。その頭を、ぐしゃぐしゃと撫でてやる。

「ユーステイニアの男だって、女子供をどうにかするほど残酷じゃない。それに、俺は知ってて君を拾ったんだ。一緒に流れ着いた船体の破片に、ブリステインの魔除けの目が描かれていたから」

手の下でしおれている彼女の様子に、苦笑が漏れる。

「海から流れ着いた物は、すべて神からの賜り物だ。君が誰でも俺

にとつては賜り物だ。一生恩に着的る気があるのなら、賜り物らしくふるまえ」

彼女が上目遣いで見上げてくる。

「賜り物らしく？」

「そう。ここにいる間は、君は俺の養い子だ。子供らしく甘えろ」

また彼女は泣きそうな顔になった。ヒスファニエは髪に突っ込んでいた手を頬に滑らせた。親指で挟むようにして目の下をさする。本当に涙が零れてきそうだった。彼は焦って言葉を紡いだ。

「いや、甘えてくれ。甘やかしたいんだ。こう、なんというのか、かわいくって、楽しいんだ。あー、いや、ほら、妹とか、弟とかいかなかったから、新鮮というか」

彼女はぼかんとして、彼を見詰めた。その眦から涙が一粒ころげ落ちた。ヒスファニエは思わず洩らしてしまった本音に恥ずかしくなって、顔をそむけた。

自分で言っておきながら、なんだそれは、と思った。確かに子供の頃に、妹か弟が欲しいと思ったことはあった。ヒスファニエは末っ子だ。死んでしまった兄や、嫁に行った姉たちにはよくかまってもらったが、だからこそ自分が面倒を見る下の子が欲しかった。だけど、大人になってまでこだわることではない。

兄を思い出し、ふっとプリステインに対する、恨み、憎しみが胸の中で渦巻く。戦で兄が死んだのは、もう十年も前になるが、未だにその悲しみも悔しさも癒えはしない。

それでも、目の前の彼女に恨みを晴らそうとは思えなかった。ヒスファニエにとって彼女は、彼女が名乗ったように、ただの「アリイ」でしかなく、他の何かではなかった。

「妹、ですか？」

長い沈黙と凝視の後に聞かれたそれに、ヒスファニエは横を向いたまま答えた。

「嫌でなければ」

今度は短い沈黙の後に、独り言ともとれる呟きが聞こえた。

「では、ファー兄さま、とお呼びした方がよいのでしょうか」

その可愛らしい呼び声に、思わず彼女に視線を戻す。彼女は問いかけるように小首を傾げた。

「それでいい、アリイ」

出会ってから二度目の彼からの呼びかけに、彼女はくすぐったそうに笑ったのだった。

朝飯を二人で食べて、島の見回りに行かなければいけないことを告げると、彼女は聞き分け良く、ここで一人で待っていると言った。病み上がりの彼女は連れて行けない。後ろ髪引かれる思いではあったが、行かないわけにはいかなかった。

急ぎ足で、それでも一日かけて見回り、持てるだけの木切れを縄でくくって担いで帰ってきた。

ヒスファニエは厨くじやに入る前に、泉に寄った。肌塗った泥を落とすためだった。さすがにこの季節に裸をさらして外を歩けば、虫に刺される。泥は虫除けだった。全裸になって頭から水をかぶり、適当に露を払って、下穿きをはいた。

木切れを厨くじやの外壁に立てかけてから扉を開くと、寝藁の上で蹲っていたアライが飛び跳ねるようにして駆け寄ってきて、抱きついた。「なんだ。どうした。ここには人を襲うような動物はいないぞ」

小さくて温かい体を抱き締めてやる。顔を見ようとすると、隠すようにヒスファニエの胸に擦りつける。生温い息が当たってくすぐったかった。

「怖い夢でも見たか」

子供じみた仕草がかわいくて笑って言うと、一度動きを止めて、今度は離れようとす。どうやら凶星だったらしい。肩を押さえて、有無を言わさず顔を見れば、下唇を突き出して、不満そうな、泣きそうな顔をしていた。

少し目元が腫れぼったいようだ。いない間に、一人で泣いていたのかもしなかった。

「ごめんな。寂しかったな」

抱き寄せて、宥めるように優しく何度も背中を叩いた。

とりあえず、他に人が来た痕跡はなかった。島のあちらこちらに仕掛けた罠にも、かかっているのは動物だけで、人の手が加えられ

た様子はなかった。

安心はできず、警戒を怠ることはできないが、ひとまずすることはした。木切れも、特徴的な絵柄のある物だけは、だいたい拾ってこれた。これで、もう少し彼女がここでの生活に慣れるまで、明日から暫くは傍にいてやれる。

ヒスファニエは意識的に明るい声を出して、彼女に話しかけた。

「畏に獲物がかかっていた。うまそうな野草も採ってきたし、それから、これは土産」

彼女から片手を離し、腰に縄で下げた籠から野葡萄を取り出す。

「甘かったぞ」

目の前に差し出してやると、そっとそれを掴み取る。ヒスファニエは彼女を抱き上げた。寝藁の上まで連れて行き、下ろす。

「さて、今日は久しぶりに違う味の飯にするか！」

「違う味？ 何を作るの？ 手伝います」

座ったまま見上げる彼女の手から一粒葡萄を摘み、彼女の唇に押し付ける。

「うん。そうしてもらうか。用意するから、それ食べてな」

口にした彼女が、目を見開く。

「甘い」

「そうだろう？」

ヒスファニエは笑って彼女の頬を撫ぜた。

桶に水を張って、そこで彼女に野草を洗わせた。ヒスファニエはその横で、さばいて肉だけにしてきたものを、一口大に切り分けた。この辺りが神域だということもあるが、それ以上に、肉食の動物が寄ってこないように、神殿の近くでは決して血の匂いのあるものを捨てないようになっていた。

肉が細かくなつたところで、彼女にナイフとまな板代わりの肉厚な大きな葉を渡した。

「切っておいてくれ」

そう言つて、肉を載せた別の葉を持つて立つて、背を向けた。わざとだった。ヒスファニエは彼女を試していた。

振り返りたい衝動を抑え、鍋に肉を落とし、底からゆっくりとかき混ぜた。

武器を手放し、無防備に背中をさらす。もちろん、非力な彼女に襲われても、軽くないなせるといふ打算の下だ。

ゆっくりと時間をかけて隙をつくり、不自然にならない程度の間をおいて、彼女へと体を向けた。ナイフを握った彼女は、目が合うと、ぱあつと笑った。慌ててナイフを下に置いて、大きな葉で野草を包むようにして両手で持ち上げ、かかげる。役に立てて嬉しいと、彼女は全身で言っていた。

「もう入れますか？」

ヒスファニエは頷いた。

「ああ。持つてきてくれ」

大事そうに持つてきた彼女に、顎で鍋を示して、自分で入れさせる。そのままヒスファニエの隣に立つて、鍋を覗き込んでいる。

「どんな味になるんですか？」

「さあ？」

「さあ？」

彼女は彼を見上げて、鸚鵡返しに聞き返した。

「どんな味になるかは、食べてみてのお楽しみだ。昨日までと違う食材を入れたから、違う味にはなるんじゃないか？」

「ええ？ それだけ？」

「それだけ」

彼女は驚いた顔をして、次いで感心した。

「あんまり美味しいから、何か特別な味付けをしているのかと期待していたの。入れて煮るだけだったなんて。とつても簡単なのに、すごいわ」

「本当だよな。俺も驚いているんだ。初めてにしては、よくできてるって」

彼女はまた驚いて、今度はにっこりと笑った。

「さすがファー兄さまね」

まったく屈託がない。そこには尊敬と信頼しかなかった。

ヒスファニエは胸が痛んだ。あまりに彼女が無邪気で、可愛くてたまらなかった。おたまを投げ出し、彼女を抱き上げて、頬にキスをする。それだけでは足りずに、頬ずりもした。

毎朝、ナイフで髭を剃ってはいるが、剃り残しも多い。彼女は嬉しそうにしながらも、ちよつと迷惑そうでもあった。それが楽しくて、つい何度も繰り返してしまう。

「もう、いや」

彼女はそう言つて、細い指でヒスファニエの頬を押さえつけた。その手にも頬をこすりつけて、ちくちくすると騒ぐ彼女の様子に、笑い声をあげた。

すとん、と腑に落ちるものがあった。

そう。ヒスファニエは、彼女を試したのではなかった。

恩讐を越えて、ただただ慕ってくれる彼女に、同じものを返したかっただけだったのだ。命をさらせるほど、信頼していると。

肌を触れ合わせ、笑いあい、彼女の瞳を覗きこみながら、彼は密かにその思いを噛み締めたのだった。

夜、いつものようにアライを腹に引寄せて横になると、いつまでたつてももぞもぞしている。

「眠くならないのか？」

「えーと、少しだけ」

体力が戻ってくれば、昼の睡眠で夜に眠れなくなってくるのは当たり前だ。けれど、ヒスファニエは今日は一日歩きどおしで、疲れで眠かった。とても彼女に付き合つてはいらなかった。

離れていく彼女を、ぐいっと抱き込み、欠伸を噛み殺しながら囁く。

「眠くなくても、目をつぶっておけ。朝になつても熱がなければ、明日は湯を沸かしてやるう。湯につかるのは体力を使うから、よく休んでおくんだ」

ヒスファニエは水をかぶっていれば問題ないが、病み上がりの彼女はそういうわけにはいかない。幸い、薪になる木切れはたくさん拾ってきた。あれを燃やすついでに湯を沸かせば一石二鳥だ。

彼女はぴたりと静かになった。

二日ほど前までと違って、触れても熱くなくなった心地よい体温に安らぎを感じる。あの、命の火が燃え尽きてしまふような熱さに、どれほど心配したことが。

「よかつたな、アライ」

心からこぼれおちたそれを、口に出して呟いたのか、呟かなかつたのか。彼は自分でもわからないうちに、深い泥に沈んでいくように、眠りに落ちていった。

翌朝、食事をすませると、ヒスファニエは石の斧を取り出してきて、木切れを竈かまどにくべられる大きさに叩き割った。

石斧は神官時代の物ではなく、恐らく代々の国王候補の誰かが作

った物だろうと思われた。鉄はほうつておけば、やがて錆びて使い物にならなくなる。だが石は朽ちないために、柄を代えただけですぐに使えるようになった。ナイフでは歯の立たない物に、これは非常に重宝していた。

他にもそんな物が厨くにはあふれていた。編んだ籠や桶、食器類もたくさんあった。ヒスファニエもアライがいなかったら、有り余る時間を潰すために、きつと何かを作成していたに違いなかった。

けれど、人間らしい痕跡があるのは、この周辺だけだ。

ユースティニア王家は年に一度、神殿と付属施設の整備と補修を行っている。エーランディアの血族が帰って来ても、すぐに生活が始められるように。ただし、基本的に最後の神官が出て行った時に残っていたものを守っているだけであり、それらも時と共に朽ちていく物も多かった。

実際、他の建物群は森に飲み込まれてしまった。ここには多くの神官が寝起きし、その生活を支える人々があり、神託を受けに来た者たちの宿泊施設もあった。また、多くの人々が集まってくるために、交易も盛んだったという。当時神殿島は、ゲシヤンでも有数の大都市だったと聞いている。

それが、主であった大神官がいなくなったために、あつという間に衰退し、今は誰一人住む者のいない無人島になってしまった。

ヒスファニエは、この荒々しくも神々しい緑滴る地を見る度に、人の世の無常と、王の責務を考えずにはいられなかった。王は、己の治める地を、決して見捨ててはいけないのだ。

彼は小半時斧を振るい、薪になったものを、少し坂を下ったところにある、沐浴室の外壁の下に口を開けている竈かまどの横に運んだ。焚きつけと火種も持ってきて、中に火を入れる用意もした。

ここは神官が祈りを捧げる前に体を清めていたのだろう。自分では沸かすのも後始末も面倒だから使おうとは思っていなかったが、きちんと整備はしてあるから、使えるはずだった。

アライは作業の間中、ヒスファニエのまわりをうろろろしては、

自分も手伝うと何度も言った。下ろしていた背中半ばの髪も、邪魔にならないように細い縄でくくって頭の上でまとめであった。本人はやる気満々だったが、細い首が丸見えになって、余計に頼りない感覚が増していた。

だから、もう少ししたらやってみようことがあるから、と言いついては、力仕事はけっしてさせなかった。それでも彼女は諦めることなく、今もそわそわと彼の後をついてきていた。

何かしたい、役に立ちたい、でも邪魔しちやいけない。そんなものが透けて見える仕事や行動や表情は、どれもが全部可愛くて、彼女に見守られた作業は少しも苦にならず、ヒスファニエにとって、むしろ楽しい一時となった。

「さて。手伝ってもらおうか」

ヒスファニエはアリイを連れて、浴室の中に入った。壁から突き出ている管からは、高低差を利用して泉からひいてある水が、流れ落ちるままになっていた。床に掘られた溝に流れ、そこから外に排水されている。管の側には可動の樋があり、それに水を受けさせると、人が一人入るには少々大きめな浴槽に注ぎ込むようになっていた。

「アリイに水の番を頼む。水がいつぱいになったら、樋を動かして外に流すんだ。俺は外で火を点けるから、時々中をかきまぜて、温度を確かめてくれるか」

樋を動かしてみさせ、彼女にそれができるのを確認して、かきまぜる用に大きなまま残してあった木切れを渡した。

「じゃあ、頼んだぞ」

「はい」

表情を引き締めて、彼女はこつくりと頷いた。

ヒスファニエは外に出て、竈かまどに火を入れた。

火が大きくなったところで、どんどん薪を入れて、横目でそれを見ながら、昨日洗って干してあった自分の上着の下の部分を切り取った。どうせ自分は着ないし、小さいアリイにはとても長い代物だ。

切っても十分膝の近くまで隠れるだろう。

切り取った分から、また掌二つ分くらいを切り分けた。これは体を洗って擦るための分で、残りは少々布地が少ないが、体を拭う用だ。何度か絞りながら使えば、使えないことはないだろうと思われる。

この島で何が一番足りないかという布地だった。動物の皮を使ってもいいが、なめすのに時間がかかる。やっているうちに一月たってしまうだろう。布を織るのも同じ理由で問題外だった。だいたいはヒスファニエも、さすがに糸を紡いだり織機を作ったりはできなかった。

アライなら何か知っているかもしれないが、やらせる気はなかった。あと20日ほどだ。それだけ我慢すれば、迎えが来るのだから。

ユースティニアとブリスティンは近いにもかかわらず、国交はない。それでも伝手が無いわけではなかった。王家はどこも姻戚関係にある。それを辿っていけば、彼女を無事に国に帰してやることのできるだろうと考えていた。

彼は知っている限りの血縁関係を頭の中に思い浮かべ、上の空で薪を足していた。

「ファー兄さま、お湯が沸きました！」

アライの弾んだ声が聞こえてきた。次に突っ込もうとしていたものを残り少ない薪の山に戻し、浴室に行った。中は湯気で蒸し暑くなっており、汗だくになったアライが、きらきらした表情でヒスファニエを待っていた。

ああ、失敗した、と彼は思った。彼女に無駄な体力を使わせる気はなかったのだ。

でもそんなことはおくびにも出さず、彼は湯の中に手を入れた。

「うん。いいだろう。ありがとうな、アライ。助かったよ」

「では、私は外に出ていますね」

彼女はヒスファニエが確かめている間にも、そろりそろりと戸口

まで動いており、悪戯に笑って、外に出ていこうとした。

「ちよつと待て。アライが入るんだ」

「私はファー兄さまの後でいいです」

そういい捨てて、とうとう走って逃げ出そうとした彼女を、ヒスファニエは追いかけて、苦もなくさつと捕まえ、抱き上げた。

「風呂が嫌いか？ アライは悪い子だな」

ヒスファニエは自分が小さい時に遊ぶのに夢中で、風呂に入るのを嫌がったのを思い出した。

「そんなんじゃありません！」

むきになる彼女がおかしくて、喉の奥でくつくつと笑う。

「だって、ファー兄さまが働いて沸かしたお風呂です。私、とても先には入れません」

ヒスファニエは風呂の縁にアライを抱えたまま座った。片手を伸ばして、置いてあつた小ぶりの桶をいくつも取っては湯を汲み上げた。た。

「これは上がり湯だ。あまり置いておくと冷めてしまつから気をつけろ」

「ファー兄さま」

まだ抗議しようとする彼女の口に指を当てて遮って、言い聞かす。「アライ、選べ。君が先に入るか、俺と一緒にいるか。すみからすみまで丁寧に洗って差し上げようか、我が姫？」

ん？ と首を傾げ、どうだとばかりに、にっこりと脅す。

ところがアライは顔を赤らめるところか、むうつとして、上目遣いに睨んできた。

「望むところです！ 私もファー兄さまの背中を流してさしあげます！」

これにはヒスファニエがたじろいだ。

「年頃の娘だろう。恥じらいを持って」

「どうせ見られています。寒かった時に、抱き締めてもらったのも覚えています。今更です」

何かを堪えるように、それでも、強い意志でヒスファニエを見詰める彼女に、どきりとした。腕の中にあつた、湿った吸いつくような肌を思い出す。

なにかおかしな気分になつて、ヒスファニエは彼女を直視できず、視線をそらしてしまつた。おかげで、ここぞとばかりに、膝に抱え上げた年下の女の子にたたまかけられてしまふ。

「それに、男の二言はどうかと思います、ファー兄さま」

言い返す言葉が見つからない。やりこめられても、怒りはわかなくなつた。それどころか、小さいはずのアリイが女であることに戸惑つて、逃げ出したかつた。彼女に欲情でもしてしまつたら、自己嫌悪に陥つて、しばらく立ち直れそうになかつた。

ヒスファニエは溜息をついて、負けを認めた。

「俺が悪かつた。調子にのつた。でも、これは君のために用意したんだ」

彼女は、向けられたヒスファニエまで切なくなるような笑顔を浮かべた。

「知つてます。ありがとうございます。だから、よけいに」

そこまで言つて、彼女は突然口をつぐんだ。うつむいて、唇を噛む。

「アリイ？」

彼女の顔を覗き込もうと、体を傾げた時だつた。突然彼女が体をひねつて、ヒスファニエを押しした。不意打ちに彼はバランスを崩して、堪えきれずに、彼女を抱えたまま湯船の中に落つこちた。

盛大に水柱があがる。頭まで沈んでしまふが、足が縁に引っかかつている上にアリイが腹の上にいるせいで、湯から顔が出せない。思わず湯を飲み込んでしまふ。

これはちよつと苦しい、と思ひながらも、それでも溺れる深さでないことは理解していたので、腕をどこかにつけないかと闇雲に動かした。そのうち、体の上のアリイが退き、細い腕に頭を引っぱりあげられた。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！ ああ、お兄さま、大丈夫？
どうしよう。ごめんなさい」

げぼげぼと咳き込むヒスファ二エの頭を抱え込み、背を撫でさすりながら、アライイが動？しきった涙声で謝る。

ヒスファ二エはアライイに体を預けて、しばらく苦しい咳をした。やっと治まってきて、息を整える。気付くとアライイの胸に自分の頬を押しつけており、その好ましい柔らかさに、ぎよっとして体を起こして離れると、

「ファー兄さま」

アライイは涙を浮かべてすがりついてきた。それすら艶かしく感じて、固まって動けなくなつたヒスファ二エの耳元で、ひいひいっとしゃくりあげる声が聞こえた。

子供が己の犯した悪さを後悔して泣く、そのままの響きだった。その瞬間、色めいた呪縛はとけた。

自分を心配して震える肩を抱き締める。

愛しかった。ただただ、彼女が愛しかった。少し顔を動かせば触れる彼女の首にキスをした。背中を軽く叩いてやる。

「大丈夫だ。この悪戯っ子め」

「ごめんなさい」

アライイは嗚咽につつかえながら言った。泣いている彼女を一人でここに置いていけば、罪悪感いっばいで泣き続けることだろう。せつかくの湯も、嫌な思い出になってしまつてしまつに違いない。

彼女を首から引きはがし、足の間に座らせ、苦笑交じりに提案する。

「わかった。背中を流してくれ。その帯でやってくれるか？」

外に先ほどの布を取りに行くことも考えたが、彼女を不安にさせるだけだろう。ここにあるものですませばいい。

彼女が急いで帯の結び目をとくの認めて、背を向けると、いくばくもなく湯を含ませたそれで、背を何度も拭われた。優しく撫でる感覚は気持ちよく、筋肉の強張りがとけていくようだった。

「あの、背中終わりました。こちらを向いてください」

頭だけ振り返ると、アライは使命感に燃えた真剣な顔をしていた。ヒスファニエは笑いたいのを我慢して、はいはい、と軽口をたたいて体の向きを変えた。すぐに腕を取られて、丁寧に拭われる。それから、首、胸とくる。ヒスファニエはいつのまにか気持ちよさに目をつぶって、湯船の縁に背を寄りかからせていた。

腹を拭ったところで手が止まった。終わりだと思つて目を開けると、アライは思いつめたように下穿きを凝視していた。どうやらまだ続きをしてくれるつもりだったようだ。だが、ヒスファニエはその視線の前に手を出した。

「交代だ。後ろを向いて。ほら、上着を脱いで」

おとなしく帯が渡され、背が向けられ、上着の下から滑らかな肌が現れるのを、彼は黙つて見詰めた。そこにあるのは確かに『女』の体だった。

ヒスファニエはアライの手つきを思い出しながら、同じようになるように彼女の背を洗った。その肌を撫でまわし、口付けたいのを隠しながら。

背が終わると、後ろから抱き込むようにして、手を伸ばして腕を拭つてやった。とても自分の目の色を彼女には見せられないと思つた。胸と腹も拭う。彼女が緊張に体を強張らせたのは感じ取つていた。それでも気付かないふりをして最後までやったのは、ヒスファニエが彼女の肌に触れたかったからだ。

俺は悪い大人だ、と思いつながら、彼女はこれで少しは懲りるべきだ、とも思つた。迂闊に口をすべらせて、無自覚に男を誘うのは危険だ。ヒスファニエでなければ、今頃襲われてもおかしくない。自衛する意識を持つてもらわなければ、そのヒスファニエだとて、いつか理性が弾け飛んでしまうかもしれない。

それだけは勘弁してもらいたい、と強く思わずにはいらなかった。彼女を傷つけるために拾ったのではない。彼は彼女を大事にしたかった。大切に愛しんで、甘えさせたかった。

「さあ、おしまいだ。あとは自分でやっておいで。髪もちゃんと洗うんだぞ」

帯を手に握らせ、彼女が脱いだ上着を持って、湯船から出た。

「そうだ、後ろを向いているから、その下穿きも脱げ。どうせ濡れたんだから、ついでに洗おう」

「自分で洗います」

「遠慮はいらないぞ。洗うのも力仕事だからな」

つい、少しだけ振り返って見てしまう。アリイは帯と手で胸元を隠すようにしていた。

「遠慮じゃありません！ これは、絶対に、自分で洗います！」

怒った口調だが、恥ずかしがっているのは良くわかった。

「今更、だるうに」

思わず呟くと、

「それとこれは違います！」

鬼気迫る様子で叫ばれた。

「わかった、わかった。噛み付くな。じゃあ、それはいいから。着替えを持ってくるよ」

ヒスファニエは背を向けたまま手を振って、笑いながら浴室を出た。

ヒスファニエは一足先に厨くしやに戻もどって盥たらいを持ち出し、泉で洗濯をしていた。

まず下穿きを先に洗ってから、いつも通りに濡れたままはき、それから上着にとりかかった。

砂利を踏む音に目を向けると、ヒスファニエの上着を着ただけのアリイが随分遠いところで立ち止まった。すんなりとした、太すぎず細すぎない健康的な足が眼福だった。ああ、いや、そうじゃないだろう、ちよつと裾を切りすぎたか、と心の中で一人で焦って反省した。

それにこの距離は、さすがの彼女もさっきの今で、ヒスファニエを警戒しているのだろう。いい傾向だと思っべきだったが、寂しく、これからはそう簡単に抱き締めて撫でまわせなくなるのが残念だった。

このありあまってあふれる愛情を、これからはどう発散しようか。表情は変えずに彼女を見ながら、盥たらいの中でうづく掌を何度か強く握った。

「こっちはもう終わる。自分で洗濯するんだらう？」

「はい。あの、それで、いらぬ布は、ありませんか」

彼女は唐突にかーつと顔を真っ赤にして、どこか必死に聞いてきた。

「布？ どのくらいだ？」

「えーと、このくらいのを、3枚か、できたら4枚くらい」

彼女が手で示したのはそれほど大きなものではなかった。彼女がまくりあげている袖を片方切り落とせばなんとかなりそうだった。

おいでおいでと手で呼び寄せる。彼女は少し躊躇ちゆうちゆうってから、足早に寄ってきた。裾を押さえながら、膝を地面について踵かかとに尻しりを乗せて、ヒスファニエの横にしゃがんだ。その腕を取って、折り返した

袖を伸ばす。

「袖を切り落とすから、ちょっと手を引っ込めてる」

「えっ？ だったら、私の服の裾を切ってください！」

彼女は慌てて手を引いた。

「濡れていていいのか？」

「ええと、と、とりあえずは」

水の中の自分の服を見て、しどろもどろに答える様子に、ヒスフアニエは笑った。

「ずり落ちて、どうせ邪魔だろう？ 切ってしまえば着やすくなるぞ」

「でも、これ以上切ったら、ファー兄さまが着られなくなってしまいます」

アリイは裾をいじった。気になっていたのだろう。

「それはもう、君のものだ。俺のお下がりで悪いけど」

「ファー兄さま」

アリイは困った顔をする。なしくずしにずっとそうなっていて、今も着ているのだから、否定できないのだろう。

ヒスフアニエがもう一度手を取っても、今度は逆らわなかった。

彼はナイフを取り出して切りながら、何の気なしに尋ねた。

「何に使うんだ？」

彼女の全身が、がちつと固まったのがわかった。驚いて顔を見ると、見えるところ全部が真っ赤になっていて、上目遣いに何かを囁いた。

「え？」

良く聞こえなくて聞き返すと、彼女は泣きそうな顔になって、大きく息を吸い込んだ。

「月の、もの、です！」

「あ。すまない」

反射的に謝り、視線を下げて布を切り分ける方へ没頭した。

「こんなものでいいか？」

「はい。ありがとうございます」

アライはそれを掴んで、茂みへと走っていった。足を動かすたびに裾が微妙にひるがえって、柔らかそうな腿がよく見えた。見てはいけないと思いつつ、目がそれから逸らせなかった。なにしろ、あの下には何もはいてないのだ、と思うとよけいに。

視界から消えて、彼はやっとうつむくことができ、深い溜息をついた。

「思ったより、子供じゃないのか……？」

まいった。これからどうすればいいのか。

ヒスファニエは弾む自分の心臓に気付き、溜息を繰り返すことしかできなかった。

洗った服を木の枝にひっかけていたら、ざっざっざつと勢いをつけて歩いてきたアライが、盥たらいの横にそのままの勢いで膝をついて座った。それを見て、服というものは、座ると後ろが尻の部分に取られて、思ったよりもずりあがるものだと理解した。下穿きをはいてないために、膝を地面につかないと、中が見えてしまう。あれでは足も痛いだろうし、力も入れにくいだろう。それに顔も普通を装おうとして、妙な表情になっていた。

「俺は沐浴室の竈かまどの火を見てくるよ」

「はい。行ってらっしゃいませ」

びよこん、と頭が上がってヒスファニエを見たのに、視線が合ったとたん、うろろると目が泳ぐ。その恥らった姿が、一度意識してしまったためか、子供には見えなくて、どきりとした。

「すぐに戻る」

そう言い置いて、背を向けた。

アライは背が小さい。ヒスファニエの胸の半ばまでもない。目が大きくてあどけない顔をしている。

けれど性格のせいかな、幼い感じはせず、凜とした美しさがある。

彼女は非力で女で病み上がりで、たいしたことはできない。それで

も、卑屈になつたり甘えたりせず、自分ができることを探してやるうとする。それがヒスファニエにはとても好ましく感じられた。

彼女といると、人間というものは、どんな血筋だとか、地位だとか、何ができるとかできないとか、もつと言えば大人だとか子供だとか、男だとか女だとか、そういったものすべて関係なく、対等なものなのだと感じる。

人は己の力を生かして、できないことは助け合つて、支え合つて生きていけばいいのだと。

ヒスファニエは彼女が来るまで孤独だった。恐らく、この島で一人で一月過ごすというのは、祝福を得るといふ以上に、その孤独の中で己を見つめなおし、王位への覚悟を決める意味合いがあるのだろう。

その意味で、ヒスファニエの試練は違うものになつてしまった。でも、一人では得られなかつただろう、もつと大きなものを彼女が教えてくれたと思う。

ヒスファニエはこれから民を支配しなければならないのだと思つていた。国を、彼らを、彼一人が全部背負つていかなければならぬのだと。それはどれほどの重圧であり、孤独であつたか。

だけど、きつとそれは違つたのだ。まだはつきりとは見えていなかったが、漠然とイメージすることはできていた。

ヒスファニエに王位につくという役目があるように、誰にもその人にしか果たせない役目があるのだろう。きつと、それを最大限に生かすようにすればいいのだ。

人には上も下もない。この偉大な自然の前では、一人で生きていけないほど、ちつばけなものではないのだから。だから、人は他の誰かと手を携えて生きていくのだ。

彼女の手を握る感触が掌によみがえり、心がかつと熱くなった。その熱があふれてとどめておけず、体の中から零れ落ちる。

「アライ」

ヒスファニエは立ち止まった。浅い息をする。苦しくてしかたな

かった。

認めないわけにはいかなかった。彼女がどんなに幼かろうと、仇敵の姫だろうと、ヒスファニエにとって、彼女こそが「女」なのだ。彼女には、どんな「女」にも感じたことのない愛しさと欲望をかきたてられる。

わかっていた。ブリスティンの血を引く女性を、ユースティニアの王となる自分が娶ることはできない。だからといって、彼には王位を投げ出すような無責任なこともできなかった。

現在のユースティニアには、王族の血を引く男は父と叔父と自分しかない。他は皆、十年前の戦いで死んでしまったのだ。ヒスファニエが王に立たなければ、姉の夫たちが王位をめぐって争うだろう。そうすれば、国は荒れてしまう。愛する母国に、ここ神殿島と同じ運命をたどらせるわけにはいかなかった。

今、これほど傍にいる彼女は、ヒスファニエにとって、最も手の届かない人なのだ。なのに、この激情をなだめる術が見つからない。「アライ」

どうしようもなく熱く囁いた名は、慟哭の響きを宿していた。

その日の午後は、お互いに、二人きりで狭い厨くちやに閉じこもっているのは落ち着かず、ヒスファニエは食材を調達してくると言つて外に出た。

周辺に張り巡らせた鳴子を確かめ、そうして歩きながら目に付いた野草を摘み、根菜を掘り起こし、腰の籠に放りこむ。ついでに薪になりそうな木も拾い、それも背負つた大きな籠に次々と入れた。

一人なら数日分があればいいし、何かあつても自分だけが我慢すればいい。だが、彼女がいるとなるとそうはいかない。ヒスファニエは最近、少し余裕を持てるように心掛けていた。

帰ると、彼女は外で壁に寄りかかつて、脱いだ上着を膝に置いていじつていた。そのあまりに眩しい光景に、ヒスファニエは静かに少し戻り、今度は途中の梢を荒っぽくどかし、足音も大きめにたてて近づいた。

彼女は慌てて上着を前から肩に掛け、困つたようにしながらも、それでも彼を見て嬉しそうに笑つた。

「おかえりなさいませ」

「ただいま。何をしていたんだ？」

座つたままの彼女に視線を合わせるために、ヒスファニエはしゃがんだ。うつかり下を見ると、彼女の腿が丸見えになってしまふからだった。

でもそれは逆効果だったらしい。近くなつた彼に、彼女は肩を竦めてうつむいて、少し緊張した様子を見せる。そして急に上着の陰から片手を出すと、目に付いたのである。裾を摘んで持ち上げ、今の状況をごまかすように、一所懸命説明を始めた。

「中で道具を見ていたら、針があつたんです。それで、裾がほどけないように、かがつていたんです」

見れば、裾が細く折り返され、茶色い糸で細かく縫つてある。

「糸もあつたのか」

「いいえ、髪の毛なんです。……すみません。気持ち悪かったですね」

説明しながら、急にしゅんとしてしまった彼女の頭に、思わず手をのせて、わしわしと撫でていた。

「そんなことはない。ありがとう。アライは器用だな」

彼女は上目遣いにヒスファニエの表情を確かめ、安心したように唇をゆるめた。

「あともう少しなんです。まだ外にいてもいいですか？」

「ああ。俺は中で休んでるから。冷える前に入れよ」

「はい。本当にもう少しですから」

ヒスファニエは一人で厨まぐろに入った。

彼が頭に触れても、彼女が少しも嫌がらなかったことに安堵しつつも、目にしっかりと焼きついてしまった、彼女の形の良い胸がどうにも脳裏にちらついて、彼はその場で両手で頭を抱えてしゃがみこんだ。

自分の気持ちを自覚してしまったとたん、それまで「妹だ」「娘だ」と誤魔化せていたものが、すべて意味を持って迫ってくる。彼は全身の血が沸き立つような感覚と、軽い自己嫌悪という相反するものを感じて、小さく唸った。

その夜は、さすがにいつものように彼女を抱き寄せては眠れなかった。膝を抱えるようにしてぎゅっとまるまっている彼女の横に身を横たえたが、ちっとも眠気が訪れない。まいったと思いつつ、彼女の呼吸に耳をすましていた。

だから気がついたのだ。時々息をつめては、その後に浅い呼吸を繰り返す。それはまるで、痛みを堪えているかのようだった。

ヒスファニエは起き上がって、こんなときのためにすぐに灯りが灯せるように、素焼きの器に盛った焚きつけと小さな木切れの山に火を点け、それを傍に置いて彼女の顔を覗きこんだ。

「具合が悪いのか？」

眉根を寄せて苦痛を浮かべた彼女が、目を開けて、それでも気丈に首を振る。

「大丈夫です」

それは全然大丈夫には見えぬ、彼は心配して彼女の頬に手を当てた。

「どうした。どこが苦しいんだ」

彼女はうつすらと微笑んで、彼の手に頬をこすりつけるようにして、また首を振った。

「アライ！」

彼は声を荒げた。ぐったりした様子に、いてもたってもいられなかったのだ。彼女は驚いて目を開け、彼の真剣な眼差しに、泣き笑いみたいな表情になった。

「時々、月のもの時にこうなるんです。お腹が痛いけれど、一晩我慢すれば、良くなりますから」

こんなに辛そうなのに、朝まで耐えるつもりなのか。

だからといって、ここには医者も、薬もない。ヒスファニエにはどうしてやることもできなかった。それでも聞かすにはいられなかった。

「俺に何かできることはないか」

彼女の瞳に躊躇いの色が見えた。彼はすかさず言った。

「アライ、どんなことでも言ってくれ。ここには君と俺の二人しかないんだ。俺の知らないことは君が教えてくれなければ、助けてやることさえできない。俺は君が苦しんでいるのを、ただ見ているのは嫌だ」

アライは視線を逸らして目をつぶって、一度乱れた息をしてから、声を絞り出すようにして喋った。

「温めてください。……嫌でなければ」

「嫌だなんて、どうして思うんだ」

質問や非難というより、愚痴だった。そんなこと、思うわけがな

いの。自分がそんな男だと思われているのが情けなく、腹立たしかった。

ヒスファニエはいつものように背中から彼女を抱き締めた。彼女の体の線に沿って足まで絡める。そんな場合ではないのに、自分の素肌に、彼女が着ている布一枚ごしに触れる感触に胸が高鳴った。体にまわした手は、痛いと言っていた腹に当ててみた。冷たいというほどではなかったが、確かに彼女の方が体温が低かった。

「だって、嫌じゃないですか？ 月のものがきている女なんて」「なぜ？」

「穢れているから」

確かにそんな話もある。月のものは穢れで、不浄だと。だから、その最中の女は船には乗せない。血の不浄が不運を招き寄せないようにだ。もしも乗っている間になってしまった場合は、別の小船に一人で乗せるか、結界をつくってその中に居させる。船の上ではそれが終わるまで、その女とは口もきかないのだ。

けれど、同時に祟めもする。その血が赤ん坊を育み、子を生み出すのだから。血の色である赤は最も神聖な色であった。それを命の危険もなく流す時期の女も。子孫繁栄と豊穰を願う祭りでは、必ずその時期の女が巫女を務める。

生と死、聖と穢れを一つの身の内に宿す「女」は、たぶんヒスファニエだけでなく、男にとって神秘の生き物だ。

似た形をしているのに、本質的に何かが違う。

同じ男をこんなふうに、抱き締めたいとは思わない。

いや、男だけではない。他のどんな女とも彼女は違う。ヒスファニエはそれを、今、嫌というほど腕の中の彼女に思い知らされていた。

なぜ彼女には、こんなに愛しいと、大切にしたいと、触れたいと、自分だけを感じて欲しいと、見て欲しいと、気も狂わんばかりに焦られるのだろう。

「穢れてなどいるものか」

胸の疼きをもてあまして、言葉に乗せて囁く。

すると、彼女が、腹に当てたヒスファニエの手の上に自分の手を重ね、ぎゅっと握ってきた。彼は手の甲を這う、その甘美な感覚に、思わず熱に浮かされた溜息をついた。

彼女に頼られ、甘えられている。それに、震えるほどの喜びを感じる。

この島には他に誰もいない。彼女は彼にすぎるしかないのだ。そうしなければ、生きることすら難しいのだから。

それでも、それがわかつていても、今だけは。

今だけは、彼女は俺のものだ。

ヒスファニエは自分からは身動きもせず、ただ彼女の体に添い続けた。そして、心狂わせる彼女の感触を静かに貪りながら、一晩中彼女に体温を与え続けたのだった。

翌日も彼女がだるそうにしているのかこつけて、思う存分彼女を抱き締めて、ゆったりとした一日を過ごした。

昼を過ぎた頃には元気が出てきていたが、心配だ、の一言で黙らせ、二人で並んでごろごろとしていた。

思えば、この島に来てから毎日忙しくて、一日たりとも休んだことなどなかった。こうしてみると、いかに自分が気を張って働きづめで疲れていたかがわかった。

ぼつりぼつりと当たり障りのない他愛のない話をしているうちに、眠ってしまっていたようで、水から浮き上がるように目を覚ますと、アライが隣にいなかった。

ヒスファニエは血の気がひくような不安にかられて、彼女の名前を呼びながら、厨を飛び出した。どこに探しにいこうか迷って立ちすくんだところを、当の彼女に呼び止められた。

「ファー兄さま」

桶を抱えて歩いてくる。そこへと駆け寄りながら、詰問口調で話しかける。

「どこへ行っていたんだ」

「今日はお水を汲みに行っていなかったと思って。起きたらきつと冷たいお水の方が美味しいと思つて。ごめんなさい。心配をかけると思えばなかったんです」

彼女は、しゅんとしてうつむきがちに答えた。

ヒスファニエは溜息をついた。彼女は悪くないだろう。泉へは自由に行つていいことになっている。過剰反応した自分が悪いのだ。

そういえば、初めて彼女を一人で置いて出かけた時に、帰つて来た彼に彼女が抱きついてきたと思ひ出す。彼女もきつとこんな気分だったのだろう。理由もなく、やみくもに不安で堪らなかった。

彼は彼女から桶を取り上げ、片腕で彼女の背を抱き寄せた。

「いや、俺が寝惚けていただけだ。ありがとう。今日は水のことを忘れていた」

彼女の確かなぬくもりに、動悸が治まっていく。とたんに現金なことに、喉の渴きを覚える。

「アリーの言うとおりだ。喉が渴いた。せつかくの水だ。さっそくいただこう」

ヒスファニエは彼女の肩を抱いたまま、く厨へと戻った。

水を飲んで人心地ついたヒスファニエの前にきちんと座って、ア
リーは上目遣いに見上げた。

「あおう、ファー兄さま、申し上げておきたいことがあるのですが」
あまりに真面目な様子に、ヒスファニエも身構える。何か嫌なこ
とを言われそうで聞きたくなかったが、そういうわけにもいかない
だろう。しかたなく、何気ない風を装って、なんだ、と話をうなが
した。

するとアリーはうつむいて自分の足のの上に視線を落とした。

「ファー兄さまは、私をいくつだと思っっていますか？」

いくつ？　いくつとはなんだ？

ヒスファニエはぼかんとして彼女を見つめた。それからゆっくり
と脳が動き出し、ああ、歳のことか、と合点がいく。

「あー。いくつなんだ？　俺より年下としか、考えてなかったんだ
が」

背は小さいが、けっこうしっかりしているし、それに時々、妙に
色気を感じる。しかし同性ならまだしも、女の歳ほど男にとってわ
からず、恐ろしいものはない。姉たちを通して学んだのは、どんな
女にも30を越えているとは言っではいけないということだった。

「お兄さまはいくつですか？」

「22だ」

「そうでしたか。私は18です」

「じゅっはち？」

ヒスファニエは意外な歳に、間拔けな声で繰り返した。上から下まで、とっくりと彼女を見る。とてもそうは見えない。なのに成人しているとは。

「私、この背ですから、いつまでたっても、誰からも子供扱いされて。もっと早く言えば良かったのですが、子供だと思ってたくさん面倒をみてくださってるのに、言い出し難くて。ごめんなさい」
アリイはすっかり縮こまって、申し訳なさそうにしていた。

「それはまったくいっこうにかまわないんだが」

なにかいろいろ、18の娘に言うには失礼なことを口にしていた気がしてきた。……だけじゃない。行動全部が、幼い子供向けだったような記憶が。いや、そのつもりだったんだが。

ヒスファニエは困って、首の後ろに意味もなく手を当てた。

「アリイこそ不愉快じゃなかったか」

「いいえ。ファー兄さまは本当に優しい方だと思っていました。それにつけこんでいるみたいで、ずっと後ろめたかったんです。本当にごめんなさい。これからは、もっと私にも用事を言いつけてください。こう見えても18ですから、水汲みだって平気ですし、一人で外に出ても、危ないことはしません」

途中から顔を上げ、握り拳で主張する彼女に、彼は途方に暮れた。彼女は18歳という年齢にふさわしい顔付きをしていた。つまりそれは、おいそれと抱っこしたり抱き締めたり頬ずりしたりしてはいけない、一人前の女性だということだった。

そう聞いてしまえば、どうしてあれほど子供だと信じていたのかわからないほど、艶やかでしっとりとした大人の色気を感じる。

ヒスファニエは彼女に見惚れながら、突然ふってわいた疑念に焦燥に駆られた。

「結婚しているのか」

彼女は目を見開き、ふるふると横に首をふった。

「婚約者も？」

それには彼女は一瞬止まってから、同じように否定した。それが

迷いに見えたのは、ヒスファニエがいるかもわからない相手に激しく嫉妬して、疑ってかかっているからかもしれない。なかった。

あるいは、王族の姫だ、彼女もルルシエのように、身分のある誰かの成人の儀の添い寝役を果たしていてもおかしくなかった。

それを問いただしたかった。けれど、もしそれを肯定されてしまったとしたら。

ヒスファニエはそこで一旦思考を止めた。それ以上は考えてはいけないとわかっていた。なのに、最も知りたいそれから意識が離れない。

そう。肯定されたら、ヒスファニエは彼女を抱くだろう。子供ではなく、しかも生娘でないというのなら、踏み止まる理由がない。嫉妬に狂って、そうするに違いない。

けれど、否定されたとしても、同じ思いに囚われそうな予感がしていた。

彼女が大人になるのは、もつとずっと遠い未来のことだと思っていた。彼女と別れて、彼女と過ごした日々が懐かしい思い出になる頃。ヒスファニエが王位に就き、政略結婚で幾人もの妃を娶り、小さな少女との思い出など、思い出しなくなる頃。

それなら、忘れられると思った。縁がなかったと諦められると思っていた。

けれど、彼女が国に戻れば、すぐにでも他の男のものになるのかもしれないと知った今では。

ヒスファニエは無表情に彼女を見下ろした。

彼女が欲しかった。手放したくなかった。一生この島から出るこゝとが叶わなくてもかまわなかった。彼女さえ傍にいてくれるなら。ヒスファニエのものにできるのなら。

そう願っているのに、自分は決してそうはしないことも知っていた。ただの一人の男になるには、ヒスファニエにはしがらみが多すぎる。それを捨てれば、生涯後悔し続けることがわかっていた。

彼は王にならなければならぬ。それが彼に与えられた役目なの

だから。

今もデュレインたちは、ヒスファ二工のために、神殿島を囲む海域を、命懸けで守ってくれているに違いない。なのに、そのヒスファ二工がすべてを投げ出すのは許されない。

「ごめんなさい」

アライが泣きそうに謝ってきた。彼は我に返って、瞬きをした。

「なにを謝ることがある？」

「怒っていらっしやるから」

別の理由で思いつめていた彼の態度を、彼女はそうとってしまっただのらう。

思いがばれなかったことに安堵しつつも、彼女に思い知らせたい気もした。何も知らずに無邪気に信頼を寄せてくる彼女に、苛立ちさえ覚えた。

馬鹿なことを考えているのは自分だと、わかっているのに。

彼は自嘲しつつ、彼女へと話しかけた。

「怒ってなど、いない」

「でも」

「少し寂しかったただけだ。これからは気軽にアライを抱っこできなくなるから」

どう返事をしたらいいのかわからない様子の彼女に、ヒスファ二工はわざと溜息をついてみせた。

「アライは抱き心地がいいからなあ」

笑いにまぎらわすつもりで、なんの気なしに言って、言うてからあまりに意味深な内容に、自分で驚いた。

本当に他意はない言葉だった。小さくて温かいアライに触れると、愛しさで胸が満たされ、とても気分が良くなる。

けれど、子供に言う分にはかまわなくても、成人した女性が相手となれば、とんでもなく色っぽい内容を含むことになるらう。

次にどういう態度をとればよいかわからなくなって、彼はただ彼女を見つめた。彼女は小さく唇を開き、驚いたように彼を見ていた。

その唇が、ゆつくりと綺麗な笑みの形をつくる。

「私も、ファー兄さまに抱っこされるのは好きです。とても安心するから」

ヒスファニエは息を呑んだ。

彼女は本当に、ただ無邪気なだけなのだろうか。その艶やかに匂いたつような笑みに、心拍数が上がる。

まるで、誘われているようだ。

ヒスファニエは無意識に彼女へと手を伸ばした。頬に触れても表情を変えない彼女に、囁きかける。

「では、また君を抱いてもかまわないか？」

彼女は花が開くように笑むと、頷いた。

頬に当てていた手を肩へと下ろして、そっと引寄せる。彼女はうながされるまま体を浮かせ、自然に手を上げて彼の首へとまわし、抱きついてくる。彼は彼女の腰を引寄せ、体が密着するようにしっかりと抱き締めた。

頬に当たる彼女の頭にすりより、その感触を楽しむ。

愛しくて、愛しくて、胸がきりきりと痛んだ。

彼女にとってヒスファニエは、警戒する必要もない、「兄」ではないのだろう。そうでなければ、年頃の娘が、こんなに無防備に男に抱きつくはずもない。

その事実にも胸が張り裂けそうだった。

それでもヒスファニエは静かに彼女の頭に唇を寄せ、彼女にわからないように口付けを落としたのだった。

「それと、もう一つお聞きしたいことがあるのです。あの、お話できないならば、無理にとは申しません。そうおっしゃってください」
アライは腕をゆるめてヒスファニエの体を押すようにして離れ、真剣に顔を覗きこんできた。

「ファー兄さまは、なぜこの島に一人でいらっしゃるのですか？」
ヒスファニエはどこまで話して良いものかとつさに判断がつかず、困って沈黙した。

あと二十日あまりで彼女とは別れる。彼女はブリステインの「姫」だ。その彼女が、ユースティニアの、しかも次期国王に助けられたなど、きつと知らない方がいい。

答えあぐねる彼に、説明が足りないと思ったのか、彼女は言葉を重ねた。

「あの、怒らないでくださいね？ 私、お兄さまがここに一人で置いていかれたと聞いたような覚えがあつて、だからずっと、何か犯罪を犯した人なのだと思つていたので」

「そんなこと、言つたか？」

「よく覚えていないのですが、たぶん、浜辺で拾つてもらつた時にも、ファー兄さまは怖い人に見えなくて。きつとなにかの間違いで罪を犯してしまつたんだろうつて」

あの時ならば、そんな話をしたかもしれない。全然覚えはなかったが。

ゲシャンでは、時に罪を犯した人間を島流しにする。たった一人で無人島に放り出すのだ。それは珍しいことではない。アライはそれと勘違いしたのだろう。

そして今も気遣わしげなのは、その疑いが晴れないからなのだろう。

そこには犯罪者に対する、恐れも蔑みもなかった。ヒスファニエ

に対する心配しかなかった。犯罪を犯しそうにもない人間が犯してしまつたとすれば、良心の呵責かしゃくさいなに苛さいまれているに違いないのだから。彼女が本当に聞きたいのは、この島にいる理由ではないのだろう。ヒスファニエが苦しんでいるか、いないか、それだけだ。

それが嬉しく、そして切ない。幸せで、苦しかった。しかし、彼はそういった感情は全部隠して、ただ事実だけを教えた。

「罪は犯していない。俺はここで時期を待っているだけだ」

「時期？」

「ある争いさかいで命を狙われるかもしれないから、ここに匿かくまわれているんだ」

大筋では間違っていない。それほど心配はしていなかったが、海の向こうでは、王位をめぐる政争が起きているかもしれないのだ。

「そうでしたか」

アリイはほつと息をついた。

「安心したか？」

からかうように言うと、キツと強気で見つめてくる。

「初めから、お兄さまが理由もなく恐ろしいことをする人だとは思っていません。でしたら、私は今ごろ、ここにこうしていられなかつたでしょう」

膝の上へのせ、抱っこしている年下の女の子に、また言い負かされてしまった。というか、窘たしなめられたのだろう。自分を貶おとしめるようなことを言うな、と。

ヒスファニエはくすくすと笑った。彼女は体の小ささ、顔の可愛らしさに似合わぬ、果敢さがある。時々、無謀なくらいに。

初めて会った時に、睨みつけられたことを思い出す。彼女の純粋さ、誇り高さはどれも好ましいが、それが、ふと心配になった。

こういった危あやうい強さを、ヒスファニエのように大事にしたいと思う男もいれば、折り取つて、ねじ伏せたいと思う男もいるだろう。彼は遠い目をしてしばらく考え込んだ。そもそも、彼が無事にこの島から出られるという保障はどこにもないのだ。その時、彼女を

巻き込むことだけはしたくない。

彼女が「姫」だというのなら、必ず迎えは来るだろう。死体なり、形見の品なりが見つかるまで、相当の期間捜索が続けられるはずだ。それがまだないのは、デュレインたちに足止めされているからかもしれない。

それはともかく、彼に何かあっても、しばらくの間、一人で生きていけるようにしてやらないといけない。非力なならば、せめて逃げ、隠れ、生き延びる術を教えておいてやらなければ。

「明日はこの付近を案内してやろう」

ヒスファニエは彼女に視線を戻して言った。

「あの葡萄は、それほど離れていないところになっているんだ。そこにも行こうか」

「はい」

彼女はにっこりとして頷く。その可愛い仕草に、彼は思わずいつものように、いい子いい子と撫でてしまったのだった。

翌日、ヒスファニエは彼女を神殿に案内した。彼女を拾ってから、忙しくてこちらには来ていなかった。ずっと空気の入れ替えはしていなかったのだが、淀むことなく、彼が初めてここに足を踏み入れた時と同じように、ひんやりとした静謐さが神殿内を支配していた。

「ここは」

思い当たったかのようなアリーの眩きに、頷いてやる。

「ああ。セレンティーアの大神殿だ」

「ここは神殿島ですね」

「そうだ」

アリーは祭壇の前まで歩いていった。正面には、セレンティーアが天界で神々と地上を支配しているレリーフが掲げられ、中央の高い位置には、かの神のシンボルである太陽の光を取り入れるために、ぼつんと丸窓があけられていた。

大神官はこの神殿の他の窓をしめきり、あの窓から差し込んでくる丸い光の中で、神の託宣を受け取っていたという。

アリイはその日の光を踏まないようにひざまずき、手を胸元で組み、頭を垂れた。彼女の清らかな姿に、ヒスファニアも自然と横にひざまずき、同じように頭を垂れていた。そうすると、浮かんでくる言葉があった。

彼女に出会えたことに感謝いたします。

胸の内で、本気で神に感謝を捧げた。実に10年ぶりのことだった。

10年前、戦に行く兄の無事を願い、しかしそれが叶えられなかった時に、ヒスファニアは神に祈るのをやめていた。

当時は、毎日毎日祈ったものだった。朝も昼も夜も。兄や戦士たちの無事を。ユースティニアの勝利を。幼かったヒスファニアには、それしかできなかったのだ。

けれど勝敗はそれまでと同じようにどっちとはつかず、そればかりか王太子であった兄までも失ってしまった。

神はヒスファニアの、ユースティニアの民の願いを聞き入れてくれる存在ではなかった。ヒスファニアは、そんな神を決して崇めたりするものかと、呪ってすらいいたのだ。

なのに、不思議なことに、こうしてひざまずいてみれば、そこには感謝しかなかった。

プリステインの姫とユースティニアの王子が会うことなど、普通ではありえない。しかも、憎しみではなく、信頼と愛情を持ってお互いに接することができるのは、奇跡だった。

彼は先に頭を上げ、彼女の横顔を見ながら待った。

やがて祈りを捧げ終わったアリイが、ヒスファニアを見上げて微笑んだ。純粹な好意だけが浮かんだそれは、儂いくらいに美しく、愛しさと同時に不安がこみあげた。彼女は今だけの存在で、一瞬後には夢や幻のように消えてしまうのではないかと感じたのだ。

だから彼は彼女を抱きとめたくなくて、でも、そうした瞬間に本

当に彼女を失ってしまう気がして、恐ろしさに、右腕を誘うように開いたきり、動けなくなつた。

彼が祈るような気持ちで見守る中、彼女はもつと綺麗に微笑んだ。そして、ゆるやかに動いて、彼の手へと彼女の手を重ねてきた。

重なつた小さな手が、確かな感触を伝えてくる。手の中のそれが消えてしまふ前に、彼は急いで彼女を引寄せ、腕の中に抱き締めた。彼女の腕が応えるように、ヒスファニエの背にまわつた。細い指が彼の背を這い、やがてしっかりと当てられる。

燃えるような恋慕が身の内から彼を苛んだ。

「アライ」

「はい」

無意識に彼女を呼んでいた。彼女が欲しかった。欲しくて欲しくてたまらなかつた。

なぜ、神は俺たちを出会させたのだろう。

これがただの偶然ではないのなら。真実、神の意味だというならば。

神が、アライを、俺に、真に賜つたというのならば。

ヒスファニエは彼女の頭に触れ、上を向かせた。彼女の瞳を見た。瞳から彼女の心の中を見透かして覗きたかつた。

神の真意を。いや、自分と同じ気持ちがないものかと、すぎるような気持ちで。

視線が絡む。そのとたん、彼の頭の中は真っ白になつた。

彼女の瞳に囚われる。

愛しい人。最愛の女。

神からの賜り物。

ヒスファニエは、突き動かされるままにアライの唇に口付けた。少し乾いた柔らかいそれを、己の唇で食む。腕の中で彼女が震えて、もつと強くしがみついていた。

「愛してる。君を愛しているんだ」

唇を押し当てたまま、囁いた。

続いて強く吸った彼女の唇が動くのに気付き、押し当てるだけに
変える。

「私もお慕いして……」

ヒスファニエはその意味を理解した瞬間、最後まで聞くだけの余
裕を持たず、彼女の言葉ごとその息を飲み込んでしまった。

それから二人は喜びに彩られた情熱のままに、静謐な神殿の中で
口付けをくりかえした。

いつしかその位置を音もなく変えた日の光が、彼らを祝福するよ
うに照らしだしていた。

アリイはあがった息で、浮かされてヒスファニエの名を呼んだ。

「ファー兄さま」

あまりに甘く蕩けた声にさらに体が熱くなり、ヒスファニエは動きを止めた。

これ以上ここにいたら、なしくずしに彼女の体を奪ってしまいうだった。

「ファー兄さま？」

潤んだ瞳で見上げてくる彼女の唇は赤く熟れていて、見るだけで彼の息も乱れてしまう。

ヒスファニエは、彼女の頭をぐつと自分の胸に押し付けて見えなくすると、そのまま背中を支え、もう片方の腕を膝裏に入れて抱えて立ち上がった。

「外に行こうか」

急なことに驚いた様子の彼女に、余裕なく、ぶつきらぼうに意志を伝える。

「…はい」

彼女はおとなしく彼の胸によりそった。彼女のすべらかな肌と柔らかい髪が触れてくすぐったく、胸をかき乱す。きつと暴れ狂っている心臓の音は、彼女にも聞こえているに違いなかった。

それで良かった。もう、彼女に気持ちを隠すつもりはなかった。これから告げなければならぬ己の真実の名を聞いても、彼女がヒスファニエの気持ちを疑うことがないように。この思いを、きちんとして伝えたいと思っていた。

外は緑に輝いていた。二人きりだった場所から、広く開けた場所に出て、少しうわずっていた気持ちが鎮まる。

ヒスファニエはどこへとも特には考えず、それでも近くの森の中

に倒木があつたのを思い出し、そちらへと向かった。緑深い木々の中を数分歩き、倒れた木一本分、地面に光が当たっている場所に出る。

倒木の表面が濡れていないことを確かめ、ヒスファニエは彼女をそこに降ろして座らせた。自分もその横に腰かける。そして、膝の上にある彼女の手を握った。

横顔に彼女の視線を感じたが、そちらへは向かなかつた。少し先に咲いている紫色の花を見ながら、どうしても告げておかなければならないことを口にした。

「俺の名は、ヒスファニエ。ヒスファニエ・ユースティニア」

彼は続けて言葉を吐き出すことができず、一度大きく息をついた。「ユースティニアの王太子だ。ここへは、王位に就く資格を得るために、試練を受けに来た」

それを聞いても、アライはぴくりとも動かなかつた。息すらしていかないかのように静かだった。

ヒスファニエも動かずにじっとしていた。彼女を見る勇気が持たず、時折風に踊る花と、地面に映る葉の影を眺めていた。隣りあって座っているのに、さっきまであれほど近かつた心が遠く離れて、彼女が何を考えているのか欠片もわからなかつた。全身の神経を尖らせて、彼女の気配だけをさぐっていた。

と。彼女がひきつった息をした。

触れている腕がゆれたのに反射的に見遣ると、彼女は呆然と宙を見て、ぽろぽろと涙をこぼしていた。

ヒスファニエは驚いて手を伸ばし、彼女の頬をぬぐって包んだ。

彼女の瞳が向けられる。彼と視線が合ったとたん、その顔が悲しげに歪められ、彼女は目をつぶって、こらえきれずにしゃくりあげた。「アライ」

ヒスファニエはどうしてよいのかわからず、おろおろと彼女の頬や頭や肩や腕を撫でさすった。彼女はそれを拒みはしなかつたが、彼に頼ってこようともしなかつた。ただ瞳を閉ざして、声を殺して

泣き続ける。

彼女がなぜ泣いているのか、わかるようで、本当のところはわからなかった。なぜこんな泣き方をするのかも。それでも、見ているだけで彼まで辛くなってくるその涙を、なんとかしたかった。

「アライ。アライ。すまない。迂闊なことをした。君を傷つけた。本当に、すまなかった」

痛みと疼きを訴える自分の胸に彼女を抱きこめば、彼女の涙もこの痛みも消える気がした。けれどそんな風に彼女に触れていいのかも、もうよくわからなかった。

「嫌なら、二度としない。君の望まないことはしない」

彼女は唇を噛み、ぱつと目を開けた。そして両腕をふりあげて、彼の手を勢いよくはらった。怒りに燃えた目で、しゃくりあげ、言葉を途切れさせながら叫ぶ。

「私の父は、王弟アフル・ユースティニアに殺された！」

ヒスファニエは息を呑んだ。彼女が敵国の姫なのだと、初めて思い知った気がした。

「父の名はラダト・プリステイン。当時の王太子を殺した將軍」

その名に、彼はわずかに顔をしかめた。反射的に積年の恨みと怒りを呼び起こされたのだ。

挑むように見つめていた彼女の瞳が、力なく翳る。

「私は仇の娘です」

そしてうつむいて彼から視線をそらした。彼を拒絶した強さはどこにもなかった。しゃくりあげる彼女は、いつもよりさらに小さく見えた。

「だから？」

ヒスファニエは尋ねた。急にわきおこった苛立ちそのままに、刺々しい声だった。

「だから君を憎むと？ 君は？ 君はそれで、俺を殺したいと思ったのか？」

「そんなわけ」

彼女は跳ねるように顔を上げ、ヒスファニエと視線が合うと、途中で言葉を途切れさせた。そしてまた、うなだれて下を向いた。その間もぱたりぱたりと涙を落としては、鼻をすすりあげている。

そうしている彼女はぐしゃぐしゃで、たぶんみつともない顔をしないで、だけど、それでも、どうしようもなくヒスファニエの心を惹きつける。そんな顔すら愛しいとしか感じない。いたいけなその姿を、独り占めしたいとしか。

なぜなら、その涙は、ヒスファニエのせいであり、ヒスファニエのためなのだから。あんな告白よりも、言葉をとまなわなない涙こそが、彼女の心を雄弁に語っていた。

それに思い当たった時、彼は言い方を間違っていたことに気付いた。彼女のある言葉が聞き取れたんじゃないと思ったそれは、まさに先に彼が彼女に言ったものと同じだったのだ。

この気持ちを伝えたいと、余さず知って欲しいと思っていたのに、それより先に、自分は敵国の仇だと伝え、それでも本当に愛せるのかとつきつけてしまった。

自分のあまりの愚かさ、ヒスファニエはゆっくりと横に首を振り、溜息をついた。正しい答えが欲しいなら、正しい質問が必要だと言ったのは、いつの時代のどこの島の賢者だったか。

どのくらい余裕がなかったことか。話し合いの基本さえ失念していたなんて。アリイには、それほど心をゆすぶられてやまない。いつでも平静でいられない。だからといって、それに溺れて、彼女を傷つけては元も子もなかった。

「すまなかった」

彼はもう一度謝った。今度は戸惑いではなく、心からの謝罪をこめて。

倒木から腰を上げ、彼女の前に膝をつき、下から彼女の顔をのぞきこむ。顔をそらす彼女の両手を取り、それぞれを握りしめる。

「お願いだ。俺のために国を捨ててくれ」

彼女は驚いて目を見開き、彼を見た。

「名も捨てて、ただのアリイとして俺の傍にいてくれ」

ヒスファニエの心の底からの願いに、しかし彼女は悲しげに微笑んだ。

「許されるわけがありません」

ヒスファニエは眉間を寄せた。そんなのはわかっていた。彼女と彼以外の誰も祝福はしないだろうと。

「それでも」

握った手に力を込める。

「正妃さまがいらっしゃるのでしょうか？」

あれほど妃にしたら大切にしなければと考えていたルルシエのこなど、今の今まで、彼女に指摘されるまで思い出しもなかった。大好きな従姉妹だったが、それ以上ではなかった。女として見ていなかったと、はっきりと悟った。

それでも、彼女を娶らないという選択肢は、彼に許されていないかった。だから正直に彼女に教えた。

「候補が」

彼女はそれに、冷静に他の女のことまで問うてきた。

「側妃さまも？」

「3人決まっている」

「名もない、後ろ盾もない娘が、本当にあなたの傍にあがれるとでも？」

それまで憤ましかに聞いていた彼女は、最後に挑むように言った。そこに、嫉妬がほの見えた気がした。

ヒスファニエは不謹慎だと思いつつも、喜びがじわりと胸に湧き出すのを止めることができなかった。

嫉妬するほど彼女に愛されているという自信が、ならば絶対に手放すものかという決意をうながす。

「君は、この神殿島に、試練の期間に流れ着いた。神からの賜りものだ。神が俺に与え給うた、俺の最愛の女だ」

彼女の瞳が揺れた。止まりかかっていた涙が、またこぼれだした。

「そんなの」

そう言ったきり、言葉を詰まらせた彼女に尋ねる。

「では、なぜ、君はここにいる？」

彼は、また目をそらそうとした彼女の頬をおさえ、無理に視線を合わせた。その瞳をしっかり見つめて、言い聞かせる。

「俺の子を生むためだ。次のユースティニアの王を」

「そんな夢物語、うまくいくわけが」

彼女の声は、涙に震えてかすれた。それに力強く答える。

「うまくいかせる」

もちろん他の妃の許にも通わなければならない。それでも、彼が子を生ませるのだ。道は必ずあるはずだった。

実際、ヒスファニエの兄弟は、正妃以外の生んだ男児は一人もまともに育たなかった。死産か、生まれてすぐに死んだ。そのすべてが偶然とは思えなかった。

現在の母は王太子の生母して地位を得ているが、本来はたいした後ろ盾もない小貴族の娘だった。それを父が初めは側妃として召し上げたのだ。

それがどんなことだったのか、ヒスファニエは目の覚めるような思いで理解した。王族の男児は多くが短命だ。戦で失われるからだ。王には自分の息子を多く生ませる義務がある。そのための側妃たちなのだ。その義務に背き、恐らく我が子を殺してまで父が為したこと。自分もまた、父と同じことをしようとしているのかもしれないかった。

彼の掌の中で、彼女は苦しげに目をつぶった。

「私、きつと嫌な女になります。あなたも厭あきれるほどの」

かわいいことを言うと思った。ヒスファニエの胸が高鳴ってしかたなくなる。

「嫉妬してくれるのか？」

高揚した気分のままからかった。彼女はすぐに目を開けて、睨みつけてきた。

「嫉妬します！ 今だって！ あなたが他の女に触るなんて、いや！」

ヒスファニエは笑った。思わず、声をあげて。

アリイは眦を吊り上げて、本気で怒った。彼の手をふりはらおうとしながら、勢い良く立ち上がる。

「きらい！ だいつきらい！！」

けれど、ヒスファニエは彼女の手を強く掴んで離さなかった。

「いや。いや。いやっ」

そう叫んで暴れる彼女を難なく引寄せ、羽交い絞めに抱きしめる。非力な彼女に叩かれても、痛くなどなかった。思いがけない動きで腕の中で身をよじる感覚が、艶めいた妄想を助長する。彼は彼女の耳元で、それを隠しもしない声音で囁いた。

「愛しているのは、君だけだ」

その途端、すとん、と彼女の体から力が抜けた。

「アリイ、愛してる」

彼女は無抵抗にヒスファニエに体をあずけて立ちつくして、盛大に鼻をすすりあげた。ひいひいと、しゃくりあげる。えっえっと息が乱れて苦しそうだっただけ。

そんな彼女の様子に余裕ができた彼は、手近にあった掌半分ほどの丸い葉を摘むと、彼女の鼻に押し当てた。

「ほら、かんで」

アリイは自分でやろうと手を上げたが、彼はそれを許さず、有無を言わせぬ笑みでうながす。彼女は恥ずかしがって、いやですと訴えた。

「だったら言っただけでいい。ヒスファニエの妻にして、て」

ん？ と首を傾げて要求すれば、目を丸くして、見えるところ全部、見る間に真っ赤になっていった。

それを見て、ヒスファニエは機嫌よく喉の奥で笑った。そして葉を彼女の手を持たせると、体を少し離して、チチチチ、と鳴いた鳥を探して顔をめぐらせた。

彼が見ていないうちに、胸元でアライが鼻をかみ終わるのを待って、穏やかに話を続ける。

「月のものが終わったら、返事をくれないか」

「わ、わたし」

乱れた息に、そこで一度止まってしまった彼女の言葉を、うんと頷いてさえぎり、

「わかつてる。でも、良く考えてから返事をくれ。得るものだけでなく、失うものものことも考えて」

説得で彼女の同意を得ることは、恐らく簡単だろう。このまま勢いで押し切れることもできる。だけど、そうしてはいけないと思った。彼女はすべてを捨てることになるのだ。国も身分も過去も、その名前さえ。一時の感情に流されて選んで欲しくなかった。それでは、そう遠くない未来に、すぐに終わりがくるとわかっていた。

きつと険しい道になる。後悔する日もあるに違いない。生半可な覚悟では、その先には彼女の身の破滅しなくなってしまうだろう。泣いてもいい。後悔してもいい。ヒスファニエをなじってくれてもかまわない。そうしても、それでも、共に生きるのだと思いつめていてくれれば。

ヒスファニエには絶対に彼女を手放す気はないから。全力で守って、道を切り開いてみせる。

もつとも、ヒスファニエは彼女に断られるとは思っていなかった。そして、もしも断られた時は、どう諦めればいいのか、見当もつかなかった。

目元を真っ赤に泣き腫らした彼女は、いつもよりさらに幼く見えた。胸の奥が痺れて、頭を撫でずにはいられなかった。

「それまでは、俺は兄で、アライは妹だ。もちろん、アライが断つたとしても、君は俺の大切な妹に変わりはない」

アライが咄嗟に口を開こうとしたのを、彼女の唇に指を付けて止め、ニツと笑ってみせる。

「さて、我が麗しの妹君にご提案したいことが。ここから少し歩け

ば、例の葡萄の園そのに行けませんが。食いしん坊さん、ご案内してさしあげましょうか？」

おどけたヒスファニエを、彼女はしばらく物言いたげに見ていたが、そのうち、くすりと笑った。同じ調子で返してくる。

「まあ、それは楽しみ。ぜひご案内くださいな、大食らいさま」

最後まで何事もなく言い切ったところで、彼女は涙の名残の小さなしゃっくりをした。ひゃう、と聞こえた可愛いそれに、思わず二人で目を見合わせて、おかしくなって笑い出す。

アリイは声をたてて笑いながら、ヒスファニエに抱きついた。彼も優しく抱き包くむむ。そうして声を合わせて無邪気に笑いあう、二人の声が木々の間に響いたのだった。

翌日から毎朝神殿へ行き、神に祈りを捧げるのが二人の日課になった。

ただ、大人になったヒスファニエは、もう神に願うことはなかった。幼く非力な子供ではなくなった今では、願うより先にすべきことがある。できることすらない者に、好機をつかむことも、助力を期待することも、できるわけがない。

ヒスファニエは意識ではそう考えていたが、己でも気付けない心の奥底では、本当は神に願うことを恐れていた。本気で望み、願ったことこそ、叶わないものなのだ。願ってしまえば、また今度も叶わなくなってしまうのではないかと。

彼はそのかわり、その不安を消すように、たくさんの感謝を捧げた。

彼女に出会えたことを、彼女に愛されたことを、彼女と共にあれらることを、彼女が生まれてきてくれたことを。

ただ、そこに彼女がいて微笑んでくれる。たったそれだけのことだが、感謝してもしきれぬ、かけがえのないものとなっていた。

ヒスファニエは体力を取り戻した彼女に、神殿のまわりから徐々に案内して、何がどこで手に入るのかを教えていった。

礼拝を終えると、手をつなぎ、ゆっくりとあたりを観察しながら散策する。彼女と歩く緑深い島は、一人で食料を調達していた時と違い、どこを歩いても生き生きと輝いて見えた。

彼女は好奇心旺盛で、ヒスファニエのすることは、なんでもやってみてみたがった。そうして彼を知ろうとしているようだった。簡単な罫の仕掛け方や、肉のさばき方、火の熾し方、水の探し方、そういったものを、二人で楽しんで行った。二人で同じことをする。それが嬉しくてしかたなかった。

つないだ手、見交わす視線、自然とこぼれる微笑み。それ以上の

体の触れ合いはなくても、心は常に共にあるうとしていた。

二人は穏やかに過ごしながら、ゆっくりとその心を定めていった。相手に対する信頼が増し、迷いがなくなつてゆき、ゆるぎない愛情がつのつていく。

そして3日後の夜、彼女は彼の目をまっすぐ見つめながら告げた。「私をヒスファニエさまの妻にしてください」と。

彼は優しく笑んで、彼女の頭を撫ぜた。そつと髪を梳きおろす。

「では、明日、身を清めてから神殿に行こう。神にこの結婚をご報告申し上げ、誓いをたてよう。二人だけの結婚式となるが、いいか？」

本来は神官の介添えが必要となる儀式だった。思つてもみながつた申し出に、アライは驚きつつも、すぐに泣きそつに笑つて頷いた。「はい」

それ以上言葉にならないのだろう。ヒスファニエを一心にみつめる瞳は物言いたげに揺れていたが、彼女はそう答えたきりだった。彼もそれ以上は何も言わなかった。

ただいつもの通り抱き寄せて、身を寄せ合つて眠りについたのでつた。

朝から二人は言葉少なだった。目が合うと、言葉より先に、にこりと微笑が浮かび、それだけで胸がいつぱいになる。

アライが厨くちやの中を掃除し、寝藁を替えている間に、ヒスファニエは再び湯を沸かした。

準備がすむと順番に身を清めた。髪をまとめるのに時間がかかるだろうからと、アライを先に入らせたのだが、ヒスファニエが出てくると、彼女は複雑に髪を結い上げ、白い花を飾っていた。

その清楚な姿に見惚れ、彼の足が止まった。彼女はいつまでもそつとして見ている彼に、恥ずかしそつにだんだんとうつむいていつて、とうとう不安そつに聞いた。

「おかしいですか？」

我に返って、ヒスファニエはすぐに彼女に歩み寄った。

「いや。とてもきれいだ」

彼女に身を寄せ、髪型が崩れないようにそつと手を触れると、甘い香りがした。どこかで何度か嗅いだ覚えのあるものだった。どこでだったか記憶をたぐりながら尋ねる。

「この花の香りは知っている。なんという花だ？」

「ハルファといいます」

どこか沈んだ感じのする声に彼女を見下ろせば、伏せたままの目元がやはり寂しげで、どうした？ と頬を撫でて聞く。

彼女は目を上げて、ふわりと笑って、なんでもありません、と言った。その透明な美しさに、ヒスファニエは心臓をわしづかみにされた。全身が疼いて、我慢できずに、性急に口付けた。

あの日以来の口付けだった。すぐに彼女の温かく小さな舌を探し出し、絡め取る。不慣れながらも素直に応じる彼女を、溺れるように貪った。

俺のものだ、と思う。もう、けっして離すものか、と。

夢中で、もつと深くと彼女の頭をかき抱こうとして、すべすべとした白い花に触れ、はつとして顔を離す。女性の声が耳の奥によみがえっていた。

『触れてはダメよ、ヒスファニエ。この髪をといて、この花を抜いてもいいのは、夫となる人だけなんだから』

一番上の姉だっただろうか。幼かったヒスファニエが、姉の結婚式の後、別れの挨拶をした時に、この良い香りのする花に興味を引かれて触れようとして、言われた言葉だった。

「花嫁の花か」

思わず呟くと、うつとりしていた彼女は瞬時に顔を強張らせ、目をそらした。

「ごめんなさい」

「なにを謝る？」

彼女はただ横に首を振って、手を頭にやって、花を引き抜こうと

した。その手を咄嗟に握って止める。

「なにをしてるんだ。よく似合っているのに」

「私、ずうずうしいことを」

涙を堪えるような声だった。ヒスファニエは彼女の意図を理解して、優しく、けれども有無を言わさぬ強さで抱き締めた。

「引け目に思うことはない。君は俺が心から望んで妻にするんだ。君が俺のために花嫁の装いをしてくれて、とても嬉しい」

本当に、目頭が熱くなるほど嬉しく、誇らしかった。

本来なら、一国の王子と王女だ、もつときらびやかな衣裳で、国中の祝福を浴びて、神に誓っていてもおかしくないのだ。

けれど、ヒスファニエはこれで充分だと思った。彼は上着を着ていないし、彼女も着のみ着のままだ。いっそ平民の結婚式よりも粗末だろう。それでも、こうして花嫁の花を髪に挿した彼女は美しく、たし、誰が祝福してくれなくても、きっと神は寿いでくれるだろう。

そしてなにより、こうして愛する女性が彼の妻となることを望んでいてくれる。それ以上の何が必要だというのだろう。

ヒスファニエは身を離して屈んで、アリーの膝裏に腕をかけて抱き上げた。急なことに、彼女が小さな悲鳴をあげ、慌てて彼の首に腕をまわし、抱きついてくる。

これ以上、一秒でも過ぎていくのが惜しかった。はやく彼女を彼だけのものにしたかった。

「神の祝福を受けに行こう」

アリーはこくりと頷いて彼の胸元に顔を伏せた。

ヒスファニエは彼女の温もりと腕にかかる重さを、この上もない幸せだと感じたのだった。

神殿の他の窓も扉も締め切り、丸窓から射し込む日の光の前で跪き、二人は手を繋いで、その光の中へと手を差し入れた。

「私、ヒスファニエ・ユースティニアは、神から賜りし娘アリーを

妻とし、いついかなる時も彼女を愛し、敬い、命を懸けて守り、命あるかぎり共に生きること誓います」

誓いの言葉に定型はない。ただ、その心そのままに神に誓いを立てる。ただし、その誓いは魂を縛り、破れば黒い傷となって魂に刻み込まれるという。やがて死を迎え肉体を脱ぎ捨てた時、裏切りを行った痕は誰の目にも明らかになり、魂は神から相応の報いを与えられることになる。

故に、誓いはもつと如何様にも取れる言い方をされることが多い。例えば、「この身に彼女への愛がある限り」などという文句が入れられたりするのだ。

まして国王となる身ならば、誓いなどたてない。誓いに縛られて国益を損なうことを避けるために、ただ、結婚を宣言するにとどめるものだ。

それから言えば、ヒスファニエの誓いは破格だった。死して後のことは神の手にゆだねられるために、人は誓ってはならないとされている。だから彼は、人に許されたすべてで、彼女を愛すると誓った。

国王候補として無責任な行いをしているとは、ヒスファニエは思わなかった。彼女は神から賜った大切な女だ。なにもかも彼に差し出してくれようとしている彼女に報いるには、彼のすべてを懸けるのは当然だった。

彼の誓いを聞くアリの指に、力が込められたのがわかった。それを握り返すと、今度は彼女が誓いを口にした。

「私、アリエイラ・ブリスティンはこの名を捨て、神がヒスファニエさまに与えられた妻として生き、彼を生涯ただ一人の夫として、命あるかぎり彼を愛し、添い遂げることを誓います」

この時、彼は初めて彼女の本当の名前を知った。アリエイラは『^{アリエイラ}暁』を意味する。夜明けの光、それはとても彼女に相応しく思えたことに、この島の恐ろしいほどに美しい黎明を、何度も見た今ではよけいに。

アリエイラという名を捨てたといつても、これから先、彼女を呼ぶ度に、きつと心の中では、闇を切り裂くあの光を思い浮かべるのだらうと、ヒスファニエは思った。

「我が神よ。セレンティアーアよ。我らが誓いを聞こし召し、見そなわし給え。我ら御大神おんたいしんの僕しもへ、この誓いに背くことは決してありません。どうか我らの誓いに慈悲と祝福を願い奉り申しあげます」

そして、二人そろって額突ぬかすいた。

ゲシャン海域では、頭を垂れるのは神に対してのみである。人には下げる代わりに、握り合わせた手を眼前まで上げることによつて敬意を表する。神とはそれほどに唯一絶対の存在だった。

ゆっくりと身を起こし、彼は丸い光から、アライへと視線を移した。彼女も同じように彼を見上げてくる。

言葉はいらなかった。交わった視線で、お互いの愛情が心に沁みるように感じられた。

「俺のアリエット」

そう呼ぶと、彼女は柔らかな清らかな愛らしい微笑を浮かべた。

「はい。ヒスファニエさま」

「誓いはたてられた。君は、私の妻だ」

「はい。…はい」

うつすらと涙を浮かべ、胸いっぱいという様子で二度頷いた彼女に、ヒスファニエはふっと笑って尋ねる。

「夫とは呼んでくれないのか？」

握った手の指を動かし、彼女の手をくすぐるように撫ぜ、催促する。

彼女は恥ずかしそうに、それでも幸せそうに笑って、小さな声で囁いた。

「我が夫、ヒスファニエさま」

彼女が瞬きをすると、たまっていた涙がぼろりぼろりと零れた。

ヒスファニエは顔を寄せ、涙の後を唇で吸い取った。そうしながら、返事をする。

「ああ。アライ」

そうして、お互いに惹きつけられるようにして唇を交わす。

厚い石壁に囲まれた、葉擦れの音も、鳥の声さえ聞こえない神聖な静寂の中で、確かに二人の声は、神に届いたかに思えたのだった。

ヒスファニエが目を覚ました時、アライはまだぐっすりと眠っていた。

壁の隙間から入ってくる光に、アライの首筋に自分が付けた跡が見え、彼は満たされた思いでそれを見つめた。

光の射し込み方で、いつもより日の位置が高いのがわかる。ヒスファニエもだいぶ寝坊だ。彼女は起きる気配もない。随分無理をさせた自覚はあるから、当たり前だろう。

意識がまったくくない様子で、健やかな寝息をたてている彼女は、いつもよりさらに幼い表情をしていた。

けれど、昨日、ヒスファニエの愛撫に彼女が見せた顔や、あげた声は、果てしなく艶っぽく、吸い付くような肌と、小さくはあつても女性として花開いた体とあいまって、激しく彼を惹きつけた。

この表情の下に、あの顔がひそんでいるのだと思うと、昨夜あんなに触れたのに、まだ足りないと感じてしまう。

同時に、この眠りを守ってやりたいとも思わせられ、アライに対する愛しさが生み出す二律背反の感情に、息苦しくなった。

「愛してる」

ヒスファニエは数分に及ぶ葛藤の末に小声で囁くと、まろやかな線を描く彼女の頬に、唇を落とした。

アライの寝顔を見ているうちに、どうにも平静でいられなくなり、そっと起き上がって水汲みに出かけた。

外の空気でも吸えば少しは頭が冷えるだろうと思ったのに、彼女から離れたら離れたで気になって、さっさと厨やぐらに帰った。

目覚めて俺がいなければ、きつと不安な思いをさせる。……いや、彼が不安だった。

彼女を初めて抱き締めて眠った時と同じに。手を離れた途端、失

つてしまいそうで。

少々手荒く扉を開き、桶は水が零れるのもかまわずにそこへ置き、彼女へと歩み寄った。

ヒスファニエがたてた音のせいだろう。彼女が軽く眉をしかめ、寝返りを打ってから、眠そうに目を開けた。

ぼんやりとした瞳が緩慢に動き、こちらを見つけて、ふにやんと笑む。そのゆるんだ嬉しそうな笑みに、彼もつられて微笑すると、彼女はそのまま目を閉じて、再びすーすと寝息をたて始めた。無防備に。とても気持ち良さそうに。

昨夜、疲れて寝入ってしまった彼女に適当に着せてやった上着の裾が乱れて、胸が見えるか見えないかの微妙なところまで露になっ
てしまっている。

ヒスファニエは彼女に手を伸ばした。直してやろうと、気になっ
て仕方がない裾に触れたのに、なぜか手は勝手に、直すどころかその
下の肌に触れていた。

不埒な手は、先ほどまで見えなかった、彼が見たかったものを探
り当て、布の外へとさらす。掌の中のふくらみは眩暈がするほど触
り心地が良く、無意識に感触を確かめるように揉みしだいていた。

ヒスファニエの限界は、そこまでだった。

理性はどこかへ消し飛んでしまい、本能のままに、手に入れたば
かりの愛しい妻の上に屈みこむ。

体の奥から湧き上がる熱を彼女に宿めてもらうべく、まずは濃厚
な口付けで彼女を目覚めさせるところから始めたのだった。

そうして。

彼は今、くすんくすんと泣く妻を胸に抱き、困惑の極致にあった。
痛いのか、と問えば、違う、と言いつ、恐る恐る、嫌だったのか、
と問うても、違う、と言われて、へたりこみそうなほど安心し、何
が悲しい、と問えば、悲しいんじゃないんです、と返された。

彼女はぎゅうつとばかりに彼にしがみついている。時々、甘える

ように顔をこすりつけられると、心も体も刺激される。

彼女は猛烈に可愛かった。あまりの愛しさに、彼女が泣いているいたわしさに、最早きりきりと胸が痛んでしかたない。

「アリイ。なぜ泣く。俺はどうしたらいい。どうして欲しい。教えてくれ。頼む」

ヒスファニエはほとんど呻いて懇願した。彼女の涙は彼の寿命を確実に削る。

「なにも。なにもしてくださなくて、いいの」

そう囁いて、彼女は甘い吐息を彼の胸に吐きかけた。そして致命的な言葉を続けた。

「あなたの妻になれて、嬉しいの」

「アリイ」

彼は彼女の思いに心臓を射抜かれて、抱き潰してしまいそうなほど彼女を強く抱き締めた。

どうしていいのかわからなかった。頭の中がぐらぐらと煮えたぎり、もっともつと彼女を欲した。こうして彼女に触れるのが嬉しくて気持ち良いのに、彼女が別の人間であることが、一つに溶け合ってしまったえないのが、もどかしかった。

彼女をたくさん感じたくて、ヒスファニエは彼女を引寄せたまま仰向けに寝転がった。彼女の重みが彼の前身にすべてかかる。左腕でしっかりと抱き寄せながら、右手は彼女の頭から背を、ゆっくりと何度もなぞって撫ぜた。

彼女は力を抜いて体をあずけ、心まであずけるように告白してきた。

「ずっと、ずっと、どうしたらいいのか、わからなかったの。みんな、ユースティニアが憎いだろうと言うの。みんな、父の仇をいつかとってやろうと言って、母や私を慰めてくれた。でも、私は父がいなくなっただけで、どうやって憎めばいいのかわからなかった。憎いだろうと言われる度に、そう思えないのが、すごく薄情な酷い子供のような気がして、いたたまれなかった。なぜ憎めない

んだらうって、たくさん考えた。きつと、女なのがいけないんだって。他の女の人に比べても小さくて、力もなくて、剣なんかとても振るえなくて、もし憎んでも、戦うことなんてできないから、憎めないんだらうって。だから、男に生まれたかったって、思ってた。王太子を、ごめんなさい、あなたのお兄さまを、殺した英雄の子として、恥じずにすむ子供に生まれたかったって、思ってた」

彼女は兄のことに言及して、急に怯えて黙り込んだ。彼女に兄のことを引け目に思っただけでなく、彼女を得て、彼の胸の内が変わった心境を正直に伝える。

「いいんだ。俺も、もう憎しみの正体がわからなくなった。確かに君の父親は俺の兄を殺した。でも、俺の叔父が君の父親を殺したんだ。敵だから、憎んでいるから殺しあつて、また憎しみをつのらせて、殺すのか？ 敵がいる限り、この憎しみは消えない。だったら、完全に滅びるまで殺し合いを続けるのか？ そんなことを続けて、何になるというんだ？」

彼女は彼の胸の上で頭をもたげ、彼の目を覗き込んだ。その目にまた涙を浮かべ、それでも彼女は静かに微笑んでいた。

「ヒスファニエさまは、絶対に立派な王におなりになります」「うん」

彼は力強くうなずいた。くだらない恩讐を越え、ブリスティンと和平を結ばなければいけない。それを彼女が気付かせてくれた。

それが、この出会いをくださった神の意思なのだと思った。

彼と視線の位置が合うように、彼女の体を引っぱりあげた。頭を起こすが、口付けるには少し距離が足りなかった。彼が目で訴えようと、彼女も焦れた色を浮かべていて、目をつぶって、初めて彼女から唇を寄せてくれた。

お互いの唇の柔らかさと存在を確かめる、穏やかで長い口付けを交わす。

相手の姿を目にしたくて、途中で少し離れて見つめ合うと、彼女が囁いた。

「あなたに抱かれて、思ったの。あなたが男だから、私は女に生まれただった」

それに、彼も万感の思いで応えた。

「そうだ。君を愛して守るために、俺は男に生まれたんだ」

彼女は笑んだ。まるで大輪の花のように、美しく、歡喜にあふれた笑顔だった。

二人は幸せだった。真実お互いを思いあっていた。相手のためならば命も惜しまないというほどに。

この愛があれば、どんな困難も乗り越えられると信じていた。

信じきれるほどに深い思いは、一月にも満たない日々の中に、何者も、そう、神さえ別ちがたく、二人の心も体も強く深く結びつけた。

『運命の恋』。

そう呼ぶに相応しい思いを、二人は思い合うことによって、確かに築きあげたのだった。

別れ 1

試練の期間は終わった。

名残惜しい気持ちで、厨くしやの戸を閉める。ヒスファニエは、じつと厨くしやを見ているアリーの肩を抱いた。

「行こうか」

はっとしたように顔を上げて、はい、と神妙に頷く。

二人きりで幸せでいられた場所に別れを告げる。もう二度と、ここには戻って来ない。けれどきつと、ここでの思い出は、一生二人の心の支えになるはずだ。

肩から手はずし、彼女の手を握った。心配することはないと、笑いかける。

彼女は今日も、彼の上着を着ていた。彼自らが彼女に服を着せかけ、紐を結び、帯を巻いて、身形を整えてやった。

これは、本来は結婚を宣誓した後の共寝の翌日の朝に、お互いの上着を交換し、絆を深めるという、呪術めいた倣いだ。また、そうして夫婦として結ばれたことを世間に知らしめるものでもあった。

もちろん、そういった場合の女性の上着は、夫となる男性が着られる大きさのものを羽織っているもののだが、彼女にぴったりサイズのだったそれは、とうてい彼が袖を通せるものではなかった。

そこで彼女はヒスファニエの腰に巻いて、飾り帯のように調べてくれた。

装い一つとっても足りない、真つ当なものなど何も無い結婚だった。出会いも、お互いの出自も。だが、それを補って余りある愛がある。

どれだけの王族が、政略ではなく、心によって結ばれた伴侶を手に入れられるというのだろう。それを思えば、ヒスファニエは彼女に出会い、妻と迎えることができたのだ。多少の苦難があったとしても、これ以上の幸福など望めないはずだ。

彼女が彼の手を握り返し、微笑んだ。

信頼と愛情の込められた眼差しに、ヒスファニエは屈んで、軽く彼女に口付けた。それだけで心が落ち着き、ゆるぎない思いを新たにす。

彼女を守り、共に生き、必ず一緒に幸せになるのだと。

二人は神に守られた場所に背を向け、人の世界に戻るために、山を下り、海岸へと向かったのだった。

斜面を下る途中、沖に2隻の船が見えた。1隻は自国のものだろう。だが、もう1隻が来る予定は無い。予定外の同行者は、この状況下ではプリステインのものとしか思えなかった。

「アライ。君の迎えも来ているかもしれない」

ヒスファニエは沖を指し示して言った。彼女は数度瞬きして彼を見、その後、彼の指を視線で追って海の方へ向いたが、身長が足りず、木々に邪魔されて、どうやら確認できないらしい。彼は彼女を抱き上げて、自分と目線の高さを同じにしてみた。

しかし、彼女は彼の首に抱きついて、海を見ようとしなかった。

「私を迎えに来る者などいません」

「そうだったな」

ぼんぼんと背中をなだめるように叩いてやる。

想像でしか彼女の心情は理解できないが、故郷の者が探しに来てくれて、嬉しくないわけがない。その相手を知らない、記憶を無くしたふりをするのは、とても辛いに違いなかった。

自分の場合を考えれば、レヴァインを相手にそんなことをすれば、恐らく気絶させられて問答無用で船に乗せられ、記憶が本当にあるうがなかるうが国に帰るまでに船の中で説得され、着く頃には立派な国王候補にまつりあげられていることだろう。辛い辛い前にも、そういう事態がそもそも成り立ちそうになかった。

もっとも、政治に関わる人間はそんな者ばかりだ。彼らには普通の善悪は通用しない。目的を達成するためなら手段を選ばないから

だ。彼らの行動は国運にかかわる。国を失わせる以上の悪事はないだろう。それを避けるためならば、どんなこともする。ヒスファニ工自身にも、その自覚はあった。

だからこそ、アリイを迎えに来た者に対しても油断はできなかった。

「アリイ。俺から離れるな。誰のことも見るな。何も覚えていないと言いはるんだ」

「はい」

昨夜も話し合ったことを繰り返すと、首元で頭が動いて彼女の髪がヒスファニ工をくすぐった。その慕わしい感触を手放したくなくて、抱いたまま歩き出す。彼女が顔を離して急いで言った。

「自分で歩きます」

「こうしていたい」

「でも、重いでしょう?」

申し訳なさそうなアリイの物言いに、ヒスファニ工は声を出して笑った。

「ぜんぜん。いつでもこうして連れ歩きたいくらい軽い」

彼は足を止め、恥ずかしげにする彼女に口付け、目をつぶったところで、無防備な首筋もぺろりと舐めた。

「きゃっ。ヒスファニ工さま!」

アリイはじたばたとして拒もうとした。

「ここは外です! 誰かに見られたら」

「誰もいないさ」

「いますよ。下に来ているじゃないですか!」

「ここまでは来ない。あいつらが踏み入れているのは、砂浜までだからな。ここは神域だ。許された者しか入ってはならない」

息を呑んで黙り込んだ彼女に、笑いかける。

「アリイは神に招きよせられたんだ。問題ない」

不安とも痛みともつかないものが、彼女の目に宿った。それを隠すように、再びヒスファニ工に抱きついてきた。

アリイは聡く、現実を見極める能力がある。だから恋に浮かされているだけではいられないのだ。それは王妃としてふさわしい資質だった。ヒスファニエは彼女が苦しむのを痛ましく思いながらも、満足して彼女に囁いた。

「アリイ、君は俺の妻だ。そうだろう？」

「はい」

涙声と共に、じわりと首筋が生暖かく濡れる。伏せられた頭を優しく撫でてやりながら、言い聞かせる。

「俺たちは神が認めた夫婦だ。心配するな」

だが、それを本当のこととして、二人以外の誰が信じてくれるのか。

それは彼女だけでなく、ヒスファニエの憂慮でもあった。ただ、正しいことをしているという確信が、それに対する恐れを払拭していた。

神意は二人の上にある。これを否定する者は、神を否定するに等しい。偉大なる神の意思が、通らぬはずがない。

彼はそう信じていた。

そう信じるほか、なかったのだ。

ヒスファニエはアリエを背に隠し、砂浜が始まる手前の林の端で立ち止まった。

湾の沖に船が2隻停泊している。棧橋が朽ちてしまったために、大型船は近よれないのだ。その代わりボートが2艘岸そらに乗り上げていた。ここからその船体に描かれた魔除けの目が判別できた。やはりプリステインのものであった。

ただし、彼らはボートから少し離れた場所にたむろしている。彼が手を上げて振ると、それに気付いた友人にして部下たちだけが、こちらに駆けてきた。

「ヒスファニエ様、ご無事でしたか！」

デュレインを筆頭にした5人が、あと数メートルでたどりつくところ、ヒスファニエは腰の短剣を抜き、正しく自分の頸動脈に当てた。

「それ以上、近付くな」

さほど大きい声ではなかったが、鋭く響く声で命ずると、彼らは驚いて立ち止まった。一人デュレインだけが表情も崩さずに冷静に話しかけてくる。

「ファー、馬鹿なまねはやめろ」

「おやめください、ヒスファニエさま！」

デュレインが言うのと同時に、アリエも叫んで、後ろから恐る恐る胸に腕をまわして抱きついてきた。その手に左手を当て、心配ないと伝えるように軽く叩いて握った。

一言前までは体面を気にして『ヒスファニエ様』と呼んでいたデュレインが、一緒に悪戯をしていた頃の呼び名に戻したのは、時期国王の側近ではなく、幼馴染にして親友の立場で話そうということなのだろう。だが、その手に乗る気はなかった。

「控える、デュレイン。今は馴れ合う気はない」

デュレインは溜息混じりに鼻を鳴らした。死ぬ気もないのに命を懸けてみせる片手落ち具合に、呆れているのだろう。だが、こうでもしていないと、彼らに話も聞いてもらえない恐れがあった。いっせいに飛びかかられて気絶させられ、自分一人だけが船に乗せられてしまふに違いない。

「やめて、ヒスファニエさま。危ないです。それを下ろしてください」

「アライ、少し黙っててもらえるか」

「いやです！ あなたになにかあったら耐えられません！」

涙声のそれに、ヒスファニエは、ふっと笑った。愛しさが胸に満ちる。

「大丈夫だ」

彼女の指に絡めるようにして上から握りこんだ。そして、デュレインを非難する目で睨んだ。肝心の奴が慌てないで、彼女が怯えてしまっている。どうするか彼女に話しておかなかったのを後悔した。ただ、ここまで反応するとは思っていなかったのだ。

デュレインは仕方ないというように溜息をつくくと、両膝を地についた。それを見て、他の4人も同じようにした。そして、忌々しいことに、彼は事態の核心をさらりと口にした。

「そちらの女性はプリステインのアリエイラ姫とお見受けしますが」

「彼女はアライ。嵐の翌朝、岸に打ち上げられたのを拾った。過去を失っているから、俺が名付けた。その日は素晴らしく美しい暁だアリエット。つたからな」

「そうでしたか。実はその嵐に巻き込まれて、この海域でプリステインの姫が行方不明になったそうです。最も近いこの島を搜索させて欲しいと、再三にわたって申し込まれておりました。ですが、神域で神意を問うている期間なのを盾に、今日まで待つてもらっておりました。他に行方不明の女性はいないとのことなので、恐らく彼女がその『アリエイラ姫』と思われる。あちらに待たせている者たちに、どうかお引き渡し願います」

ヒスファニエはアリの腕に力が入ったのに気付いたが、誰にも悟られないために、なだめてやることはできなかった。

「それはできない。彼女は俺の妻だ。俺が王位に就いた際には、彼女を王妃にすると誓いをたてた」

誰に、あるいは何に、とは明言しなかった。さっきの彼女の過去の話にしてもそうだ。ヒスファニエは細心の注意をはらって、誤解を招きはしても嘘を口にしないようにしていた。

彼女との誓いを、彼女にまつわる神への誓いを、穢したくなかったのだ。

「神官の立会いもなくですか？」

デュレインは暗にその誓いは成立しないとやってきた。

「ここはセレンティア神の神域だ。俺は神意を問うている最中に、神の導きに従って彼女を賜った。結婚の宣誓も誓いも、神は聞こし召したはずだ。俺が無事に試練を終えられたことが、証となるだろう」

神を引き合いに出されれば、ただの人が反論するには恐れおおいものだ。まして神の真意など、おいそれと人に知れるものでもない。デュレインはそれ以上は食い下がらず、無表情に返してきた。

「承知しました。ただ、我らも彼らに待つてもらおう代わりに、探索の協力を神に誓いました。彼女の存在が知れた以上、顔を確かめさせないわけにもいきません。どうかそれはお許し願いたい」

「ならば神に誓え。この娘を我が妻と認め、俺を守るように彼女も守り、敬い、俺が王位に就いた際は王妃とするよう尽力すると。誓うまで、俺はこの島を出ない」

デュレインは冷たい瞳でこちらを見ていた。その目が愚かだと言っていた。ヒスファニエの主張も、彼女に出会う前のヒスファニエと同じに、本人がたいして崇めてもない神に誓わせようとすることも。

彼は幼い頃から、こういう目でヒスファニエを度々見た。時には賢い彼に、馬鹿だ愚かだと罵られもした。そうしながらも、悪戯に

は最後まで加わり、叱られるのまでつきあってくれたものだった。

それは命や国運が絡んでくるようになって、変わっていない。

彼がいなければ、今頃、生きてもらえなかっただろう。ヒスファニエの今は、彼がいたおかげであるのだ。その彼の助力がない限り、アレイとの未来がないのもわかっていた。

「デュレイン、神はいる」

ヒスファニエは実感を込めてさとした。デュレインは珍しく眉をしかめた。そのまま動かず、ヒスファニエを確かめるように見ている。そこに迷いが見えた。

先の見えない時、どう転ぶかわからない時、彼はそうやって全力で考える。そうして答えの出ることなら、ヒスファニエは彼の案に従うことにしている。彼の言うこと以上に安全な策はない。

けれど、答えの出ないこともある。答えを出す時間がないこともある。そんな時は、ヒスファニエが心のままに選んだ道を、彼も行く。

二人はそうして今まで生きてきた。だからヒスファニエは、はっきりと道を示してやった。

「我が命に従え。神意の先の栄光を見せてやる」

デュレインはがっくりと首を落として、深い溜息をついた。

「あなたはこうして、いつもいつも恥ずかしげもなく、馬鹿と紙一重の大口をたたけるんですかね」

独り言というには大きすぎる声で、疲れたように言う。

「しかもなんですか。首に刃物を当てて、自分の命を懸けながらなんて、王太子のくせに、見栄もないんですか。まったく、呆れるったらありませんよ」

「惚れた女を守るのに必要ならば、見栄などいくらでも魚の餌にくれてやる。それほどのものを、神は与えてくれた」

「ああそうですか。聞いている方が恥ずかしいので、その話はもういいです。それで、誓うんですけどっけね、我が主よ」

デュレインはすっかり軽口調で顔を上げた。

「我、デュレイン・エスターナは、その娘をあなたの妻と認め、守り、敬い、王妃とするに尽力することを、神に誓います」

ヒスファニエが他の者も見てうながすと、彼らは次々に誓いを口にした。それを受けて短剣を下ろし、鞘にしまう。

そしてやつと彼らから目を離して、アライへと振り返ることができたのだった。

「もう安心だ」

胸にまわされた腕をほどいて彼女へと向き直ると、彼女は、キツと睨みつけてきた。

「なんてことをなさるんですか！ 私のために命を危険にさらすなど、してはなりません！」

「大丈夫だと言っただろう」

「今回は、でしょうか？ 二度と、なにがあっても、こんなことをなさってはなりません。あなたはユースティニアの王になる方なのです。お願いです、二度となさらないと誓ってください」

ヒスファニエは小首を傾げて、真剣な彼女に機嫌よく微笑みかけた。彼を必死に気遣う彼女の気持ちに、有頂天になっていた。それでも彼女に告げたのは、求められているのは正反対の答えだった。「誓わない」

そう言ったからといって、嫌われることはない和高をくくった、無頓着な言い方だった。もっと言えば、己の決心を誇り、この思いを変えられるものなら変えてみせろという挑戦的な雰囲気さえあった。

アライは眦を吊り上げて、彼の手を振り払って一歩後ろに下がった。二歩、三歩と下がりながら、叫ぶ。

「でしたら私はこの島から出ません。この島で、死ぬまで一人で暮らします！」

素早く身をひるがえし、さっき来た道無き道を走っていこうとする。けれど、背が小さく、たいして筋力も無い彼女の全速力は、体

力が戻っても相変わらずのろく、ヒスファニエは走るまでもなく、大股に近付いて、簡単に彼女を捕まえてしまった。がっちりと腕の中に抱え込む。

「いやですつ。放してくださいっ。いやっ。いやっ。絶対にいや！私のせいであなたが傷ついたり死んだりするなんて、絶対にいやなの！」

彼女は涙をこぼした。ヒスファニエは他に人がいるのも忘れて、屈んで彼女の涙を唇で吸った。

「君の気持ちはわかった。でも、俺の気持ちもわかってくれ。君を失ってまで生きていたくないんだ」

「そんなことをおっしゃらないで。人の寿命は神のくださったもの。自らが決めていいものではありません。まして女はお産でも簡単に命を落とす存在です。そんな女と、王たるあなたを同列にあつかってはいけません」

「アライ」

苛立ちを込めて、ヒスファニエは彼女を呼んだ。彼の思いをくみ取ってくれない、非情とも言える物言いに傷ついた。

そんな彼の頬に、彼女の両手が触れた。さするようにして、小さな掌で包んでくる。それは彼女を思いのままに抱きながら、彼女に身も心も包まれている気がするのと同じ感覚だった。

「私になにがあっても、生きて。あなたには生きていて欲しいの。それが私の一番の願いなの」

燃えるような瞳で願われた。ヒスファニエは一瞬息を止めた。彼女の激しい愛に、身を貫かれた心地だった。

「……君は俺と一緒に生きるんだ」
どうしてそんなことを願うのだろう。なぜ、一緒に死んでは言ってくれないのだろう。

そんなことを願うような女ではないと知っていた。だからこそ愛したともわかっていた。それでも、痛みが胸が引き裂かれる。

「ええ。私はあなたの妻ですもの」

彼女はヒスファニエの頭を、頬を掴んだままひきよせた。唇にしっかりと口付けをしてくれる。それから彼の瞳をのぞきこみ、ね？
という感じに、首を傾けた。

見つめ合う。彼女の澄んだ茶色の瞳に囚われる。

彼をひたすらに思う、その瞳から彼は逃げられなかった。

「わかった。誓う。君のために、生きるよ」

ヒスファニエは喉が震えそうになるのを意志の力でねじ伏せて、
切なく彼女に囁きかけたのだった。

「だが、同時に誓う。もし君が傷ついたり死んだりしたら、手を下した者も、指示をした者も、必ず見つけ出し、滅ぼしてやる」

ヒスファニエは低く唸る声で誓った。驚いて不安そうに息を呑んだ彼女を胸元に抱き込み、射殺しそうな視線をデュレインたちに向けた。

「それがたとえ、おまえたちだつたとしてもだ。心して守れよ」

そんな状況を考えてだけで、怒りで頭が煮えたぎっていた。仮の話だとわかつているのに、絶対に復讐せずにはすまさない、と思いつめる心情に、どんどん追い込まれていく。

血肉を分け合ったかのように結びついているデュレインたちを殺せるなら、他国の姫君たちなど言うに及ばず、もしもルルシエやアフル叔父であっても、殺すのに躊躇いはないだろう。

それがどんな騒動に発展するかわかつていても。ともすれば、国を危難に放り込むことになるうとも。自分ではどうにも止められる気がしない。

だからそれを自分にさせるなど、彼らに釘を刺したのだ。

「アライ、君も迂闊なことはせず、自分の身を守ることを、まず考えてくれ」

彼女は声もなく頷いた。彼の頬から滑り落ち、胸に当てられた手が、ぎゅっと握り拳を作った。その不安げな仕草に、怯えさせてしまったと気付く。

「すまない。怖がらせるつもりはなかったんだが」

少々情けない声で謝ると、アライは横に首を振って、頬をすり寄せてきた。

「怖くなんか、ありません」

「そうか」

ヒスファニエは優しい声で同意した。彼女が怯えているなどと自

分で口にするわけがない。自分の内に収めるべきものは収めて、ヒスファニエによけいな心配や手間をかけさせない。これまでの生活の中でも常に見られた態度だった。

アリイはヒスファニエの胸をそつと押しやり、一人でその場に立ちとうとした。手放したくなくて、抱きとめた腕をゆるめずいたら、ごあいさつしたいのです、と彼女は言った。

譲る気のない真剣な目に負けて、手を離す。彼女はデュレインたちへと向いて、しっかりと彼ら一人一人を見た。

「アリイと申します。私ごときが貴方方にお願いできる立場にないことは承知しております。それでも、私はどうしてもこの方のお傍にいたい。ご迷惑をおかけしますこと、どうかおゆるしくください。そして、これからよろしくお願いいたします」

彼女は拳を掌で包んで目の前まで持ち上げた。

対してデュレインは肩をすくめ、緊張感の無い返事をした。

「ヒスファニエ様の我儘につきあわされるのはいつものことです」
ぞんざいな答えに、デュレインがアリイを受け入れる気になってくれたのがわかったが、そうとわかるのは付き合いの長い者だけだろう。

人をくつた態度の真意をはかるように、アリイは彼をじつと見ていた。ヒスファニエはアリイの挨拶ももどかしく思ったが、まずはデュレインを咎めた。

「デュレイン、敬うと誓ったはずだぞ」

「あなたを敬うように、と仰っていたはずですが？」

しれつと返されて、ヒスファニエは言葉を失った。確かに彼の自分自身への態度は、いつもこんなものなのだった。

アリイは二人に視線を往復させて見比べていたが、やがて自然に表情をゆるめた。

「なんだ」

ヒスファニエはバツが悪くて、少々拗ね気味につっかかるように聞いた。

「いえ、あの、ありがとうございます」

彼女はデュレインたちへと礼を言った。

「なぜ礼を言う」

なんとなく面白くなくて尋ねると、

「気にしなくてよいと仰つてくださったので」

視線をヒスファニエに戻して、ごく普通のことのように返して行く。どうやら、デュレインの考えがきちんと通じているようだった。これから彼とは顔を合わせないというわけにはいかず、しかも長い付き合いになるのだから、気が合うのは喜ぶべきところなのだが、やはりどうにもヒスファニエは面白くない気分になる。

アリイはヒスファニエを見つめ、ゆっくり数回瞬きした。まるで子供みたいな独占欲を見透かされている気がして、少し居心地が悪かった。

そのうち彼女は不安そうな顔になって、首を傾げた。

「間違っていましたか？」

何が、と聞き返しそうになって、不安というより、恥ずかしかつていることに気付く。彼女がもう一度デュレインたちへと向き直ろうとするのを、肩を抱いて止め、早口で言い聞かせた。

「いや、間違っていない。謝らなくていい」

どうせまた、ずうずうしいことを言ってしまったとかなんとか言うに違いない。本当にずうずうしい人間は、そんなこと思いもしないし、恥じ入ったりもしない。むしろ彼女は控え目すぎる。

「君は神が俺に賜った妻だ。堂々としていればいい」

彼女は切なげに小さく頷いた。

もっと自信を持って欲しくて、思いのたけの愛情を込めて、その唇に触れるだけの口付けをする。

そして彼女と目を合わせれば、人目を気にして恥らいながらも、瞳には曇りのない喜びがきらめいていた。ヒスファニエはそれに満足した。

それから体を起こし、彼女を再び背に隠す。

どろぢやら、痺れを切らしたらしいブリスティンの一行が、断りも
なくこちらに近付いてきていた。

「どういうことだ！ その男、今、アリエイラに何をした！」
不機嫌もあらわに怒鳴る男の道を遮る位置に歩を移し、デュレイ
ンが穏やかな声で言った。

「我が主よ。こちらは先程お話いたしました、プリステインのラフ
アエラ王子でいらっしやいます。ラファエラ王子、こちらが我が主、
ヒスファニエ王太子殿下にございます」

プリステインの王子だという男は、まさに優男という称号がぴつ
たな容貌をしていた。淡い茶の髪は日の光を受け、ほぼ金に輝き、
瞳の色も薄く緑がかっていた。ゲシャン海域では珍しいほど肌の色
も白く、全体に浮世離れした雰囲気があった。

ただ、その表情は怒りにまみれ、内面の醜悪さが浮き出ている。
それだけで、ヒスファニエは彼を相手にするのも嫌になった。

だいたい、王族に名を連ねながら、この軽率さはなんだ。どうし
たら、敵国の人間に簡単に感情をさらけ出せるのかがわからない。
それとも、怒ってみせれば、誰でも自分の言うことを聞くとでも思
っているのだろうか。

これがアライが『兄』と慕っている男。アライにこんなのと『兄』
のくくりで一緒にされていたのかと思ったら、心中溜息を禁じ得な
かった。

アライの父親は国王の従兄弟だったそうだ。戦で父を失った後も、
彼女は母親とプリステインに留まり、数少ない王族の姫として遇せ
られていたという。しかし14の時に母も亡くなると、母方の祖母
であるイフィゲニー王国の王太后が、余命幾許も無い日々を娘の形
見と過ごしたいと言って、彼女を手元に呼び寄せたのだそうだ。

祖母との暮らしは、親密で愛情に満ちたものだったらしい。悔い
のない精一杯の介護の末に看取りはしたが、死後一年しても祖母の
墓からは離れがたかったという。

けれどそれを聞き、心配したプリステインの王妃が、そろそろ帰っていらつしやいと、強引に迎えを寄越したのだそうだ。

帰りたくなかったと、アリイは言った。祖母の墓から離れたくなかったし、また『英雄の娘』にならなければならぬのは気が重かったと。それでも祖母亡き今は、王と王妃が彼女の保護者だった。彼女に逆らうことは許されなかった。

だが、その航海の途中、あの嵐に巻き込まれ、彼女だけがこの島に流れ着いたのだ。

それはヒスファニエにとってもアリイにとっても、人生最大の幸運だった。

二人のこれまでの人生の何か一つが欠けていても、出会えはしなかっただろう。それを思い、ヒスファニエは神への感謝の念を深くした。

そう。この目の前の男の存在すら必要だったのだと、自分に言い聞かせる。

「お初にお目にかかる、ラファエラ王子」

ヒスファニエは両肘を軽く張り、左の拳を右の掌で包み、顎の位置まで持ち上げた。正式な挨拶で、彼も少しは冷静になってくれればと期待したが、そうはいかなかったようだ。

「アリエイラを返せ」

威圧的にならずかと近付いてこようとする彼を、デュレインが押し止める。

「お待ちください、王子。これ以上は神域にございます。許されてもいない者がみだりに踏み入れば、神の怒りを買いますよ」

それを聞き、ラファエラ王子の従者たちが諫めに入り、デュレインは彼らから少し距離を取った。王子は相手がユースティニアの者だというだけで攻撃的な姿勢をとる。だとすれば、これから聞かされることに激昂すれば、何をするかわからない。

従者たちが説得を試みている間に、デュレインたちはヒスファニエを守る位置にそつと移動した。それが終わるのを見て、ヒスファ

二エは口を開いた。

「アリエイラ姫をお探しとのことだが、この島にそういった娘はいない。ここに居るのは、過去を失い、我が妻となった娘だけだ」

ラファエラ王子は目を見張り、そのまま表情も動きも数瞬止め、ヒスファ二エを凝視した。次いで、怒りに顔を赤く染め上げた。

「我が妻だと？」

そのまま挑むようにやって来ようとするのを、彼の従者たちが、やはり同じ怒りの形相でこちらを睨みながらも止める。

「我が栄えあるプリステインの姫を、おまえごときが妻にするなど、許されるか！」

重ね重ねの無礼に、ヒスファ二エの部下たちも色めきたった。それを軽く片手を上げて鎮めた。

「彼女はプリステインの姫ではない。海から流れ着き、俺が拾ったのだ。神からの賜り物が誰のものになるか、ゲシヤンに生きる者が知らぬわけもあるまい」

「卑怯者が！ 力づくで一族の娘を穢したなど、許せん！」

ラファエラ王子は剣を抜いた。合わせて従者たちも、デュレインたちも抜く。

一人ヒスファ二エだけが冷たく彼らを睥睨した。

「勝手な憶測で貶めるのはやめてもらおうか。俺たちはお互いにそれぞれの意志で神に結婚を宣誓した。そして、俺は彼女を王妃とすることを誓い、彼女は俺の妻として生きることが誓った。すべては神意を問っている期間に起きたことだ。これは神の意志だ。剣を引かれよ」

「卑怯者の言など聞くに値せん！ おまえを生かしてはおけぬ！」
ヒスファ二エのすぐ前で控えていたアルツィードが、剣を渡してきた。それを受け取り、彼も剣を抜く。

すると、突然、彼の脇からアライが走って前に出ようとした。とつさに、剣を持ったままの腕で遮る。

「やめて！ やめてください！」

なおも出て行こうとするのを止めるために、鞘を持った左腕で、彼女の足が浮くほどしっかりと抱き込んだ。

「ヒスファニエさまは卑怯者ではありません！ 流れ着いた私を、何の裏心もなく、親切に面倒をみてくださいました。私がプリステインの者だというなら、国交を開こうとも仰ってくださいました。お優しく、立派な方です。この方を先にお慕い申し上げたのは私です。この方の妻になりたいと願ったのは、私なのです！ どうか争うのはおやめください！」

「おまえはやはり記憶を失ってなどおらぬではないか。嘘をつきおつて！」

王子は血走った目で、切っ先をヒスファニエに向けた。アライイは必死に語りかけた。

「嘘を仰ってはいません。私はその名も過去も、神にお返ししたのですから。今の私は、アリエット。それ以上は名乗るべき名もない、アライイと呼ばれる娘にすぎません」

ラファエラ王子は悔しそうに顔を歪めた。

「おまえは騙されているのだ。おまえが心優しく純粋な娘であることは、プリステインの誰もが知っている。それにつけいり、その男はおまえを辱めたのだ。目を覚ませ、アリエイラ。おまえの父はユースティニアに殺されたのだぞ。その王太子がまともな男であるわけがない」

「いいえ、いいえ、いいえ！」

アライイは激しく首を振って否定した。

「ヒスファニエさまほど素晴らしい方を、私は他に知りません！」
彼女の目は熱く潤み、手は無意識に自分を支えるヒスファニエの腕に添えられていた。ヒスファニエも大切に彼女を抱き包む。二人の姿は、誰が見ても、心惹かれあう恋人同士だった。

それが、なによりもラファエラ王子を激昂させた。

「黙れ！ 愚かな娘が！」

剣を振り上げ、踏み込み、斬りかかってこようとする。それにデ

ユレインたちも応戦し、あっという間に混戦になった。

ヒスファニエはアリイを連れて、少し奥まった場所まで退いた。砂浜が切れればそこはもう神域だ。神の怒りを買う覚悟がなければ、招かれざる者たちは入ってこれない。

デユレインたちは決して弱いわけではなかったが、ラファエラ王子たちを殺すわけにはいかないために、一進一退の攻防が続いていた。

ヒスファニエはアリイを王妃に迎えようとしている。その国の王子を殺し、迂闊に戦端を開く愚は犯せなかった。

「やめて。やめて。お願い。やめさせてください」

アリイは真つ青になって震えていた。

「大丈夫だ。殺しはしない」

「けれど、あっ」

アリイが叫び声をあげた。部下が一人傷つけられ、後退つたのだ。小船に乗れる人数は決まっている。どちらも人数はちょうど5人ずつだった。だが、一方は殺そうとし、一方は傷つけまいとしている。次第にユースティニア勢は押され気味になっていた。

「アリイ、ここにいてくれ。俺も加勢してくる」

「駄目です。駄目！ 行かないで！」

アリイはとつさにヒスファニエに抱きついた。

ヒスファニエは胸に回された腕を左手で掴み、一方で剣の柄を握りながら、その手で彼女の顎を押し上げた。目を覗いて言い聞かす。「アリイ、このままでは、我々が死ぬことになる。わかるだろう、君なら」

彼女は泣いていた。怯えと理解と、そしてどうにもならない感情に翻弄されているのがわかった。

彼女はヒスファニエを愛してくれている。けれど、敵として戦っている彼らは、彼女の同朋なのだ。それが一朝一夕で心から消えるわけがない。

「殺しも殺されもしない。約束する」

アリイは小さく頷いた。彼女の腕がゆるむ。ヒスファニエは微笑んで頷き返し、彼女に背を向けようとした。

「ヒスファニエ様！」

誰かの危険を知らせる声が聞こえた。それと同時に、彼女に体を突き飛ばされた。金属が日の光を反射し、視界の隅で光る。踏み込んでくる人影が見え、彼は咄嗟に体勢を立て直しながら距離を取った。

向き直った時、アリイはラファエラ王子に体を捕らえられ、首に剣を押し当てられていた。

「剣を捨てろっ」

「いけません！」

アリイは王子の声にかぶせるように叫んだ。

「ヒスファニエさまは誓ってくださいました。約束を違えるなら、先に命を絶ちます！」

「黙れ！」

そしていつそう強く刃が押し当てられた。少しでも動けば斬れるだろう。誰もが固唾を呑んで動きを止めた。

ヒスファニエは剣を捨てる代わりに、鞘へと戻した。ただし、柄から手は離さないで話しかける。

「ラファエラ王子、俺はあなたと争うつもりはない。彼女を王妃にと望んでいるのだ。正式に国交を開くことを申し入れたい」

「ユースティニアの言うことなど、信用できるものか」

そのままアリイを引きずって、じりじりと砂浜へと後退していく。それを追おうとすれば、動くな、と牽制される。

「貴様らが動けば、アリエイラは殺す。プリステインの娘をユースティニアの手に渡すくらいなら、殺した方がましだからな」

そう言って、ラファエラ王子はぞつとするような暗さで笑った。

「ラファエラ王子、どうか私の言ったことを王に伝えて欲しい。国交を開き、彼女を正妃に迎えたいと。先にそちらの許しを得ず、順番を違えてしまったのは、彼女の罪ではない。神の思召しと思え

なければ、我が罪としてくれてかまわない。正式な使者もすぐに遣わす。だから」

「黙れっ。貴様の言うことなど、聞かぬ！」

獣のような喚き声に、これ以上彼を刺激することもできず、ヒスファニエは口をつぐんだ。彼女が連れて行かれようとしているのに、動くこともできない。

彼女がどンドン離れていく。彼は瞬きもせず、奥歯を噛み締めた。

「ヒスファニエさまっ」

アライがこちらに手を伸ばし、彼を呼んだ。

「アライ」

彼が思わず一歩出ると同時に、黙れ、動くな、と王子は怒鳴って彼女の頬を剣の柄で殴りつけた。

「やめろっ」

「殺すぞ！」

叫んで走り寄ろうとした彼に、狂気をはらんだ脅しが飛ぶ。その場で蹈躡を踏むように立ち止まるしかなかった。

それでも、痛みのせいでぐったりしてしまった彼女を、ヒスファ

ニエは呼ばずにはいられなかった。

「アライ、アライ」

彼女が顔を歪めながら目を開け、彼をすぐるように見る。

「迎えに行く。必ず、迎えに行くから、待っていてくれ」

彼女は痛むだろう唇の端を上げ、無理に微笑をつくると、一度だけ小さく頷き返した。

ラファエラ王子の従者たちが、二人を取り囲み、一行は小船へと向かう。

ヒスファニエは為す術もなく、彼女が連れ去られるのを見守るしかなかった。

ヒスファニエは、まず怪我人の手当てから始めた。出血の酷い者は止血をし、軽い者はそのまま小船へと急いだ。

「すまない、ファー」

ヒスファニエ自ら背負ったハルシュタットが、後悔を滲ませた声で言った。

「ハル、謝らなくていい。俺も油断していた」

ラファエラは、男児の多いブリステインでも、最も王位に近い王子だと聞いていた。そんな人物が、神の怒りを買う覚悟で、神域に足を踏み入れるとは思わなかったのだ。

だから、最も近くでハルシュタットとやりあっていたのに、目をそらして、アライにかまけてしまった。

己の愚かしさに、悔やんでも悔やみきれない。自分への焼け付くような怒りで目が眩んだ。

彼女が殴られた時の姿が、すぐるようにつめる瞳が、途切れずヒスファニエを苛む。

小船に乗り込むと、急ぎ確認を取った。

「連絡船か補給船はどこにいる」

「きな臭いことになりそうだったから、護衛船を島の裏手に3隻待たせてある」

期待以上のデュレインの答えに、ヒスファニエの肩から、ふつと力が抜けた。

「よくやってくれた。船に乗ったら、すぐにブリステイン国王への親書を書く。それを携えて、彼女の乗った船を追ってもらいたい。さて、誰に行ってもらおうか」

怪我を負っていないのはデュレインとアルツィードだ。できれば、彼女を守ると誓った彼らに行ってもらいたかったが、危険な任務になる。なにしろ、国交のない敵国へ乗り込むのだ。下手をすれば、

敵船に取り囲まれて、辿り着く前に沈められるかもしれない。彼らはヒスファニエの御世を支える柱だ。下手に彼らを失いたくなかった。

珍しく迷ったヒスファニエが決断を下す前に、デュレインが手を上げた。

「面倒な交渉事は、俺が一番慣れてる。俺が行く」

ヒスファニエはデュレインの顔を見て、嫌な予感が増した。この任務を任せれば、無事には帰ってこないような。

だがそれは、アリイを取り戻せないということでもある。そんなことにさせてたまるかと、強く自分を奮い立たせる。だとすれば、考えるまでもなく、デュレイン以上の適任者はいなかった。

「そうだな。おまえに任せる」

そう言っただけで拳を上げると、デュレインが自分の拳をかち合わせてきた。合った視線の内に、状況の厳しさに対する認識も、それに対する覚悟も、無言で確認し合う。

嫌な話ではあるが、最悪の場合の犠牲としても、彼が一番適任だった。彼は4代前の王の血を引く。現王は王妃の後援として、古い時代に臣籍に下った血筋を取り立てた。その中でも宰相の長子であり、最も濃い血を引くのがデュレインだ。彼が殺されれば、ユースティニアとしても、ただではすませられない。

ヒスファニエには、彼を失った己の御世など考えられなかった。

彼もまた父と同じに有能な宰相となるだろう。きっと今回のことも、彼ならばうまく切り抜けてくれるに違いない。

気持ちを浮き足立たせる不安を鎮めようと、そう心に言い聞かせた。

「2隻は護衛として連れて帰れ。中途半端な戦力は無駄に相手を刺激するだけだろう」

「ああ、わかった。そうする」

本当は今あるだけの戦力をつけてやりたい。が、それが正しい選択でないことはわかっていた。3隻程度で敵地に乗っけるのは自

殺行為だ。ならばむしろ、1隻であつた方が敵意を煽らずにすむだろう。

「国に帰つたら神官を巻き込み、王を説得して、すぐに船団を用意する。10日、いや、2週間かかるか。必ず迎えに行く。それまでもたせてくれ」

本当は自ら今すぐにでも彼女を追いたい。だが迂闊に乗り込んで、ヒスファニエが人質にでもされたら目も当てられないことになる。王太子として、そこまで愚かなことはできなかった。

「仰せのままに」

デュレインは大仰な返事をした。その目が、ヒスファニエの不安を見透かし、俺を誰だと思つている、と語っている。

ヒスファニエは、すまない、という言葉を呑みこんだ。

たくさんの人間を危険にさらす。デュレインを死地に送る。それでも、アリイを取り戻さないという選択はない。

ヒスファニエはこれを、神の意志だと宣言したのだ。それは、神託を受けた王として立つということだ。長い戦に終止符をうつ王になるのだと。

その理想にデュレインは従つた。他の4人も。ヒスファニエの実現したい御世に賛同してくれたのだ。

その彼らに、もう、すまないなどという言葉でヒスファニエは言つてはならない。謝罪は判断の誤りを示す。それは即ち、神託を騙つた大罪を犯したことになる。それに加担した者たちにも大罪の烙印が押されることになるだろう。

だから、どんな困難があろうと、どんな犠牲を払おうと、ヒスファニエは己の宣言を貫き通さなければならない。

それが王としての、ヒスファニエの覚悟だつた。

試練の儀は極秘事項だ。故に城に戻っても特別な出迎えはなかった。ただ、ルルシエと近習たちが城の正門の内を出迎えてくれた。「ファー！」

待ち受けていたルルシエが、とびきりの笑顔で歩み寄ってきた。彼女はヒスファニエの正妃候補と見なされている。他の出迎えたちは皆、彼女に道を譲った。

「ご無事のご帰還、祝着至極にございます」

彼女はふわりと足を折り、少しだけ腰を沈める淑女の礼をした。それからすぐに手を伸ばしてきて、ヒスファニエに抱きついた。

「お帰りなさい。無事に帰ってきてくれてよかった。ああ、神様、感謝いたします」

「ただいま、ルルシエ」

ヒスファニエも親愛の情を示して彼女を軽く抱き締めてから、そつと肩を押しやった。

彼女は甘えるように首を傾げて彼を見上げた。

「あのね、あなたにお話があるの」

その仕草に長い話になりそうだと見当がついて、ヒスファニエは彼女の肩を軽く叩いて宥める。

「すまないが、王と神官長に帰着の報告をしてこなければならぬ。今日は無理だが、近いうちに話を聞くよ」

「今日は駄目なの？」

彼女が顔を曇らせる。

「ああ。本当にすまない。早急に話し合わなければならぬことがあるんだ。それでしばらく忙しくなるが、必ず話は聞くから」

「明日は？」

ルルシエの肩から手を離し、歩き去ろうとした彼の腕を掴んで、慌てて彼女は聞いてきた。

「わからない。約束はできない。…すまない。急いでいるんだ」
その手を優しく退け、背を向けた。いつになく食い下がる彼女の様子に、余計に聞きたくない思いが募る。煩わしいとしか思えなかった。

アライと別れてから、もう2日もたっている。ヒスファニエはそのことで頭がいっぱいで、気が急いでしかたなかった。

彼は笑みを顔に貼りつけて、出迎えの者たちと二言三言言葉を交わしながら、父の執務室へと急いだのだった。

人払いをし、王、宰相、神官長、ヒスファニエと部下4人になった執務室で彼が語り終えると、神官長は興奮した色を浮かべ、王は目を伏せて無表情に押し黙った。宰相はそんな王を見遣り、それからヒスファニエに視線を戻した。

「確かに戦がなくなれば、人的にも物資的にも、その分を国内の振興にまわせます。戦のたびに国力が下がることもさけられる。この国は豊かになりましたよな」

「飛びぬけた豊かさは、他国から狙われる。いずれにしろ戦はなくならない」

王は呟くように言った。

「我が国だけ豊かになるうなどと、なぜ思うのです。貧しさが戦を引き起こすなら、豊かさを分け合えばいい」

「一国を背負う重みがおまえにはわかっていない。色に溺れて、随分と甘いことを言うようになったな」

王は目を上げて、反論したヒスファニエを見据えた。

「溺れたわけではありません。すべては神に導かれて悟ったことです」

「さすがは大神官のお血筋でございますな」

神官長はゆっくりと何度も頷いた。大神官家とユースティニア王家は、過去に何度も婚姻を交わしている。恐らく列国の王族の中で最も濃く大神官家の血を引いているはずだ。ただし、だからといっ

て、王族の中に神託を受ける才能を持った者が生まれたことはなかったのだが。

「古の大神官は、何気ない風景の中にも神からの啓示を見出したそうにございます。それを思えば、今回のことは、我々から見ても明らかかなものでございましょう。突然嵐が起き、一人で過ごすべき場所に人が流れ着いたのも、それがプリステインの姫だったことも、偶然で片付けられるものではございません」

「それを偶然と言うのだ」

起こるとは思えない不思議なめぐり合わせをそう呼んでいるにすぎないと、王は呆れて溜息混じりに指摘した。だが、神官長は引き下がらず、なおも話を続けた。

「ヒスファニエ様は無事に試練の儀を終えられました。それは、神のご加護があつたからに相違ありません」

王はふつと笑った。試す眼差しで、意味深にヒスファニエに問いかけてくる。

「おまえは神を騙るつもりか」

古の大神官でもない者が神の意を語れば、ともすれば騙ることにもないかねないのは、ヒスファニエにもわかつていた。それでも、あの島でアライと共に見出したものは強固に胸の中心にあり、それが間違っているとは思えなかった。

「偉大な神を騙るなど、滅相もありません。俺はただ、神の意に従いたいと思っただけです」

王は深い溜息をつくと、沈痛な面持ちで言った。

「馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、おまえの馬鹿さ加減は底が知れんな。まったく、迂闊な誓いをたてたものだ」

室内がなんともいえない気まずい雰囲気になり返った。

「恐れながら、一つ申し上げたいがございます」

それまで黙ってヒスファニエから一歩ひかえた場所で立っていた、親友であり部下である側近たちの中から、アレクターが静かに手を

挙げた。全員の耳目が彼に向く。王は手を振って発言を許可した。

「プリステイン王は、かのアリエイラ姫を口説き落とした者を王太子にすると言ったようです。プリステインでの姫の名声は高く、かの姫が選び、力添えをする者ならば、王位に足ると思われているようです」

初耳のそれに、ヒスファニエは咄嗟とつぱに口を挿みそうになった。なぜもっと早く言わなかったと、胸倉をつかんで揺すってやりたかった。

その答えは簡単だ。そうすれば、ヒスファニエはきつとすぐにでも追おうとした。王太子の彼には許されるはずもないのに。

だから、皆言わなかったのだ。ヒスファニエに間違った決断をさせるわけにはいかなかったから。あるいは、苦渋の選択をさせないために。その代わり、デュレインがすぐに追ってくれたのだ。

ヒスファニエは拳を強く握り、乱れそうになる呼吸を意識して整えながら、数瞬めいせく瞑目した。

デュレインを思い浮かべ、頼む、と祈るような気持ちで語りかける。

この瞬間にも、アリイがラファエラに口説かれているかもしれない。それだけならまだしも、手籠めにされているかもしれない。最悪、そんなことをされれば、彼女の性格では自ら命を絶つてしまいかねないというのに。

その業腹うちはらな想像に吐き気がするほどの怒りがこみ上げてくる。それでも、ラファエラに彼女を手に入れようという考えがあるならば、そう簡単に死なせはしないだろうという一点で、まだ救いはあった。それ以上に心配なのは、政治的な問題だった。もしもこれがこの国の話であり、王太子を選ぶ娘がルルシエだったとしたら。彼女が敵国の王太子と契りを交わし、他の誰も受け入れないと知ったら。父王とヒスファニエならばどうするかを考え、あまりの焦燥に眩暈がした。

王の宣言を取り消すことはできない。敵国の王子を王太子にでき

るわけもない。ならば、選んではならない男を選んだ娘をどうするか。

父王なら、そしてヒスファニエであっても、ルルシエを殺すだろう。

プリステインの国情はヒスファニエにはわからない。ルルシエはアライほどの名声もない。自分の推測が的外れであって欲しいと願いながらも、アライの影響力が大きいと仮定するほど、殺される可能性が高まることに気付き、いてもたってもいられなくなる。すぐにでも船に飛び乗って、彼女を追いたかった。

しかし、空手で出て行って彼女を取り戻せるわけもなく、遠回りでも今のヒスファニエには、彼女を迎えに行くために、王を説得するしかなかった。

ただし、彼は一人ではなかった。デュレインは命を懸けて時間稼ぎをしてきているし、アレクトーは説得を試みてくれている。他の者たちも怪我を隠し、ヒスファニエの後ろについてくれている。穏やかなアレクトーは、デュレインのように鮮やかに言い負かすことはできなくても、ゆっくりと確実に人の心を変えていく話術を持っていた。

「ヒスファニエ様は、そうと知らずにその姫を娶られた。これが神の啓示でなくてなんでございましょう」

「そんな不確かなものを啓示として、民に負担を強いるつもりか。しかもプリステインの女を王妃に戴くだと？ どれほどの者が恨みを持つていると思う。おまえの父だとして、殺されたであろう。そのような女を正妃にした王が支持されるとでも思っているのか」

「かの姫はその名を捨てたと言いました。また、自分の命を盾にヒスファニエ様を逃そうとしました。どれだけの女性が、夫のために命を捨てる覚悟があるでしょう。かの姫はまさに神から贈られた娘として、ヒスファニエ様のために生きるに違いありません。神の娘を妃とした王を、確かな神の加護を、喜ばないゲシヤンの住人はおりません」

ヒスファニエの脳裏に、剣を捨てさせるぐらいなら、自ら刃に首を押し付けようとした彼女の姿が、鮮やかに甦った。

その時。

『ヒスファニエさま』

突然、彼女の声が耳に甦り、彼女の気配が身に迫って感じられた。

『アライ？』

反射的に空に視線を彷徨わせ、声には出さずに唇を動かして彼女の名を呼ぶ。

ヒスファニエの血が一瞬で熱くたぎった。なぜか神経が冴えわたっていく。それにしたがって、自分のまわりが、そう、世界が、驚くほど鮮明に感じられてきた。

この部屋の中だけではない。壁を抜け、城の外に広がる城下町、そして島を囲む海と、その波濤を越えていく彼女が乗せられた船。それを追うデュレインの船。その先、青い海原に浮かぶブリスティン王国。そういったものが、俯瞰できた。

そして、激しい危機感に襲われる。背筋を震えが這いのぼるほどの。

「急がないと」

ヒスファニエの口から、意識することなく言葉がもれた。身の内を炙る何かに突き動かされるままに、両膝を床につき、拳を握り合わせて、目の前で掲げる。

「どうか、全軍を率いる許しをください。時を置いてはいけない。今すぐブリスティンに向かわないと、」

『何もかもを失う』。思い浮かんだ最後の言葉に、ヒスファニエは絶句した。

「向かわないと、どうなるというのだ」

王はヒスファニエの変化に、背筋を伸ばし、いずまいを整えて見下ろした。

ヒスファニエは言うてはいけないと思った。

言うてしまえば、自分が認めてしまえば、『すぐそこ』に流れて

いる『何か』、ヒスファニエにひたひたと押し寄せ、何か』に、逆らえなくなる。きつと、絡めとられてしまう。

本当に、『失ってしまふ』。

ヒスファニエは目に苦悩の色を浮かべて、口も利けずに身を強張らせた。まわりの様子など目に入らなかつた。その『何か』に呑まれまいと、必死だつた。

部屋の中は、ヒスファニエを中心に空気が変わっていた。居合わせる誰もが息を呑むほどの厳かな配気が、彼から放たれていた。それを本人だけが認識できていないのだつた。

王は、口を開こうとした神官長を小さな動作で止め、頷いてみせた。ヒスファニエの身に何が起きているか、わかっていると。

恐らく、これが『啓示』。エーランディアの大神官と共に失われた、神意を見出す力。それが今、ヒスファニエに発現しているのだらう。

「いいだらう」

王は身を強張らせたままのヒスファニエに言った。

「我が息子ヒスファニエ。神が定めたユースティニアの王太子よ。おまえに我が国の全軍をあずける。神がおまえに降されし役目を、果たしてまいれ」

ヒスファニエは瞠目した。王の発言に、波のように四方八方からうねって押しよせていた『何か』が凧いだのだ。

そして、『何か』がヒスファニエの言葉を待っている。凧の次に動き出すべき方向へ流れようと、彼を押ししてくる。

彼は、そちらに行きたくなかつた。それは、彼が行きたい未来ではなかつた。

ヒスファニエは本能的に恐怖していた。

彼を絡め取るモノは、王が言うような『神』ではない。

その『何か』には善もなければ悪もない。それどころか、意図さえありはしないのだ。海に潮の流れがあるように、それもまた流れているだけのモノ。

ヒスファニアにはわかっていた。

ユースティニアとブリステインだけではない。この流れはすぐに同盟諸国にも波及し、やがてゲシヤン海域すべてを覆うものになる。この流れに乗ってはいけない。乗ったら最後、人間は嵐の海に放り込まれる。きっと、たくさんの人々が水底に沈むだろう。

それでも。

そう心の中で唱え、ヒスファニアは『流れ』から視線を引き離し、父王を見た。王の目に迷いはなかった。むしろ期待が透けて見えた。その隣の宰相にも、神官長にも。そして、部下たちにも。

彼らにはわからないのだ。これが、そんな希望に満ちた未来を招きよせるものではないのだと。

それでも、彼に他に選ぶ道などない。この流れに乗らなければ、今すぐブリステインに向かわなければ、『何もかもを失う』のだから。

アリイを失ってしまう、そんなことなど、ヒスファニアにはできなかった。

「ありがとうございます。必ずや、ご期待に添える働きをしてみたいでしょう」

ヒスファニアは手を組み直し、もう一度優雅にかかかって、宣誓した。その途端、押し留まっていた『何か』が奔流となって流れ出す。後戻りは、もうできない。

それを感じ取った時、ヒスファニアは、人として自分が神への誓いを破る以上の大罪を犯したのを知り、一瞬で己の魂が真っ黒に染まった気がしたのだった。

帰還した日から、ヒスファニエは神殿に籠もって潔斎けっさいしていた。潔斎けっさいといつても、神官でない彼は特別なことはしていない。ただ、聖域たる神殿から出ず、朝晩に神に祈りを捧げ、聖火と聖水にて調理された物を口にするだけだ。

その代わり、俗世間に関することは、部下たちが彼の目となり耳となり、また手足となってくれていた。それに王や宰相も、ヒスファニエが聖域から出られないために、自ら神殿に日参しては、毎日彼と意見交換をしていた。

彼らによれば、貴族の招集、派兵の準備は、着々と進んでおり、思ったよりも早く出られそうな按配あんばいだという。

ヒスファニエの試練の儀については、王太子が無事に神の祝福を得たというだけでなく、『啓示』を受けたことも国内外に告知された。

今まで、『エーランディア』一族のみに発現していた『啓示』を見出す力。それが数百年をへて、傍系ほうけいともいえるヒスファニエに現れたと。

その場に立ち会った神官長は、それが確かに『啓示』であると認定した。

王太子は大神官の末裔まつえいとして神殿に招かれ、『啓示』の実現に向け潔斎けっさいを始めている。

『啓示』の内容は、ブリスティンへの派兵　。

そうした公式発表とは別に、多くの噂もばらまかれた。

神は祝福の証として王太子に妃を賜った。

だが、神のユースティニアへの恩寵おんちゆうを恐れたブリスティンが神域

へと忍び込み、人を疑うことを知らぬ清らかで優しい心根の妃を、だまして攫さらってしまった。

神は大変お怒りになり、盗人へ罰を下せと王太子に『啓示』を示された。

これは神が我らにくだされた試練。神の望まれた『聖戦』である、と。

噂は、兵となる貴族たちをその気にさせるための餌だ。

貴族とは、武器を持って国のために戦う者たちのことをいう。彼らはそのために、一般の民のように漁に出たり畑を耕すことはせず、毎日武術の腕を磨くことに専念する。また、早くに結婚し、しかも幾人もの妻を娶めとる。すべては一人でも多くの男児を、すなわち国を守る兵を残すためである。

彼らは国から身分と富を補償され、けっして働くことはない。しかし、一度国に何かあれば、命を懸けて守る。その権利と義務を有しているのだ。

その彼らに、海から流れ着いた娘を妻としたが、敵国の王子に攫さらわれてしまった、ぜひ取り返したいから力を貸してくれと言ったところで、そんな間抜けで愚かな王太子のために、誰も命を懸けてくれなどしない。むしろ、廃嫡騒ぎにもなりかねないだろう。

だがそれも、『聖戦』となれば違ってくる。

神官長は王にすらおもねらない、神にのみ仕える清廉で敬虔けいけんな人物として知られている。その神官長が『啓示』を本物と認定し、王太子の潔斎けっさいを手伝っているといえ、これほど確かな証はない。

貴族たちは『聖戦』に熱狂し、同盟諸国も『聖戦』への参加を表明してきているという。

ヒスファニアはその報告に、頼もしいことだと喜んでみせたが、胸の内は冷えきっていた。

あの時感じたとおりの事態になっていく。世界は、流れ着くところまで行かなければ、止まらないのだろう。

その流れの中心となつてしまつた今では、それをもう、恐ろしいとは思わなかつた。彼にははつきりと『流れ』が知覚でき、彼が導いていくべき世界の行く末が見えていた。

ヒスファニエには、世界は一幅の絵のようにしか感じられなくなつていた。あるいは、よくできた物語のように。どんなに美しく鮮やかでも、現実感がない、ただそれだけのもの。

たとえどれだけの人間が死に、海が、野山が、骸で埋まろうとも、それが『世界』のあるべき姿なのだ。

ただ、アライを思う時だけ、体に血が、心に熱が巡つた。

その時だけ、痛みに震える。

ヒスファニエは、彼女の声を、表情を、感触を思い出しながら、何度も彼女へと呼びかけた。

アライ、どうしてだろう。君に近付こうとすればするほど、君と夢見た未来が遠くなる。

俺たちは、憎しみのない、殺しあふことのない世界で生きたいと願つたはずなのに。

俺は、じきに君の祖国を滅ぼすだろう。

それが、『世界』の『望み』だから。

アライ。二人でいた時あれほど身近だった神が、今は感じられない。

神はまだ本当に、俺たちを見守つてくださっているのだろうか。

それとも、君を奪われ、愚かにもこの『啓示』を引き寄せてしまった俺を、神は見限つてしまわれたのだろうか。

神殿の祭壇にかかげられた神のレリーフの前に何時間もひざまずき、いつまでも眺めているヒスファニエの姿が、日を追つことにし

ばしば見られるようになっていった。

アリイと神を探して虚ろうつろに見上げるその姿が、人々には敬虔けいけんな祈りを捧げているように見えた。

故に、人々は誰からともなく、彼を『聖王』と呼ぶようになったのだった。

母上が面会の申し込みをしてこられたという。

帰還の挨拶もせず、神殿に籠もってしまったのは仕方なかったこととはいえ、心苦しく思っていた。あの人はいつまでたっても、たとえ俺に対する態度を大人の男に対するものにしてくれている、その瞳だけは幼子を見るものと変わらないのだ。心配をかけていることは想像に難くなかった。

「すぐに会おう。ここにお通ししてくれ」

「それが、ルルシエ様も一緒にございますが、いかがいたしましたし
よう」

自分では気付かず、母を慕う息子の顔をしていたヒスファニエは、一瞬で表情を消した。

父王から、アフル叔父とルルシエには、王命として側妃となるように話をつけてあると聞いている。

それでも、王妃候補として、成人の儀以来体の関係のある女性だ。王妃にはならなくても、側妃として生涯つきあっているかなければならない。このままヒスファニエから一言もなく、すませられるものではないだろう。

「よい。彼女にも会おう」

ただし、接客室を借り、神官長に立会いをお願いしてくるようになると言いつける。潔斎の最中に、不用意に女性に会うことはできない。「急ぎの用ではない。神官長のお手をわずらわすのだ。あちらのご都合を優先するように。お手隙てまひまになられたらお願いいたしますと申し上げます」

近習が出ていくと、ヒスファニエは軽く溜息をついた。わずらわしく、面倒くさい。どういうわけか、ルルシエに対してそんな感情しか抱けなくなっている。

少なくとも、試練の儀の前までは、大切にしなければと考えてい

たのに。

心から求める女性を抱くことが、体だけでなく、心がどれほど満たされ、生きる活力になるものなのか知ってしまった今では、ルルシエとのことは記憶の片隅にあるだけのものになってしまっている。それに、アリイは泣いたのだ。ヒスファニエが他の女に触れるなんて嫌だと。

ヒスファニエの口元が久しぶりにゆるんで、笑みの形をつくった。それがすぐに苦いものへと変わる。

彼はこれ以上、アリイを泣かせるようなことはしたくなかった。ただでさえ、彼は彼女の過去とも言えるものを壊し、滅ぼすのだ。もうそれ以外のどんな苦しみも与えたくなかった。

そのために、ルルシエや他に娶らなければならぬ妃たちを、いかに黙らせておくか。そのへんも一度、父に相談しておかなければと、考えをめぐらせたのだった。

「ご挨拶が遅くなりまして申し訳ありません、母上。無事に試練の儀を終え、戻りました」

扉を開けて入ったところで畏まって挨拶すると、母は神官長やルルシエとついていたテーブルから立ちあがり、切ない笑みを浮かべて、手をさしのべたまま歩いてきた。背の高い彼へと背伸びをする。その求めに応じて彼はかがんで、母が彼の頭を抱きしめられるようにした。

「ヒスファニエ、お帰りなさい」

それから、母は彼の頬を両手でつつんで、じっくりと見た。

「立派になって。すっかり王太子の顔になりましたね」

母の目には、誇らしさと、どことなく寂しさがまじっているように感じられた。ヒスファニエは、まいったな、と意味もなく思いながら、優しく話しかける。

「俺は白髪頭の老人になっても、あなたの息子ですよ」

母は、ふふつと笑った。

「ええ、そうね」

久しぶりの対面が終わったのを見はからって、神官長が椅子に座るようにと誘った。

ルルシエも立ちあがっており、ヒスファニエに優雅に腰を落として礼をしてみせる。それに適当に頷いて、まず母の椅子を引いて座らせると、自分もその横の席に座った。大きな丸いテーブルに適当な間をあけて、ルルシエ、母、ヒスファニエ、神官長の順に並ぶ形となった。

母とお互いの体調や近況を一通り語ると、一瞬、沈黙が訪れた。すると母は神官長へと向いた。

「カーティス様、失礼を承知でお願い申し上げます。内々の話がないのです。大変申し訳ないのですが、少々席をはずしていただけないですか」

「母上、失礼なことを仰いますな。俺が同席をお願いしたのです」
ヒスファニエが口を挿むと、母はわかっていますと、きっぱりと言った。

「十分ほどでいいのです。どうか、戦に行く息子であり恋人でもある者と、心おきなく話せる場を頂戴したいのです。お願いいたします」

神官長は母とルルシエを順番に見ると、ゆっくりと頷いた。

「そうですね。どうやら話し合いが必要のようです。わかりました。私は廊下に出ておきましょう。ただし、扉を開けておくことをお許し願いたい」

ヒスファニエはとっさに反対しようとしたが、神官長は目だけで鷹揚に彼を黙らせた。わかっている、とも、信頼している、とも、逃げてはいけませんよ、とも見え、彼の真意はつかめなかった。

「ええ。もちろんですわ。寛大なお心に感謝いたします」
神官長は微笑むと、静かに部屋を出ていってしまった。

「ルルシエ」

母は、それまでまるでいないかのように静かにしていた彼女の肩にそつと手をやり、さするようになった。彼女は頷き、意を決したように目をあげた。

迷いと不安と挑むような意気との間を行ったり来たりしているようで、その瞳は頼りなくゆれていた。ヒスファニエと目を合わせた時、そらせたりを繰り返して、そのうち、ヒスファニエの胸のあたりに視線を定めて話し始めた。

「あの、ね、ヒスファニエ、あなたにお話があるの」

そんなことは知っている、と言いたくなるのを我慢して、できるだけ穏やかに問い返す。

「ああ。なんだ？」

「私、私ね、あなたの、あの、子供を身籠みこもったの」

ヒスファニエは眉宇をひそめて、軽く首をかしげた。

「なにを言っている？」

有り得ない話だった。

ヒスファニエは王になることが決まっていた。

唯一争うに足る叔父アフルは、父王とほとんど変わらない歳であり、代替わりするには歳がいきすぎているからだ。

それでも、現王の御世を助け、先の王太子の仇を討った叔父の功績は大きく、その娘を取り立てるのは当然のことであったし、また、彼女とであれば生粋のユースティニアの血の子を得られるのは、大きな理由となり得た。

しかし同時に、それだけのものではいかないと考えた。

それらは、ヒスファニエが王位に就く時に、ルルシエ以上に政治的な『王妃』が必要とあれば、彼女を無理にその位につけるほど強制力のあるものではなかった。

そう、今のこの状況のように。

だからこそ、慎重に避妊していた。『王妃』が王子を産むより先に、ルルシエが男児を生めば、血統的に後継者争いを引き起こす恐れがあるからだ。

ルルシエも王族の娘としてそれを理解していたはずだ。必ず事の前には二人で薬酒を酌みかわし、体内に塗りこめる媚薬も、それ専用の物を使用していたのだから。ヒスファニエはそれを怠ったことは一度もなかった。

「いったい、誰の子だ。いくら君であっても、不敬罪に問うぞ」

ヒスファニエは抑えながらも、怒りをのせて問い詰めた。

冗談ではなかった。アリーの地位をおびやかし、王国の未来に争いの火種を放り込むなど、とても許せることではない。

ルルシエはシヨックを受けた顔をした。

「他の誰でもないわ。あなたの」

「身に覚えがない」

最後まで聞かず、言い捨てる。彼女は真っ青になって、唇を震わせた。見る間に涙がもりあがり、あふれだす。すぎるような目で、ただ泣く。

昔は守ってやらねばと思えたその弱さが、今は心底忌々しかった。アリーならば、きっと睨みつける。拳で彼の胸を叩き、疑ったことを責める。まっすぐに彼を見つめ、飛び込んでくる。

ヒスファニエの胸に、腕に、彼女の感触が甦った。体も心も熱くなる。あの凜とした強さ、誇り高さを、愛していると思わずにはいられなかった。

「ヒスファニエ、落ち着きなさい。あなたの子です。なんのために私の侍女をルルシエにつけたと思っているの？ ルルシエの身の潔白は、私が保証します」

何も言えなくなったルルシエの代わりに、母が弁明を始めた。

「しかし」

「私が薬を取り替えさせました。あれには何の効力もなかったのです」

ヒスファニエは、一瞬絶句するほどの怒りを覚えた。それでも母であり女である人に声を荒げることはできず、黙って強い瞳で見返した。

「私はあなたが心配だったの。試練の儀で何があるかわからない。エインスリーに続いてあなたまで失ってしまったら、私は生きていけない。どうしても、あなたの血を引く子供が必要だったの」

母が手を伸ばしてきて、ヒスファニエに触れようとした。

「だから、ルルシエと相談して、薬を取り替えさせたの。どうかわかってちょうだい、ヒスファニエ」

母の指が腕に触れそうになった瞬間、彼はすつと避けて立ち上がった。初めて母の指をおぞましいと思った。

ルルシエの美しく可愛らしくはあっても頼りない姿も、簡単にこぼれる涙も、特に無意識に腹にやった手が、どうしようもなく厭いとわしかった。

今すぐ、その腹の子ごと殺してやりたいと思うほどに。

「俺はソレを俺の子と認めない。どこの誰ともわからない男の子を身籠みこもった君を、側妃にもしない」

ルルシエは口元を押さえて、悲痛な声をあげた。

「ヒスファニエ！ なんていうことを言うのです。取り消しなさい！ あなたは騙だまされているのです。相手はプリステインの女だと聞きました。さぞかしふしだらな女でしょう。そんな女を」

「黙れ」

ヒスファニエは低く唸った。理性が焼ききれそうだった。握った拳が、小刻みに震えていた。

「我が妃は神の祝福、神の娘だ。そのへんの凡庸な女と比べられるような女性ではない」

息子に、黙れなどと言われた母は、言葉を失っていた。それでも、非難の眼差しを隠そうともせず、こちらを見ている。

その母を怒気を込めて見すえ、ヒスファニエは言った。

「神は我が妃を取り戻せと示された。この『啓示』に逆らう者は、誰であっても我が敵と見なす。そう思し召されよ」

答えられない母と、その横で身をすくめて泣くルルシエも同じ視線で一撫でし、ヒスファニエは踵を返した。

「ヒスファニエ！」

呼び止めようとする母の声を無視し、廊下に出る。そして、そこにいた神官長に軽く拳をにかけてみせた。

「お待たせいたしました。話は終わりました。些事さじでお手間を取らせましたこと、改めてお詫び申し上げます」

神官長は室内に目をやり、ゆっくりとヒスファニエに目を戻した。

「あの方々に、神の慈悲をお分けしてきても、かまいませんか？」

「あなたがそれを必要と思われるのでしたら」

神官長は同じように目の前に拳をかがげ、挨拶をすると、部屋の中へと入っていった。すぐに、ルルシエの激しい泣き声が聞こえてきた。

ヒスファニエは、もうその声を煩わづいとすら思わなかった。欠片の興味も引かれなかった。

彼は屋内から回廊へと出て、無意識に『流れ』を引き寄せ、ブリステインのある方角を睨んだ。

母とルルシエによってつけられた怒りの火は、猛り狂う炎から青い凝こりへと姿を変えていた。それは静かに温度を上げ、アライとヒスファニエを引き離すものすべてを焼き尽くさんと、彼の内に宿つて、これ以降、決して消えることはなくなったのだった。

帰国して14日目の朝、ヒスファニエは侍従を王へと遣いに出し、神官たちが身に着ける白い聖衣の上から、一人で武器をまとった。

ゲシャン海域での戦は、主に海戦であり、海の上で行われる。船から船へ渡り、戦いの末に海に落とされるために、鎧の類は金属を使うことはなく、ほとんどが動物の皮を樹液で塗り固めたものだ。

また、全身を覆うものではなく、必要最低限を守るものでしかない。ヒスファニエの物も同様で、両手足の脛当てと、心臓を守る位置に家紋の入った胴当て、首には神の名の刻まれた首当てと、腰から下を守るための直垂のみだった。

それに長剣を腰にさげ、大きく家紋の描かれた盾と槍を持ち、部屋を出た。

その格好で神殿に行き、神官たちが驚いてざわめくのを無視して、主神セレンティーアのレリーフの前にひざまずき、頭を垂れる。

ヒスファニエは祈りの形をとりながらも、神に対して語りかけてはいなかった。ここまでできてしまえば、今さら何も言うべきことはなかった。

神が認めようが認めまいが、見ておられようが見ておられまいが、罰を下そうが下すまいが、かまわなかった。

今が、『その時』だ。『流れ』が激しい潮流となっている。これに乗って、行くのだ。

アライイを迎えに。

ヒスファニエが立ち上がり、祭壇から下りると、神官長が膝をついて拳を目の上まで掲げた。居合わせた他の神官たちも、それにならってひざまずく。あたかもそれは、風が草原の草を薙ぐようだった。

「あなた様の上にあります神のご加護が、あまねく世界を照らしますように」

しんとした中に響いた神官長の言葉に、無言で微笑んで頷いた。神の祝福はアライと共にあり、今は彼の上にはない。けれど、彼女を取り戻せば、きっともう一度神を見出すことができ、世界に神の愛を伝えることもできるだろう。

それまでヒスファニエは、いや、人は、嵐の海の中を、神を求めて彷徨うしかないのだ。

彼は一人で神殿の門を越え、聖域から俗の世界に足を踏み出した。空を見上げれば、全天の半分を雲がおおっていた。強い東風が吹いている。風がヒスファニエの髪をさらった。うまくこれを捉えれば、船はすべるように波の上を進むだろう。

それはまさに、戦へと誘う風だった。

ヒスファニエは王宮には寄らず、まっすぐ港へと向かった。途中、知らせを受けて、宰相自らが慌てて追いかけてきたのに捕まった。

「ヒスファニエ様、我が国の兵はそろいましたが、未だ同盟国の船が到着しておりません。どうかもうしばらくお待ちください」

宰相の位にありながら道の前に膝をつき、両手を広げて留めようとする彼に免じて、ヒスファニエは足を止めた。

「待てないのだ」

彼は、はっとしたようにヒスファニエを見た。

「間に合わない者はかまわない。後からいくらでも追いかけてくればよい。それを咎めはせん。だが、私が行くのは今なのだ」

宰相はすぐに恐縮して拳を掲げた。

「浅慮を申し、失礼いたしました」

「かまわん。それより、全軍に出陣の用意をさせよ。武勲を立て、神の御前に名を刻みたい者は、急げと」

「は。かしこまりました」

宰相は立ち上がって、速やかに道の脇へと退いた。

「ご武運をお祈りしております」

「ん。留守を頼む」

集まる予定の同盟国の戦艦の補給や、一時戦力が落ちる本国の防衛など、後方は後方で臨戦態勢となる。

「お任せくださいませ」

ヒスファニエは頬をゆるめて、宰相の肩を一度力強く叩き、歩き出した。

港では部下たちが、昨日示し合わせたとおりに船を用意して待っていた。部下のそれぞれの血に連なる者たちの船も、幾隻か準備をすませ、帆を張ろうとしていた。

ヒスファニエは旗艦となる大型船に乗り込んだ。彼が考案し、何年も前から用意させていた、二段櫂の船だ。装甲を厚くしたために重く、動きは鈍いが、小型艦に体当たりすれば向こうはひとたまりもないだろう。高所から一度に多くの兵を敵艦に乗り込ませることもでき、また、投石、投槍器の類も多く装備していた。

船上から港を眺めていると、武装した貴族たちが次々集まってくるのが見えた。

口々に『聖王』と呼びながら船のたもとに駆けよってくる。

ヒスファニエはそれを無表情に見下ろしていた。後ろから、出港の用意が整いました、と声がかかる。

それに、碇を上げよ、と命じた。

碇の鎖が巻き上げられるのを見て、人々がさらに声高にヒスファニエを呼んだ。

彼は片手を挙げ、ゆっくりと左から右へと空を薙いでみせた。その手を目で追って、人々が静まる。

「急げ。誉れ高きユースティニアの戦士たちよ。出陣の時は満ちた神の息吹に乗って、いざ、聖戦に赴かん！」

おおお、と海嘯に似た歓声がおきる。

「出港せよ！」

たちまち船上で復唱が繰り返され、帆が風を受けるように張り巡らされ、船が動き出した。

人々もばらばらに動き出し、己の船へと駆け出す。

ヒスファニエはそれを見届け、舳先へと踵を返した。前方に広がる、緑がかった浅瀬の色から、黒味がかった青へと変わる海原を眺める。

アリイを奪われてから、初めて心が浮き立った。

ああ。やっと君に会いに行ける。

もう少し、あと数日で君の許へ行けるから、どうかもうしばらくだけ、我慢して待っていてくれ。

君を傷つけた者も、俺たちの邪魔をする者も、全部滅ぼしてやるから。

もう一度二人で、神の御前に立とう。

ヒスファニエは、これから始まる戦に血を滾らせ、たくさんの方がこの深い青に沈む予感に、蕩けるように笑ったのだった。

東風は神殿島を越えたあたりから南風となり、通常では考えられない速さで、大船団をブリステイン王国へと運んだ。

ブリステイン王国も戦の準備を整えた船団を港に用意していたため、島の沖での開戦となったが、倍以上の戦力の差に、戦は一方的なものとなった。

数時間の内にそれらを打ち破り、ユースティア同盟軍は敵国本土へと上陸した。

日暮れまでそう間もなかったが、一晩の猶予を与えれば籠城の準備が整い、攻略にはこちらの犠牲が強いられる。そのため、ヒスファニアは今晚中の王城の制圧を決断し、王都に火をかけ、老若男女の別なく抗戦する者は殺すようにと命じた。

同盟国軍はその命令に従って王城までの道を確保し、ヒスファニアはユースティア本隊を率いて王城に攻め込んだ。

その間、王都は統率する者のいない征服者たちによって劫火にさらされ続け、略奪と暴力によって蹂躪されたのだった。

王城の制圧にもたいした時間はかからなかった。ブリステイン側は戦力の大半を海戦で失っており、ほぼ全軍を温存していたユースティアに歯向かう術はなかったのだ。

ヒスファニアは、王城内の女性はけっして傷つけてはいけない旨を周知させた一方、男は赤ん坊であっても殺せと命じた。

最後に自ら老齢の王をあっさり討ち取り、開戦からこちら、討ち取った7人いるはずの王子の遺体を揃えるように指示して、血の滴る剣を握ったまま、城内にいた女性を集めた部屋へと向かった。

ざっと見て、アリーの姿がないことを確かめると、手を取り合っただけで固まっている女性たちの中心にいる、王妃と思しき女性の前に立った。

「お初にお目にかかる。我が名はヒスファニエ・ユースティニア。プリステイン王妃とお見受けするが、いかがか」

「いかにも。私がプリステイン王妃です」

彼女は抱き締めていた若い女性を背後にやり、凜として答えた。その気丈な様子に、ヒスファニエは好感を覚えた。

「我々に逆らわなければ、あなたがたに危害を加える気はない。王妃よ、教えていただけるか。アリエイラ姫はどこにいる」

「危害を加える気はないと言いましたが、あなたは街に火を放ち、民を無差別に殺しました。そのような恥知らずな者の何を信じると言うのですか」

「これは手厳しい」

ヒスファニエは笑った。彼女に苛立ちも腹立たしさも感じなかった。見事なものだと思っただけだった。

「ならば問う。俺は正式な使者を立て、王に書簡を送った。今日はその返事を貰いに参上した次第。だが、そちらは宣戦布告さえせずに、我が方へ攻撃を仕掛けてきた。筋が通らぬ上に卑怯な行いをしてきたのはそちらだが、それをどう思われるか」

「我が国の王太子妃を殺しておきながら、何を」

彼女は吐き捨てるように言った。

ヒスファニエは一瞬息を詰め、ごくりと唾を飲みこんだ。

「俺は殺していない」

「しらじらしいことを。ユースティニアがプリステインの姫を王妃に迎えるかと？ 馬鹿馬鹿しい。罪のないあの子を殺して、開戦の切欠とした者を王太子とするなど、ユースティニアの未来も見えたもの！」

王妃は喉を震わせて笑った。

「俺は、殺していない」

ヒスファニエは感情を押し殺した声で繰り返すと、一步王妃へと近付き、片膝をついた。抜き身の剣を握りなおし、彼女へと身を乗り出す。

「神の御前で婚姻を誓った妻を、なぜ殺さねばならない」

王妃を取り囲む女性たちは、顔を隠すようにしてお互いにきつく抱き合ったが、王妃だけは訝しげに彼を見返した。

「生涯の愛を誓い合った女を、なぜ殺すのかと聞いている！」

がん、とヒスファニエは剣の柄を床に打ち付けた。

彼は険しい表情で、肩で激しい息を数回繰り返した。そして、顔を一度下に向け、大きく息を吐き出すと、表情を失くした顔を上げた。

「ラファエラと戻った時には、アライは死んでいたのだな？」

王妃はヒスファニエと睨みあっていたが、やがて小さく頷いた。

「ええ」

その時、彼の目に浮かんだ痛みの色に、王妃は胸を衝かれて瞠目した。

「我が使者は、どうなった」

王妃は一瞬の躊躇いの後、口を開いた。

「殺して、火で燃やしました」

ゲシャン海域では、遺体は風葬か海葬か土葬とする。神にいたただいたものは、神にお返しするためだ。火葬は神にお返しすることもできないほどの悪事を行った者に対する、罰と辱めを意味した。

「アライは、今、どこに？」

「ラファエラが部屋に留め置いて、それきり誰にも触らせようとしなかったのです、恐らく、そのまま」

ヒスファニエは血に塗れた左手を王妃に向かって差し出した。

「案内願えるか」

王妃は彼の顔を数瞬眺めた末に、無言でその手の上に己の手をのせたのだった。

ラファエラの部屋の扉を開けた途端、鼻をつく腐臭が漂った。ヒスファニエはかまわず中に入り、人型に盛り上がっているベッドへと近付いた。

頭の上まで覆う薄い掛け布をめくると、見覚えのある髪が現れた。すべてを取り去り確かめる。肌はどこも変色して崩れていたが、ヒスファニエにはわかった。確かに、それはアライだった。

「アライ」

彼女の頭の両横に手をつき、呼びかける。

「アライ、迎えに来た」

答えない彼女へと屈んで、ふっくらとした弾力のある唇だったはずの場所へ口付ける。

どんな姿になり果てようと、アライはアライだった。嫌悪感など少しもわかかなかった。なのに生理的な反射で嘔吐がこみあげてくる、自分の体が忌々しかった。

「遅くなって、すまない。ずいぶんと待たせてしまった」

服はヒスファニエが着せ掛けてやったものではなかった。それを今すぐ引き剥がしてむしりとりたい衝動を抑えて、扉へと振り返る。

「軍旗を持ってまいれ」

兵が一人、短い応答の後に駆けていった。

ヒスファニエの指示に、戸口で部屋から顔をそむけて鼻を袖口で覆っていた王妃が、ちらと中に視線を向けた。ヒスファニエと目が合う。彼は静かで強い眼差しで、彼女の目を自分へと留めさせた。

自分を、いや、この部屋に横たわる、哀れな亡骸を見る、と。

「我々は手を取り合い、共に繁栄することもできたはずだった。彼女はそれを望んだ。俺もそれを夢見た」

ヒスファニエが怒りに任せて暴力を振るう素振りはなかった。だが、その中で激しく荒れ狂う感情が、彼を、今にも何を始めるかわからない、恐ろしく、そして大きな獣のように見せていた。

「なのに。なぜ、憎しみに囚われる。なぜ、未来を見ようとしなない。なぜ、愛しんだはずのものを、簡単に殺すことができる。なぜ、あの愚かな男を王太子に据えようなどと……」

彼は言葉を途切らせ、瞑目した。自分の母も同じだと思い至ったのだ。やるせない溜息をつき、わきあがるまま言葉を紡ぐ。

「愛するから、与えようとし、愛するから、留めようとす。愛するから、……憎み、憎しみを捨てられないのだな」

ヒスファニエは、自分がはつきりと、憎しみを抱いているのに気付いた。

兄を殺された比ではないほど、激しく、深く、絶望をともなつて。自分からアライを奪った者たちだけでなく、それを育んだモノを、その存在を許した世界を、己も、神さえも、なにもかも、なにもかも、すべてを滅ぼせと、身の内に棲みついた獣が咆哮をあげる。青白い炎をまとった残酷で冷酷な衝動だけが、彼の心を染め上げていた。

ヒスファニエはその衝動を抑えようとは思わなかった。彼女のいない世界になど、意味はなかった。

世界など、滅びてしまえばいい。

全身の血が毒と変わりそうな思いに身を任す。

彼は突然、優美な微笑を浮かべて王妃を見遣った。愉悦に満ちた、いつそ優しいほどの笑みだった。しかしそれを見た王妃は、得体の知れない恐ろしさに、己が体を抱きしめながら身震いした。

「王妃よ。俺は約束したのだ、アライと。彼女を傷つけたり、死に至らしめる者があれば、それらを必ず滅ぼすと。神に誓ったのだ。だが、あなたの誇り高さに敬意を表して、選択肢を与えよう」

彼は笑みを深め、より耳触りのよい柔らかい声で、歌うように語りかけた。

「奴隷に身を落とすか、誇り高き死を選ぶか。どちらでも好きにするがいい」

王妃は震える声で抗議した。

「あなたは先ほど、私たちに危害は加えないと言ったはず」

「ああ、言った。だから、望むなら命は助けてやろうと言っているのだ。その先、あなたの主人となる男が、あなたをどう扱うか、それまではあずかり知らんがな。俺は、親切にあなたを殺してなどやらぬよ。死にたいのなら、自ら死ねばよからう」

そして煩わしいとばかりに、兵に、先ほどの部屋まで連れていけと命じた。

兵に腕をとられ、王妃が怨嗟の言葉を吐こうとする。

「やはり、ユースティニアの男など」

「恥知らずで、卑怯で、愚かで、それから？」

ヒスファニエは彼女の言葉を奪って言った。

「それは、あなたの息子のことだろう。恨みも憎しみも捨て、敵国との架け橋になろうとした娘を殺し、罪を俺になすりつけた。先に戦を仕掛け、人々を戦禍に引きずりこんだのは、あの人でなしだ」

彼は笑みを消し、怒りと冷酷さを面ににじませた。

「あながたの育てた息子が、この災禍を招き寄せたのだ」

「詭弁を」

「あなたこそが、息子がどんな人間か知っていただろう。だから、アリエを、あの心根の清い娘を、王妃に据えようとしたのだろうか？」

王妃は唇をわななかせた。だが、反論することはできなかった。

ヒスファニエは軽く手を振り、兵に行くようにと合図をした。王妃はそのまま蒼白となって、兵に引き立てられていった。

それと入れ違いに、軍旗を携えた兵が戻ってくる。

彼はそれを受け取って、扉を閉めて、兵たちに廊下で待つようにと告げた。

ヒスファニエはアリエをシーツごと手前へと引き寄せ、軍旗をベツドの空いた場所へと広げた。その上に、そつと転がすようにして彼女をのせ替える。

それから、短剣を使って布地を切り裂きながら、慎重に彼女から衣服を脱がせた。ラファエラの物、ブリストインの物などに、アリエを触れさせておきたくなかった。

温かかった肌は、ひどく冷たかった。水を弾くようだった肌理の細かい肌も、見る影も無かった。

日をおかずに抱き、彼女の内に宿らせたはずの子供も、彼女と共に

に死んでしまった。

苦しかった。心が裂け、どろどろと黒い血を流し続けている。けれど涙は出なかった。ヒスファニエはこれを知っていた。

初めて『啓示』を受けた時、そう、彼女が彼の名前を呼ぶ声が聞こえた時、あの時に、運命が決していたのだから。

それでも、信じられなかった。絶対に認められなかった。

彼女を失うことを受け入れるなんて、できなかったのだ。

だから、縋った。『すべてを失ってしまう』前に行動すれば、もしかしたら、彼女を取り戻せるのではないかと。

「神よ。なぜだ。なぜ、与えておきながら、奪った！」

喉がつまり、目頭が熱くなるのに、涙が出てこない。息苦しさ、ヒスファニエは上を向いて喘いだ。

「神よ、なぜ！」

短い息を繰り返して、アライの上に覆いかぶさる。彼女を抱きかかった。歓喜の声をあげさせ、名を呼ばせたかった。

彼女の声が聞きたかった。ヒスファニエさま、と夢中で呼ぶ、魂を震わせる、あの声を。

そして、蕩けるように微笑む、あの眼差しが欲しかった。

「アライ」

君はなぜ、俺に死ぬことを禁じた。なぜ、共に死のうと言ってくれなかった。気も狂わんばかりのこの嘆きを抱えて、俺に生きるというのか。

「アライ！」

なぜ、なぜ、なぜ、なぜ、なぜだ！

喰いしぼる唇から漏れる息が、呻き声になる。

アライを追って死にたかった。彼女の許へ行きたかった。

そこがどんな場所でもかまわなかった。彼女さえいれば、彼女を感じることをさえできれば、それで。

二度と日の光が見られなくてもかまわわない。草木一本ない不毛の地でもかまわわない。

ただただ、彼女のいる冥界へ行きたかった。

「ああ、そうか」

ははっ。ヒスファニエは力なく笑った。

「そういうことか」

笑いは止まらず、喉を震わせて、いくらでも出てくる。

思いついてしまえば、そうとしか考えられなかった。

「迎えに行けと。冥界の門を探し出せと、そういうことなのか？」

与えて、奪ったのは、そういうことなのか。

「神よ！」

ヒスファニエは血を吐き出さんばかりに叫んだ。

待っていてくれ、アリイ。

必ず、必ず君を、迎えに行くから。

どうか、俺を待っていてくれ、アリイ。

こうしてプリステイン王国は滅んだ。

そして、神の名の下に冥界の門を探して、ゲシャン海域のみならず二つの大陸をも巻き込み、何万、何十万人という犠牲を出した、50年余りにも及ぶ戦乱の時代が幕を開けたのだった。

エピソード 君に会いに

その日も、重く軋む体で玉座へと着いた。王位に就いて五十数年。最早、戦場に立つこともかなわなくなった。

今日は、東のエランサ大陸の最前線にいるはずの將軍ウルティアが面会を申し入れてきたという。

『突然』、『戦線を離れて』、『命令違反』、『不敬』。まわりでこれみよがしな愚かな言葉が飛び交い、うんざりして手を振った。とたんに静かになり、誰もが固唾を呑む。

ヒスファニエは溜息混じりに命じた。あれを通せ、と。慌しく取り次ぎが出て行き、人々は彼をうかがって黙り込んだ。

『エーランディア聖国』聖王宮の謁見の間は、しばらくの間、『聖王』をはばかりて静寂が支配した。

軍神ウルティア。白い髪と血色の瞳を持つ戦神。

それと同じ容姿を持つ、目の前に立った女を、ヒスファニエは無表情に見つめた。

王宮に入る際に剣は取り上げられ、今は丸腰だ。だが、腹心アルツィードが怪我を負って一線を退いてから、心血を注いで育て上げた娘だ。素手であっても、この場にいる全員を殺すことは可能だろう。

惚れ惚れするような、隙のない身のこなしに見入る。そこに、これの母であるあの女の面影は見出せない。それに安堵しつつも、残念だという気持ちもわずかに混じっていた。

なぜなら、あの女は、アライとそっくりな顔と声を持っていたのだから。

あの女。中身はアライと似ても似つかなかった女。同じ声、同じ眼差しでありながら、なのに、一つ一つ違う反応を返した。それがどれほどヒスファニエの心を逆撫でしたことか。

どんなに教えても、名前一つ満足にアリイと同じに呼べなかった。歩き方、話し方、食べ方、笑い方、怒り方、喘ぎ方、すべてを教え込んだというのに、教えれば教えるほど、その目は怯え、やがて表情をなくし、無反応になっていった。

彼の種を欲しがって群がった女どもより、心底鬱陶しく、忌々しかった女。ヒスファニエはあんなものに、二度と遭いたくはなかった。

ウルティアは膝をつき、拳を額まで掲げた。ヒスファニエはそれに問いかけた。

「バルトローはどうした」

気狂いの末にウルティアの母が死んだ後、ウルティアを引き取って育てたのがバルトローだった。恐らく、バルトローの師でもあったアルツィードにでも、進言されたのだろう。

バルトローはルルシエの息子だ。

ルルシエは、最後までヒスファニエを罵り、呪いを吐き散らして死んでいったそうだ。彼女を王妃にしなかったからではない。彼がデュレインを死なせたからだった。

彼女がデュレインを愛していたのは知っていた。王族の男子に性技を教える『成人の儀』の前に、彼女が男を知るために、デュレインを指名したのも薄々わかっていた。

もし、デュレインも彼女を愛していたなら、ヒスファニエは彼女を妃候補として受け入れはしなかっただろう。確かに、傍流とはいえ王族の血を引く宰相の息子と、正統なユースティニア王族の結婚は、問題がある。しかし、デュレインがヒスファニエを裏切るなど、ありえなかった。むしろそうなたとすれば、ヒスファニエに王の資質がなかったということであり、殺された方が国のためとなったはずだ。

だが、デュレインはルルシエに興味がなかった。ただ、ヒスファニエの妃になる女、王妃候補という点にのみ、興味を示したのだ。

だから彼女は、あれほど王妃の位に執着したのだろう。それも、

デュレインがいなくなつてしまえば意味のないことになり、生きる気力をなくした彼女は、お産で命を落とした。

彼女が最後までヒスファニエに対する呪詛を吐き続けていたと人伝に聞き、おかげで彼女との思い出が懐かしいものになった。身を滅ぼすほどのあの一途な愚かさは、けつして嫌いではないと思えたからだ。

遠い昔の取るに足らない記憶がいくつも通り過ぎていき、ヒスファニエはぼんやりとそれに身をまかせていた。それが、ウルティアの硬い声で我に返る。

「バルトロー総督は植民都市イルチスにて任に当たっております」

「一人で来たのか」

「はい。聖王陛下にお願いがあつて、参上いたしました」

そう言いながら目を上げる。その瞳は強い光を放っていた。

そこだけ軍神としては容姿が欠けている、右の金茶色の瞳に宿つた激しい情熱と意志は、己の死を覚悟していた。主たる『聖王』ヒスファニエが呼び寄せてもいないのに、任せた戦場を離れ、ここにいる。理由によつては、命令違反を問い、処罰されてもおかしくないのだから。

そして、軍神を宿した左の真紅の瞳は、23年前のあの時と同じに、ヒスファニエを弾劾していた。

ヒスファニエは、その日が来たのだと悟つた。ウルティアが生まれた時に見出した『啓示』に示されていた、その時、が。

あの日、ウルティアが生まれた日。ブリステインを滅ぼした時以上の大きな流れが、そう、東の大陸へと届くかと思われるほどの、新たな巨大な潮流が起こつた。けれど、それはヒスファニエを中心とはしておらず、それを不思議に思つて、流れを辿つて源を探しに行つたのだつた。

その先にいたのは、白い髪の子供が生まれたばかりの赤子だつた。突然入ってきた彼に右往左往する者たちにはかまわず、彼は流れの中心

にいる赤子に触れた。

赤子は、触れられて目を開けた。異相の瞳が静かにヒスファニエを見上げた。その瞳は、赤子であるにもかかわらず、神の英知を宿して、彼を弾劾していた。

おまえこそが神を騙る大逆者だ、と。

ヒスファニエは愉快な気分になった。誰かがそう言ってくれるのを、ずっと待ち望んでいたのだ。

一捻りで殺せそうな白い頭を撫でてみた。次いで、片手で覆い尽くして呼吸を止められそうなくぶくぶくとした唇をつつき、そして、握りつぶせそうな小さな手に指を握らせた。その手は、罪人を離すまいとするかのように、存外強い力で握ってきた。

ヒスファニエは、アリエを失って以来、初めて皮肉や失笑を含まない、穏やかな笑みを浮かべた。彼にははつきりとわかったのだ。

この赤子は、必ずやヒスファニエを、冥界にいるアリエの許へ導いてくれる。

だが、それは冥界の門をくぐってではない。

この、軍神を宿した娘に、俺は殺されるのだ。

楽しみだった。待ちきれなかった。どれほど育てば、この赤子は戦神となるのか。

「ウルティアよ、ようこそおいでくださいました」

赤子に囁きかけると、その唇の両端が吊りあがり、にいつと笑った。歯の無い口の奥が暗闇に見え、まるでそこに神がいるかのようだった。

ヒスファニエは万感の思いを込めて、その赤子に、アリエが彼のために捨てた名を与え、アリエイラと名付けたのだった。

「先にご報告申し上げましたとおり、新たに参戦したウイシュタリア王国は、植民地を返し、奴隷を解放し、これまでの土地の借地料と奴隷の賃金を払えば、停戦協定を結ぶと言っております。また、大神官エーランディアの末裔がウイシュタリア王に仕えているとも、

今ならば、停戦協定の見返りに、冥界の門を探す条件を相手に呑ませることもできるでしょう」

アリエイラの言う通りであった。協定を結べば、平和裏に門を探すことができる。

だが、そうしたとして、戦後処理には時間がかかる。いったい何年後に門まで行けるといふのだ。そして、道が開けたとしても、もうヒスファニエには、そこへ行けるだけの体力がなかった。

同様に、この肥大しきつて歪んだ、荒んだ国を立て直す力も、彼にはない。

冥界の門を探す力を得ることを最優先にしたために、国造りが追いつかなかった。何度、デュレインがいてくれればと思ったことか。ヒスファニエはゲシャン海域を統一し、大陸にまで版図を広げた偉大な王として褒め称えられたが、アリエイの言った、立派な王にはなれなかった。

国内は暴力と略奪が構造的に蔓延している。国民の中で少しでも力のある者は皆、血に飢えた獣のようになってしまった。そして、残りは狩られ、搾取されるばかりのものに成り果てている。

アリエイラは、ここまできて、何を躊躇っているのだろう。何を為すべきか、わかっていて来たのだろうか。

停戦協定を結ぶのは、ヒスファニエである必要はない。むしろ、旧弊を象徴する彼を廃し、新しい王を立て、国情を一新した方が、よほど良い結果をもたらすだろう。

そのために、次代の王に足る資質を持つバルトローを巻き込まないために、この娘は、たった一人でここへ乗り込んできたのではないのか。

気付けば、いつの間にか、アリエイラの瞳から弾劾の色は消えていた。替わりに、どこか絶るような気配に満たされていた。

愚かな娘だと思った。軍神と呼ばれながら、自分が人でしかないことは、身に余るほど知っているだろうに。同様に、ヒスファニエ

が神でなどないことも。

ヒスファニエ自身、己が神だなどと僭称したことはない。ただ、まわりにいた人間が、そう見なしたただけだった。だが、彼はそれを否定しなかった。もっと力を手に入れるために、それを利用してきたのだ。

父なる神、セレンティエア。この世界を創造された、神々の王。地上に現れたそれに、人々は縋りついた。人の世の痛みを、苦しみを被い、そして、欲望を満たすために。

神とは、それほど便利な存在ではない。神の理は時に、卑小な人間には理解しがたいことすらある。しかしそれは忘れられ、そういう存在へと貶められてしまった。いや、ヒスファニエが貶めてしまったのだ。

自分の罪は、自分が一番知っている。魂は少しの隙もなく、真っ黒に染まっているのだろう。

だが、それがなんだというのだ。死した後には、どんな業苦を科されようとかまうものか。アリイとの約束だけは守る。そうでなければ、彼女を死なせてしまった上に、これだけ待たせているのだ、彼女の前に立てなどしない。

そうやってずっと、彼女を迎えにくくたために生きてきた。しかしそれも、もう幕を引くべきだろう。人々にこれ以上の犠牲を強いるべきではない。せめて、最後くらいは『立派な王』にならなければ、彼女に合わす顔がない。

ヒスファニエは、すっかり一個の娘に戻ってしまったアリエイラに、『ウルティア』を呼び戻すことにした。

「神は冥界の門を見つけ出すことをお望みだ。それに従わぬ者は、すべて殺せ。それすらできぬのか、愚かな半端者。神ならば、神の意を実現するに、迷うはずもない。右目の欠けたなりそこないめ」アリエイラの目に、痛みと絶望が浮かんだ。それに呼び覚まされて、怒りが燃えあがる。彼女の中に、『ウルティア』が現れる。

『ウルティア』は立ち上がり、カツカツと足音を響かせて近付い

てきた。何気ない風だが、玉座のある壇上に登ってくるのだ、異常なことだった。

それを制止する者はいなかった。軍神の気迫に気圧されているのだらう。

ヒスファニエは泰然としてそれを見ていた。彼女が目の前で立ち止まり、ヒスファニエの佩いている剣の柄に手をかけた時も、ただ、彼女と目を合わせて、指一本動かさなかった。

彼女は剣を振りかぶることもせず、最小限の動きで急所に剣を突き入れてきた。衝撃で体が玉座から転げ落ちる。

燃えるような感覚が体を苛んだ。けれどそれも、あっという間に遠くなっていく。

静かに、暗くなっていき。世界から切り離され、遠ざかる。

ヒスファニエは微笑んだ。

ああ、やっと。

やっと、君に会いに行ける。

「アライ」

彼が最後に口にした名前を、地上の人間は、誰一人聞くことはなかった。

運のつき

王城に連れていかれたのは、8歳の時だった。その日、隣家のアレクトーと庭のカエルを捕まえて遊ぶ約束をしていた俺は、とにかく不機嫌だった。

そうして押しつけられたのは、6歳のクソガキのお守りだった。第二王子ヒスファニエ様だ、しっかりお相手を務めるのだぞ、と言いつけられ、問答無用で俺をここへ連れてきた父は、仕事に行ってしまった。

部屋には他にもたくさん人がいた。護衛とか侍女とか女官とか、全部大人だ。その中で俺たちだけが子供だった。

第二王子は、じろじろと人を見たあげく、ぷいーっと横を向いて扉へ向かった。近衛が扉を開けて押さえると、くるりと後ろを振り向いて、こちらをじっと見る。どうやらついてこいということらしかった。デュレインが足を踏み出すと、また、ぷいっとして歩き出す。そんな調子で階段の上まで来た。

手すりに片手をやった第二王子は、隣に立ったデュレインを、チラリと見る。一瞬、にやっとしたかと思うと、手すりに両手をかけて、やっとなをあげてその上に乗り上げた。そのまま、正面を向いて座って、その上を滑り始める。

デュレインは唖然とした。階段は途中で折れ曲がっており、もちろん手すりも曲がっている。そのまま行けば階段の外、つまり下までまっ逆さまだ。

「お待ちください！」

護衛が全員慌てて階段を駆け下りだした。

王子は器用に手すりについた手で減速し、落ちることなく角をまわって、さらに滑っていく。

つまり。これをやってみせろと。

冗談ではなかった。そんな年頃はとっくに卒業した。勇気を競っ

て従兄弟と言ひ争いをした末に、やはり階段から飛び降りて足を折ったのは一昨年だった。こちらはもう、そんなガキではないのだ。

デュレインは懐からおもむろにロープを取り出した。細いが、体の小さい彼を支えるには充分なものだ。その端を手すりに引っ掛けてから輪を作ると、自分の腰に回す。それから手袋を取り出してはめて、手すりに登り、またいでその向こうへと行った。そして、ロープを頼りに、するすると下りた。

下でそれを見ていた王子は、きらきらと目を輝かせ、よし、次に行くぞ！ と言った。

足音が近い。王子！ お待ちを！ という声も。

「少し待て」

そう言つて、デュレインはロープを階段の柱にくくりつけ直すとそれを引っ張つていつて、反対側にある置物の石の台座に縛りつけた。足元から10cmほどの高さだ。うまく引っかかれば、護衛は転んでくれるかもしれない。

空をきる音が聞こえ、ダン、と目の前に護衛が降ってくる。どうやら途中で飛び降りてきたらしい。

「逃げる！」

王子は一目散に走り出した。それにデュレインも続く。

後ろで派手に人の倒れる音がして振り返れば、痛みと怒りに顔を歪めた護衛の目と目が合ってしまった。その後ろからも次々護衛が現れ、子供の足ではすぐに追いつかれると思ひながら、王子を追う。

王子は回廊に出て、間一髪で大人では通り抜けられない垣根の下にもぐりこんだ。がさがさという音だけを頼りにそこを抜け、次はどっちだと見回せば、少し先の庭木の陰で背を低くして、こっちこっちと手招いている。

そんな調子で庭園も突っ切り、たどり着いた場所は練習場だった。やはり生垣の下にもぐりこみ、中で剣を振り回す大人たちを見る。

「あれ、兄上」

小さな指が指し示した先には、王子と良く似た髪色の青年が、左

手に盾を、右手に剣を持って戦っていた。少々押され気味だ。どうも、剣を使えば盾が、盾を使えば剣がおろそかになるようだ。

「いいなあ。俺もはやく、本物でやってみたい」

俺たち子供は、まだ軽い模擬盾に模擬剣だ。

「かつこいー剣が欲しいなあ」

剣の大きさは、その男の膂力で決まる。小さいのは格好悪い。

「それには握力と腕力だ」

自分の師に言われているのを、そのまま受け売りする。

「これとこれだな」

初めに小さな手をにぎにぎとし、次に腕を折り曲げた。

「これから練習しに行くか！」

「かまわないけど」

どうだろう？ 後ろから、足音が複数近付いてきている。

王子は、もつと中に来い、とデュレインを引っ張った。そして、そこにいろ、と男前に笑って、生垣の外に出て行く。

「ヒスファニエ様、勉強の時間にごさいます。どうぞお戻りくださいませ」

「わかった」

そう答えた王子の後ろから、デュレインものそのそと頭を出した。

「なんだ。後でこっそり帰ればよかったのに」

振り返って、馬鹿だなあ、という顔をする王子に、

「俺も授業と一緒に受けるって言われてるんだ。勝手に帰ってみろ。殴り飛ばされる」

と言えば、

「へえ。俺は殴られないけど、帰ったら、いっぱい怒られるぞ」

先生だろー、乳母だろー、母上だろー、それに時々父上な。王子は指折り数えて、得意げにした。

「けど、まあ、しかたない。ギムだからな」

腰に手を当てて、ふんぞり返って言う。

たぶん恐らく、王子の口にしたギムは義務だろう。どうも用法が

間違っている気がする。勉強ではなく、怒られる方が義務になっているようだ。

こいつ馬鹿だ、とデュレインは容赦なく判定を下した。デュレインがこれまで会ってきた子供の中でも、一番の馬鹿。

でも、と思う。やり方は稚拙でもデュレインを守るうとした。それは、買っていい。馬鹿は馬鹿でも、とっておきの馬鹿だ。

ふん、と鼻を鳴らしてデュレインは笑った。

「じゃあ、義務を果たしに行くか」
「おう」

王子は元気に答えて、意気揚々と歩き出した。

しかしその後、王子と一緒に城で叱られまくり、家に帰っても母に泣かれ、乳母の長い小言にうんざりし、父に拳骨を喰らい、散々な目に遭ったのは言うまでもなかった。

まあ、いわゆる、あれが運のつき、というやつだったのだろう。

俺は一生、あいつのお守りをして生きるのだ。

デュレインは、自分の乗る船とは反対に遠ざかっていくヒスファ二エの船を、目で追いながら考えた。

ここ半月あまりで知った、プリステインのラファエラ王子の性格を考えれば、あの姫が無事ですむとは思えない。

だとすれば、彼らのこちらへの対応も、友好的であるはずがなかった。そんな場所へヒスファ二エを行かせるわけにはいかない。そして、彼女への執着ぶりを見れば、その代わりを務めるのがデュレインでなければ、ヒスファ二エが頷くわけもなかった。

この追跡が、非常に危険なものになるのは目に見えていた。

足元がすかすかとするような、不安が立ち上ってくる。

それでも、面白いと思っただ。見てみたいと、やってみたいと思ってしまった。

あのきかん坊のクソガキが、イッパシの男になるのを一番傍で見てきたのだ。奴の暴拳のせいではないぶん煮え湯も飲まされたものだ

が、退屈だけはしなかった。

ブリステインの姫を娶って、和平を結ぶ？ それこそ夢のような話だ。だが、それができれば、ユースティニアは確実に発展するだろう。

あいつは歴代一の名君として歴史に名を刻むかもしれない。いや、そうさせたい。あいつや仲間たちと一緒に、より良い国を築いていきたいのだ。そのために、ずっと皆で研鑽を積んできた。俺たちならできるはずだ、きっと。

ヒスファニエの船が、水平線の彼方に消えた。デュレインは踵を返して舳先へと向かった。

デュレインの前に、海原も空もどこまでも青く広がっていた。彼には、その中に望む未来が存在するように感じられ、いずれ自分たちの手で、それを掴み出してみせると、強く心に誓ったのだった。

誘惑 1

世界がぐらりとまわった。その気持ち悪さに呻く。ひどく喉の下あたりが痛い。何か当たっているみたいで、それをどうにかしたいのに、腕がうまく動かない。とても体が重かった。寒くてたまらない。

アリエイラはゆっくりと目を開けた。

目の前には何もなかった。薄青い空が広がっている。

空？ え？ どうして？

不安が一拳に心に広がるのを感じながら、あたりを見回す。砂浜。海。そして、人。

すぐ傍に、冷ややかに見下ろす男がいた。その男が持った棒で、アリエイラの鎖骨あたりを押さえつけている。ざっと恐怖が背筋を這いのぼった。

誰？ 何？ どういうこと？ 誘拐？

王位争いをしている王子たちのうちの、誰かの仕業なのかもしれない。なかつた。ただ、それにしても王太子妃に対する態度ではない。

では、海賊？

目の前の男の身分として、それは相応しい気がした。どこか人には従わない気高さがある。海賊はならず者の集団がほとんどだが、まれに、政争で逃げ延びた王族の末裔もいる。ちょうど彼はそんな感じだった。

だとしたら、話を通じるかもしれない。ただのならず者では、死ぬまで慰み者にされるばかりだろうけれど。

アリエイラは一縷の望みにすがって、王女の品格をもって、その男に話しかけた。

「何者です。なんのつもりでこんなところに攫ってきたのですか」
男は少し首を傾げ、呆れた顔をした。面に表情がのって、得体の知れない怖さはなくなる。

「君は昨夜の嵐で難破してこの島へ流れ着いた。俺は君を拾う義務があるのだが、姫はお気に召さないようだな」

アリエイラは、あつと声をあげた。そう。嵐。昨夜、酷い嵐に船がみまわれた。ギシイ、ギシイ、と船は軋み続け、終いには、悲鳴をあげるようにして裂けて壊れてしまった。

「レイド様は？ サテイは？ ウイル、グイアス、シエイナ、誰か他に流れ着いた人は？」

「さあ。姫の他は、見ていないが」

「船は。船はありませんか。波間で助けを待っているかもしれません。どうか力をお貸してください」

自分が難破したことを思い出し、アリエイラは必死になって、誰とも知れない男に懇願した。

すぐにでも他の乗員の捜索に行かなければならない。事態は一刻を争う。船が難破したのは夜。あれからのくらくらいたったのだろう。太陽の位置が低いから、朝か、もしかしたら夕方なのかもしれない。つた。

「すまないが、船はない」

ゲシヤン海域の者は、海の恵で生きている。船のない島など有りはしない。

ならばそれは、ただで動かせる船がないということだろうか。どうやら男は人攫いでも海賊でもないようだったが、この島の商人なのかもしれない。人を助けるのに、なんてごうつくばりなことを言うのだろうと思いつつも、それならばと提案をする。

「お礼なら、国に帰ったらいくらでも」

「そうじゃない」

彼は首を横に振って言った。

「俺もこの島に一人で置いていかれたんだ。力にはなれない」

「そんな」

嘘は感じられなかった。彼の言葉を信じると同時に、一緒に船に乗っていた者たちを誰一人救いにいけないと悟って、涙があふれた。

今頃彼らはどうしているのか。水底に沈んでしまったのか。それとも、木切れにでもつかまって、冷たい海に浮いて助けを待っているのだろうか。

堪らずに、震えて口の中で呟いた。

ああ、どうか神様、彼らに慈悲を。

「君も体が冷えきっているだろう。服を乾かした方がいい。あちらに建物がある。そこに案内しよう」

首下の圧迫が消えたと思ったら、彼がアリエイラのすぐ傍にしゃがみこんだ。彼女は、涙で歪む目を凝らしながら、彼を見つめた。

この人は、何か罪を犯したのだろうか。島に一人で置いていかれるなんて、犯罪者ぐらいいしか思いつけない。それも、島流しにされるほどの罪なんて。いったい何をしたのだろうか。

彼に荒んだところはなく、暗さも鬱屈も感じなかった。むしろ、真つ当すぎるほどの気遣いにあふれている。とても悪いことをする人には見えなかった。

だったら、何か間違いを犯してしまったのかも思えないと思いつた。たぶん、事故かなにかで人を死なせてしまったのに違いない。アリエイラは鼻をすすりあげて瞬きをした。涙がぼろりぼろりと両目から一つずつ転げ落ちていった。涙で喉が震えてしかたなく、きちんと話せそうになかったから、はつきりと大きく頷いてみせた。すると彼がアリエイラの腕を掴み、引っ張りながら背中にも手を入れて起き上がらせてくれた。どうも体がふらふらする。それでも必死にバランスを取りながら、アリエイラは胸の前で左の拳を右の掌で包んで、顔の前まで持ち上げ、正式な礼をした。

「お世話になります。よろしく願います」

「ああ、たいしたもてなしはできない。堅苦しい挨拶はいらない」
彼が苦笑とわかる笑顔を見せた。そうすると、初めの無表情だった彼とは別人に見えた。なにか温かいものを感じさせる。

「俺はファー。君は？」

たぶん愛称なのだろう。それは、奇しくも婚約者候補の一人であ

るラファエラ王子の愛称と同じで、胸が苦しくなった。あの、冷たく、熱く、恐ろしい彼と同じだなんて。

アリエイラは少しの混乱の後、自分も教えないわけにはいかないと思ひ出し、急いで答えた。

「アリエイです」

「アリエイ」

彼は舌で転がして味わうかのように彼女の名を呼んだ。なんだか恥ずかしくなりながらも、はい、と返事をする。

彼はそれに、にこりと人好きのする笑みを浮かべた。それから、彼女を上から下、下から上へと眺め回し、ごく普通な感じで耳を疑うようなことを言った。

「君の帯も貸してくれないか？」

言いながら、もう自分の帯をはずしている。アリエイラは貞操への強烈な危機感に思わず胸元を押さえて、うまく動かない体でじりじりと後退った。

そうすると、彼は、はた、と止まって、ああ、という理解の色を示し、また苦笑しながら説明しだした。

「建物まではけっこう歩かないとならない。君を背負ってということ思っただが、俺の帯だけでは背負い紐にするには短すぎるから」

アリエイラはその筋道の通った理由に、あまりのバツの悪さに真っ赤になってうつむいた。そして大急ぎで帯をはずしにかかる。ところが凍えて指の感覚がなく、いっこうにうまくいかない。焦りに焦っていると、声がかかった。

「失礼しても、いいかな？」

確かに、このままではいつまでたってもはずせない。はずせないけれど、成人した女性の帯を解いてもいい男性は夫だけなのに。

彼に他意がないのは、さっきからのやりとりでわかっていた。アリエイラは無意識に下唇を噛んで、葛藤しながら彼を上目遣いに見上げた。彼は人の好きそうな穏やかな顔で返事を待っている。危険な感じは欠片もなかった。

今は非常事態なのだから。彼に任せるしかないだろう。

彼女は決心して、こっくりと頷いた。そして、恥ずかしさに彼を見ていられず、うつむく。その視線の先に彼の手が伸びてきて、アリエイラの帯に触れた。

アリエイラはクラクラとするような緊張の中で、彼の無骨だけれど長い指が、帯以外のどこにも触れずに、濡れて固く締まった帯を手際よくほどいていくのを、じっと見ていたのだった。

彼の背中は、とても温かかった。彼に言われて首に腕をまわす。アリエイラは頭を起こしておくことができず、広くがっしりとした肩に頬を寄せた。

彼が歩き出すと、世界がゆらゆらと揺れだした。幼かった頃に、誰かにこうしてもらった記憶がよみがえり、だんだんと身も心もゆるんでいく。

そうして、アリエイラはいけないと思いつつも、気を失うようにして、彼の背中ですぐに眠ってしまったのだった。

そこからの記憶は曖昧だ。アリエイラは高熱を出してしまったのだ。

具合が悪くて、気持ち悪くて、頭が痛くて、体が少しもいうことをきかず、自分の体がどんどんおかしくなっていくのがわかった。

寒くて、寒くて寒くて堪らなかった。がたがたと震えているのに、体を縮めて丸まることさえできなかった。ただ、力の入らない体を投げ出して、どうなってしまうのか、もしかして、このまま死んでしまうのか、すごく不安で怖かった。

人の気配はなかった。たった一人で、誰にも知られず、どこもわからない場所で死んでいく。

助けて、と思った。誰か助けて。一人はイヤ。寒い。寂しい。怖い。苦しい。痛い。助けて。助けて。

その時、アリエイラの願いが届いたかのように、誰かが背中から抱き締めてくれた。ふわりと香った匂いに、知っている匂いだと思っただ。この人は、頼りにしていい人だ、と。

温かかった。寒くて堪らないのがわかるかのように、手も足も絡めて、隙間なく肌を寄せてくれる。それがまるで、体から離れていこうとする魂をこちらの世界に引き止めてくれているようで、すこ

く安心した。

布を通さずに触れる人肌は、炎にあたるより温かく、気持ちのいいものだと思った。その感触が慕わしく、必死に体を動かして、すがって、何度も何度もすりよった。

傍にいて。抱き締めて。温めて。一人にしないで。

「傍にいる」

その人は言った。

「大丈夫だ。必ずよくなるから」

そう言つて、頭を撫で、背中をさすってくれる。

アリエイラは小さな子供に返つて、ただただその人に身をまかせたのだった。

時々、意識が戻るのに合わせてスープを飲まされた。彼の胸に背中をあずけて抱かれ、木匙で一口一口元まで運ばれてくるものを飲みこんだ。

初めは、口を開けるのさえ億劫だった。五口六口飲んで渴きが癒されれば、それでももう疲れ果てて眠りに落ちていく。

それがいつからか倍の量が飲め、それが飲めたら、次はまたその倍が飲めた。すると、体に力が甦るのがわかり、急になにもかもが良い方へと向かっていった。

だからその時、スープを飲み終わって横にされても、アリエイラはまだ目を開けて、見るともなく彼がお椀を持って立っていくのを見ていた。

その頃にはアリエイラは服を着ていたが、まだ彼は上半身裸だった。

綺麗な体だと思った。鍛えられてよく引き締まった、力に満ちた体。熱を分け与えてくれる、命にあふれた体。

あの体が与えてくれるものは、どれも心地いいものばかりで、それを思い出したアリエイラは、自然と微笑んだ。

けれど、彼が背中を向けた瞬間、彼女は息を止めて目を見開いた。

彼の背中に、鳥の羽を模した刺青を見つけたからだ。

ゲシャン海域の男は身分の上下なく、誰もが海に出る技術を身に付ける。たとえ一生を畑を耕すことになるかと、機織りすることになるかと、船を操れてこそ一人前と見なされ、それができないうちは、結婚もできなかった。そのため、男児は小さい内に、海にいる様々な悪いモノに捕われないように、背中に魔除けの刺青が施されるのだった。

その文様は島ごとに違う。それは無事に海を渡りきり、島に降り立った始祖の神話に起因するからだ。

アリエイラの属するプリステインは、イルカを模す。始祖がイルカに助けられて島に辿り着いたとされるからだ。

だが、鳥の羽を模した刺青は、鳥に導かれて島を見つけた者たちが施すものだった。その名はユースティニア。プリステイン王国にとって、何百年と戦ってきた、最も憎い敵だった。

まさか。そんなはずがない。

だって、ユースティニアの男は、女と見れば犯し、子供であろうと殺す、人の皮を被った悪霊だと聞いている。平気で卑怯なことをし、だからアリエイラの父も殺されてしまったのだと。

彼がユースティニアの男であるはずがない。なにかの間違いだ。あれは鳥の羽ではないのかもしれない。もしかしたら、もっと遠くの似たような神話を持つ、名も知らない違う国の人なのかもしれない。

様々な理由を考えつつも、頭の隅でそれは有り得ない話だと知っていた。

たとえばあの嵐でどれほど流されていようと、一晩でアリエイラの知らない海域まで来ているとは思えなかった。あの夜は、あと一日余りあればプリステインに着く場所まで行っていたのだから。

そして文様も、まぎらわしいものなど決して施したりはしない。それは、それぞれの出自を誇るものでもあるのだから。

彼はユースティニアの人なのかもしれない。そう認めざるを得ず、

アリエイラは泣きそうになって震える息をこぼした。

彼女がプリステインの者だと知れば、彼も噂通りのことをするの
だろうか。

そうは思えなかった。彼はそんな人ではない。そう思えるほど、
彼女は目の前の彼を信じていた。

だからこそ、いたたまれなくなった。

プリステインに、ユースティニアに対する恨みのない人間などい
ない。誰もが、アリエイラでさえ、復讐を誓っている。けれどそれ
は、ユースティニアにとつても同じなのではないだろうか。彼らも
プリステインに対する恨みのない人間などいないに違いない。それ
ほど二国は先祖代々長く争ってきた。

その上、アリエイラは彼に慈悲をかけてもらえるような立場には
なかった。彼女はいずれ、王子たちの中から王太子となる者を選び、
その妃となつて、プリステインの王妃となるよう決められている。

彼女はそんなことを望んではいなかった。でも、王がそのように
宣言してしまつたのだ。

アリエイラは、いつか彼の母国へ派兵をうながす立場となる。そ
んな女の面倒を見るなど、たとえ島流しの身分になつているとして
も、彼にさせてはいけなかった。

彼女はここを出て行くべきだと思つた。けれど、黙って出ていけ
ば、彼は必ず心配して彼女を探してくれるだろう。そういう人だ。
そして、動けない人間を放り出すような人でもない。

だから、体が動くようになったら、きちんと話して、礼を言つて、
それから出て行くとした。それまでは、申し訳ないけれど、彼の
厚意に甘えるしかない。

ごめんなさい。

アリエイラは目をつぶつて、心の中で呟いた。これ以上彼を見て
いたら、きつと泣いてしまふと思つた。

私は、この人の傍にいてはいけけない人間。

それが、どうしようもなく悲しくて堪らなかった。

目が覚めると、いままでの明るさが嘘のように、頭の中がはつきりとしていて体が軽かった。

小屋の中には壁の隙間から光が帯のように射し込んでいた。昏間らしい。これまでぼんやりと見ていただけだった室内を、改めて見回した。小屋自体はそれほど小さくないのに、壁際の棚に入りきらなかった物が雑然と積み上げられており、そのために狭くなってしまうているのが見て取れた。

目の前には竈^{かまど}まである。いったいここはどういう場所なのだろうと、アリエイラは首を傾げた。

それから頭だけ動かして、寝息をたてている彼を見た。少し無精ひげが生えている。起きている時は精悍な感じの大人の男の人なのに、こうしているとどこかあどけない感じがあつた。

かわいい、という感想が浮かび、アリエイラは微笑んだ。なんだか切なくなつて、濃い茶色をした短い彼の髪を梳いて、抱き締めた気がした。

彼はぐっすりと眠っていて、疲れているのだろうと思われた。ずっと夜も昼もなく面倒を見てくれたのだから、当たり前だ。感謝でいっぱいになつて、目の前の彼の胸に、触れるか触れないか程度のキスを一つした。

この人に、神の祝福がありますように。そう心から願いながら。アリエイラは彼を起こさないように、じっとしていたが、もう眠気は全然やつてこなかった。

そのかわりというのか、困ったことに、用を足したい欲求がじわじわとわきあがってくる。

彼は何かあればすぐに起こせといつも言っていたけれど、体は楽になつているし、よく眠っている彼を起こすのは気がひけた。

そこでアリエイラは一人で行つてこようと、そろりと動いて、ゆ

るんでいた彼の腕の中から抜け出した。静かにゆっくり体を起こす。なのに、彼が何の脈絡もなくむくりと起き上がって、アリエイラはびっくりして固まった。

「どうした。腹がへったか」

どうやら開かないらしい目をこすりこすり、欠伸をしてから、彼が聞いてくる。途中で目が開くと、少しやぶ睨みの眼差しで手を伸ばしてきて、彼女の髪を撫でつけた。彼の髪もあっちこちちはねている。自分のもそうだったのかもしれないと思い当たって、恥ずかしくなった。けれど彼は満足そうに口元をゆるめて、撫でつけるのをやめて、ぼんぼんと彼女の頭に掌を置くようにして軽く叩いたのだ。たぶん、寝癖は落ち着いたのだろう。

彼は小さく首を傾げて、どうした？ と今度は目で問ってくる。

アリエイラははっとして答えた。

「いえ、あの、外、に」

とまで言ったところで、用を足しに行きたいと言い出せず、口ももった。

「外？」

重ねて聞かれ、頷いて、外で、と返すが、やっぱり言えなくて困り果てる。しばらく無言で上目遣いで見上げていると、彼は、ああ、という顔をした。

「わかった。行こうか」

そして当然のように抱き寄せられて、子供を腕に乗せるようにして、ひよいつと抱き上げられてしまった。

アリエイラは18歳だが小柄だ。たぶん、12、3歳くらいの子供とそれほど変わらない。それにしても、あまりに軽々と抱き上げられ、彼の膂力に驚いた。

彼が一步扉へと歩き出したところで、今がどういふ事態になっているかようやく理解して、慌てて叫んだ。

「いいえ、いいえ、いいえ、けっこうです！ 一人で行けます！」

何を言っているんだという顔で、放してくれそうもない彼の肩に

手をついて、一所懸命ぐいぐいと押してみるが、びくともしない。
「ぜんぜん力が入ってないだろう。今さら遠慮はするな。連れて行ってやる」

「遠慮じゃありません。本当に、けっこうです！」

力も話も通じないのに焦って、早口で言い募ったら、なぜか彼は笑い出した。

「元気になったなあ」

そして、嬉しそうにアリエイラの背中を優しくさする。

それに、アリエイラは胸を衝かれた。彼の厚意が嬉しくて、ありがたくて、痛かった。申し訳ない気持ちでいっぱいになって、思わずうなだれた。

「なんだ、どうした。まだ体が辛いのか」

急に黙りこんだアリエイラに、彼は心配げに声をかけてきた。彼女はそれに、答えることができなかった。なんでもありません、と横に首を振るだけでせいっぱいだった。

どうしてこの人はこんなに優しいのだろう。

アリエイラは姿勢を保つために彼の肩についた手に少しだけ力を込めて、彼の体に身を寄せた。

用を足す専用の施設はないということ、俺はあのへんですから、君はあっちの方ですといい、と言って、小さな茂みがいくつもある場所で降りしてくれた。アリエイラが少し奥へ入ってから振り向くと、そっちでいい、というように頷いてから、彼は小屋へと帰っていった。

小屋の周りはいくらか開けた場所になっていて、その真ん中あたりには、水場らしき小さな屋根があった。他は、斜面を下った方に大きめの建物がいくつも見えた。それらも辛うじて残っているという感じで、どこもかしこも鬱蒼と樹木が生い茂り、今にも森に飲み込まれてしまいそうだった。

あまりにも人の気配が感じられない。鳥や虫の声と木々のざわめ

きだけ。その静寂に、心が洗われる。まるで、神様がそこにいらっしやってもおかしくないような場所。

惜しみなく人に与えることのできる優しい彼が住むのに、相応しい場所だと思った。

きつと、王子たちなどここへ踏み入ることさえ許されないだろう。神に罰をあてられるに違いない。

アリエイラには、はどこである、強く猛々しく頼りになると言われている王子たちが、何か醜いもののように感じられた。

いいや。それこそが、ずっと感じていながら心の奥底に隠していた本音だったと気付く。

『アリエイラ、おまえの父の仇をとってやるからな。ユースティニアなど、滅ぼしてくれる』

そんなことなど、望んだことはなかった。アリエイラはただ、父を失ったのが悲しいだけだった。父に帰って来て欲しいと、そう願っていただけだった。他の誰かを殺して欲しいなんて、そんなこと思いもしなかった。

なのに誰もが、ユースティニアの王太子を殺した『英雄』の娘が、敵討ちを望むのは当たり前だと考えていた。

アリエイラは彼らが考える『英雄の娘』を演じ、ユースティニアへの復讐を誓いながら、心底からそうなれない自分を、親不孝な娘だと情けなく思っていた。

でも、違うのかもしれない。彼女は初めてそう思った。

この神々しい場所では、憎しみこそが異質だった。彼ならばきっと、彼女の気持ちを知ってくれられる気がした。

けれど、だからこそ、許されない。

アリエイラは唇を噛んだ。

彼女は、いずれ『英雄の娘』として王妃になる。憎しみの象徴になる。

彼に、そんなものに、これ以上触れさせてはならない。

彼女は両手で口と鼻を覆うようにして目をつぶった。彼の傍にい

たかった。離れたくなかった。でも。

どうか、勇気をください、神様。

彼女はそっと、心の中で唱えたのだった。

泉まで行って手と顔を洗って、口もすすいだ。それから一口口にすると、驚くほど美味しいお水だった。清涼感が体中に広がって、最後に残っていた気だるさの余韻も消えていった。

体は少しもふらふらしたりしなかった。ずいぶんお腹もすいていて、栄養を摂ってもっと元気になるうとしているのがわかった。それは、自分はもう大丈夫なのだとの確信を持てるくらい、確固としたものだった。

けれど、実際問題として、アリエイラがここで一人で生活しているかという点、自信はなかった。自慢にはならないが、お姫様育ちなのだ。

二年間にわたり、病の祖母を看病したので、身の回りの細々したことはできる。しかし、例えば食事を作るとか、洗濯をするとか、そういうことはできなかった。当然、食料を手に入れてくることもできない。彼から離れたら、自分はあつという間に飢えるだろうという予感があった。

でも、浅瀬には海草もあるし、アリエイラにだって、貝やカニくらい獲れるだろう。それに、これだけ木が多ければ、食べられる木の実の一つや二つ見つかるに違いない。

きつと、二、三週間の我慢だ。アリエイラがいなければ、王太子が決められないのだ。絶対に国から搜索隊が出されるはずだ。それを待つ間だけ、しのげればいいのだから、なんとかなるに違いない。そうだ。毎日砂浜で狼煙を上げよう。少しでも早く、見つけてもらえるように。それは良さそうな考えに思えた。

なんとなくこれからの見通しが立ち、不安が軽くなったところで、小屋へと向かった。

あとは、アリエイラに生活能力がないことがばれないように気をつけて、彼の許から出て行く了承を得るだけだ。

お礼を言つて、感謝していることだけはちゃんと伝えたい。けど、プリステインの人間として、ユースティニアの人間には世話になれないと、そう言えればいいだろう。

彼もそれで納得してくれるに違いない。なにしろプリステインとユースティニアは、もういつからなのかわからないほど昔からの仇敵同士なのだから。

心を決めて小屋の扉を開ける。するといい香りが充満していた。いつも飲ませてもらっていた、あのスープの匂いだった。

かまど
竈の前にいた彼は、アリエイラを見ると、にこりとした。

「大丈夫か」

「はい」

アリエイラはそれ以上、うまく言葉が出てこなかった。なるべく早く話さなければ、と思うのに、彼の顔を見たたん、熱く鈍い痛みが胸に広がり、それで頭の中もいっぱいになって、何をどう話すつもりだったのかもわからなくなってしまった。

彼女は扉の前に立ったまま途方に暮れて、見るともなく小屋の中を見回した。雑然としているけれど、不思議と居心地のいい場所だった。

「まだ横になつている。俺は水を汲んでくるから」

彼が近付いてきて、扉の側にあつた桶を取り上げた。あつと思つて、とつさにその場で跪く。その勢いそのまま拳をつくつて、顔の前まで持ち上げ、最敬礼の姿勢をとつた。すると、すらすらと言葉が出てきた。

「助けていただいて、ありがとうございます。たいへんお世話をおかけしました。このご恩は一生忘れません。必ずご恩に報いることを誓います」

彼の膝辺りを見ながら言い切つた。なぜかその膝が、見ている前で下に落ちていき、地についた。かと思うと、自分の手が温かく大きい手に包まれる。押されるままに下ろした先に、真剣な目をした彼の顔が現れた。

「礼なら神に言えばいい。俺は神からの賜り物をありがたくいただいただけだ。自分のものを大事にするのは当たり前だろう。俺は君に恩を感じてもらおうほどのことはしていないよ」

アリエイラは彼を見つめたまま、あまりに痛む胸にうまく息ができず、喘いだ。

ただただ与えて、見返りを求めないで。感謝すら神に捧げると言う。彼女は彼みたいな人を他に知らなかった。

どうしてこの人は。

こんな人が、この世に存在しているなんて。

切れ切れになった言葉が頭に浮かんで消えていった。

「ごめんなさい」

アリエイラは涙を必死に我慢しながら謝った。自分という存在がいたたまれなくてしかたなかった。謝るほか、どうすればいいのかわからなかった。

「謝らなくていい。遠慮もするな。俺の物だと言っただろう。もっと元気になってもらわなければ、俺は満足できないぞ。元気になるまで、しっかり甘えてろ」

俺のもの、と言いながら、口にするのは彼女に対する気遣いばかりだ。なのに、そのアリエイラは彼のものである価値もないのだった。

彼女はきつく目をつぶって、横に激しく首を振った。

「違うんです。ごめんなさい。私、私は、ブリステインの者なので。あなたは、ユースティニアの方なのでしょう？」

彼は動きを止めて、アリエイラを見た。けれどその視線は彼女を乗り越えて、どこか遠いところを見ていた。なんの表情を浮かべないで、瞬きすらしない。それは初めて会った時の表情に似ていた。

アリエイラは急に怖くなった。彼は違うと勝手に思ってしまった。いたけれど、彼にもブリステインに対する恨みや憎しみがあるのかもしれなかった。

王子たちやまわりの人々の顔を、一瞬で醜く恐ろしいものにする、

あの感情が。

それを、優しい彼の中に呼び覚ましたくなかった。憎しみは、人の心に棲みつく獣だ。胸の内ですべて育てれば、いつしか人の心を喰らってしまう。

そう。王子たちも昔は優しくかったのだ。仇をとってやる、という言葉も、初めはアリエイラを慰めるためのものだったはずなのだ。それがいつからか違うものになってしまった。

そうなる前に、彼の前から消えなければ。

アリエイラはふいに、この服が自分の物でなかったことを思い出した。これは彼の服だ。彼女が着てしまっているから、彼は着るものがないのだった。これを着て出て行くわけにはいかない。

無意識に帯をほどこうと手を引き寄せ、温もりが失われてから、未だ彼の手の中にあっただと気付いた。それを名残惜しく思いながらも、結び目に指をかけて言う。

「これ、お返しします」

「脱ぐな」

彼はそう言うてくれたが、そんなわけにはいかないと、急いで反論を試みた。

「で、でも」

「昨日、干したまま取り込み忘れた。きっと朝露で湿ってる」

「それでいいです」

「子供でも、男の前で服を脱ぐな」

思いがけないほどきつく言われて、アリエイラは、びくりと体を竦めた。子供じゃない、と反発を覚えながらも、有無を言わせぬ声に、心まで竦んでしまっていた。

すると、頭に手が伸びてきてぐしゃぐしゃと髪をかきまぜられた。その、いつも彼が彼女をかまうのと同じ感覚に、体のこわばりが自然にとけていく。

「ユースティニアの男だって、女子供をどうにかするほど残酷じゃない。それに、俺は知ってて君を拾ったんだ。一緒に流れ着いた船

体の破片に、プリステインの魔除けの目が描かれていたから」

知っていた？ 知っていたのに、ずっと親身になって面倒をみてくれたというの？

なんの気負いもなく言う彼に、アリエイラは様々な感情が湧き上がって言葉を失った。自分の鼓動がどくどくとうるさく鳴り響いていた。視線を惹きつけられたまま、彼から目が離せなかった。

そんな彼女を見て、彼は苦笑した。

「海から流れ着いた物は、すべて神からの賜り物だ。君が誰でも俺にとつては賜り物だ。一生恩に着的る気があるなら、賜り物らしくふるまえ」

彼は優しい表情をしていた。その彼が求めてくれるなら、少しでも彼に恩が返せるのなら、アリエイラはなんでもしたいと心から思った。そして、なれるものなら、本当に彼のものになってしまいたい。彼に見合うものに。

でも、肝心のその意味がよくわからないのだった。

「賜り物らしく？」

疑問のままに尋ねると、彼は頷いた。

「そう。ここにいる間は、君は俺の養い子だ。子供らしく甘えろ子供？ 養い子？」

そういえば、さつきも子供と言われたのを思い出し、彼に子供に見られているということに、なぜか酷く傷ついた。

そんなことは初めてではなかった。アリエイラは背が小さい上に童顔だ。初対面の人間は、たいてい彼女を子供として扱う。

けれど、なぜか彼にはそう見られなくなかった。アリエイラは一人前の成人した女性として彼に接しているつもりだったし、そう見てもらっているつもりでもあったのだ。

だけと思り返してみれば、子供だと思っていたから、彼は平気で裸の彼女を抱き締めて温めてくれたのかもしれない。汗をかいた服を、何度も着替えさせたりしてくれたのもそうなのだろう。

それに思い至って、きりきりと胸が痛んだ。自然に涙が滲んでく

る。彼女を見守る彼が、心配そうに表情を変えるのを見て、喜びとも切なさともつかないものに捕われた。その熱は瞬時に胸から全身に巡り、指先まで疼かせた。

突然、アリエイラの中で、その熱がはつきりとした形をとった。体の中から取り出し、掌の上ののせて示せそうに思えるほど、確かに。

この人が、好き。
好き。

深く熱く強くアリエイラを侵す思いを瞳に宿し、彼女は彼の存在に魅入られて、見つめた。

気遣う眼差しが慕わしい。アリエイラの髪をくしゃくしゃにしたままそこにあつた彼の指が、なぐさめるように頬を滑り降りてきて目の下をさすった。その甘い感覚に酔い痴れる。体が破裂しそうなほど熱が膨らんで、それに押し出されるようにして、さらに涙が滲んだ。

すると彼はあせつたように言葉を紡いだ。

「いや、甘えてくれ。甘やかしたいんだ。こう、なんというのか、可愛くつて、楽しいんだ」

甘やかしたい？ 可愛い？ 楽しい？

そう思われていることに、どきどきした。とても嬉しかった。アリエイラは有頂天になった。なのに、彼は続けてこう言った。

「あー、いや、ほら、妹とか、弟とかいなかったから、新鮮というのか」

妹？ 新鮮？

アリエイラは愕然として彼を見上げた。彼は、はっと我に返ったようにして、恥ずかしげに顔をそむけた。それに、今聞いた言葉が、どれも幻聴でなかったことを知った。

「妹、ですか？」

だから可愛がって甘やかしたいと？ 聞き間違いではないかと、一縷の望みをかけながら、聞いてみたのに。

「嫌でなければ」

彼は横を向いたまま、気まずそうに答えた。

初めが子供で、次が妹。良く考えればすぐにわかったはずなのに、つい甘い夢を見てしまったと、アリエイラは自嘲した。いったい、子供と妹とどちらがましだろう。どちらも女として見てもらうには障害が多いように思えた。

それでも、恥らっているらしい彼の姿は、なんだかかわいかった。大の大人が目を合わせられずに、座り心地が悪そうにしている。そのままにしておくのはかわいそうで、なんとかしてあげたくて、アリエイラは短い逡巡の後、独り言のように囁いてみた。

「では、ファー兄さま、とお呼びした方がよいのでしょうか」

彼は、思わず、といったようにこちらに視線を戻した。それに、どうしたらよいかと問いかけるために小首を傾げる。彼は、ふっと笑った。

「それでいい、アリエイ」

彼が彼女の名前を呼んでくれた。それだけで、胸の奥がくすぐつたくなる。嬉しくてたまらなくなる。

アリエイラは自分が完全に説得に失敗したのに気付いていなかった。そんなことは忘れてしまっていた。

彼女は初めて知った恋故に、それに逆らう術もまた、持ちあわせていなかったのだ。

アリエイラは下品にならないように気をつけながらも、朝食のスープレをがつがつと平らげた。おかわりが欲しくて、でも言い出せなくて、ちらりと彼を見上げると、彼は苦笑して、彼女の頭をぼんぼんと叩いた。

「そんなに急にたくさん食べると、腹がびっくりしてしまっからな。今はここまですて、また腹がへってきたら食べるようにしようか。鍋はここに置いておくと、中身はたっぷりある。好きに何度食べてもいいが、一度に一杯ずつ。約束できるか？」

アリエイラは言外に何か含んでいるそれに、とりあえず、はいと頷いた。

「よし、いい子だ。実は、これから島の見回りと食料の調達に行つてこなければならぬ。アリエイラには留守番をしてもらいたいが、頼めるか？」

「はい」

そう答えるしかなかった。彼についていっても足手まといにしかならないだろう。

「ここは他に人もいないし、人を襲うような獣もいない。危険なところも特になが、迷子になるといけないから、この小屋の側から遠くに行つてはいけない。いいな？」

「はい」

「いい子だ」

彼はもう一度言つて、またアリエイラの頭に手をのせた。いい子だと言う度に、彼は慈愛に満ちた微笑みを浮かべる。そうして、可愛いなあ、という感じで彼女を撫でくりまわすのだ。

完全に子供にしか見られていない。確かに今のアリエイラは何から何まで彼の世話になつていて、人に頼らなければ生きていけない子供と同じだ。成人していきまうと云つたところで、彼に余計な気を

遣わせるだけだろう。

ただし、彼は変わっていると思わずにいらなかった。普通、子供を可愛がるのは女性で、特に貴族の男性は子供に厳しい。自分が戦でいつ命を落とすかわからない中で、少しでも早く一人前の人間として教育しようとするからだ。アリエイラも王族の姫として、その心得から、立ち居振る舞い、人の使い方など教え込まれてきた。

けれど、こんな場所では、そのどれも役に立たない。アリエイラは一個の人間として、自分がどれほど脆弱かを思い知らされていた。そして、彼のように男女の関係なく人を慈しむことこそ、本当に人間にとって必要なことなのだ、目が覚めるような思いで知った。戦うために人生を捧げるのではなく、人を生かすために生きる。

そんな彼に、少しでも近付きたい。彼がアリエイラを自分の物だと言ってくれるなら、それに見合う人間になりたい。

そのために、まずはこの人の重荷にはこれ以上ならないこと。そして、少しでも仕事を覚えて、この人に認めてもらえるようになること。

アリエイラは彼が出かけていくのを戸口で見送りながら、心密かに決心したのだった。

彼女は手始めに、小屋の中を点検することにした。

戸口の横に水瓶。その横に、ちよつとした洗い場があった。角を曲がって、壁の手前中央に竈かまどがある。横に薪も積み上げてある。少し離れたその前に、よく乾いた枯れ草を敷き詰めて寢床を作っていた。彼が出て行く前に寒くないか確認をしてきて、今は埋み火にしてある。彼女の熱も下がったので、もう寒いことはなかった。

戸口と竈かまどの反対側の二つの壁は、一面棚が設けられ、いろんなものがのせられていた。そこに納まりきらなかった物は、その前に雑然と積みあがっている。アリエイラはそれを一つ一つ見ていった。

籠。籠がいっぱい。深いのから浅いのから大きいのから小さいのまで。それに木彫りの皿。これも深い浅い大小とりそろっている。

桶も同じ。スプーン、フォーク、おたま。ロープ。背負子。

アリエイラは珍しく金属でできた小さな箱を見つけて、中を開けてみた。するとそこには、金属の針が動物の脂に埋められて入っていた。それをちよつと出してみて、すぐに中に押し込める。あまり勝手にいじってはいけなれないと思ひ返したのだ。

他にも何かありそうだったが、そこから先は眺めるだけにして触らないようにした。彼が帰ってきたら、触っていいか確かめてからでも遅くないと思つたのだ。

それがすむと、アリエイラは一寝入りすることにした。疲れないうちにそうしろと諭されていたからだつた。

彼女は寢床に行くとき横になって、まわりの草をかき集めて体の上にのせた。そうして体を丸めて薄暗い部屋の中を眺めている内に、いつのまにか眠ってしまったのだつた。

目が覚めたのは、何か物音がした気がしたからだつた。彼が帰つて来たのかと体を起こし、戸口をうかがうが、いつまで待っても扉は開かなかつた。

アリエイラは立ち上がつて戸口まで行き、扉を開けてみた。外はさんさんと日光が降り注ぎ、空は青く晴れ渡つていた。小鳥がチチチと鳴きながら飛んでいく。爽やかな風が吹いて、彼女は誘われるまま外へ出た。

深呼吸を一つして、泉まで歩いていった。泉の側の大きな木に何か引つかかっている。よくよく見れば、それはアリエイラの服だつた。手を伸ばしてみたが、高すぎて届かなかつた。あれが着られたら、彼の服を洗えるのに、と思うと残念だつた。

たぶん、洗濯はできる。祖母の顔や手を拭つてあげた布を、何度もお湯の中で揉み洗ひした。あれと同じにすればいいはずだ。いい香りがするよつに、花や葉を乾燥させたものを入れたりした。あれはどの草なんだろう。

アリエイラはあたりを見回した。本格的に洗うには、それ専用の

植物を使うことは知っていたが、どれがそれなのかまったくわからなかった。生活に使うもの、城で必要とするもの、そういったものリストは知っていても、それがどうやってできあがってくるのかまではわからない。彼女は溜息をついた。

大木に手をつき、空を見上げた。枝にぼつんと白いものを見つけ、よくよく見れば、この木は蕾でいっぱいだった。思い切り背伸びしてもとどかなくて、えいっと跳ねて枝を掴む。そのままたわめて花を見ようとすれば、ふわりと甘く優しい香りがただよった。

『花嫁の花』と呼ばれる花のうちの一つだった。この香りで邪気を被うと言われる聖木だ。清めが必要な場所には様々に飾られ使われるが、花嫁を清め、守るためにも使われる。聖花と言われるものの中で最も甘やかな香りをもつこの花で飾られて嫁ぎたいと思う女性が多く、そのため、結婚式はこの花が咲く期間に挙げられることが多かった。

花は女性の象徴でもある。花嫁の身を飾った花を一つ一つ取り除くのは夫となる者の役目であり、その薰り高い花一つ一つに、女性の身も心も捧げる意図が込められている。

アリエイラはぼんやりと、彼に見つめられながら髪に挿した花を抜き取られる様を想像し、はっと気付いて枝から手を離し、顔を覆った。あまりに恥ずかしくて、顔から火が出そうだった。

何を考えているのだろうか。そんなの、あるわけがない。彼にとつてアリエイラは子供で妹なのだ。それ以上になど、なれるわけがない。

それでも、彼がここに一人で置いていかれ、これから先もずっと一人でいるのなら、他の女性を娶ったりしない。その考えに、なんて自分勝手だろうと思いつつも、満足する。

たった一人。死ぬまで、たった一人なのに。

少し前に自分が味わった恐怖は、体が元気になったのと一緒に薄れていたが、まだ心の中に残っていた。自分はなんて残酷なことを望んでいるのだろうか。

風に頭上の枝が一際大きくざわめいた。あたり一面の木々も草も強く吹き付けてくる風に、ざわざわと音を立てている。それがぴたりとなくなつた。

人の気配がなかつた。草木の、いや、この山の神気が、急に濃くゆらめいて立ち上つてきたようで、アリエイラは背筋を震わせた。あたりを静寂が支配していた。怖かつた。あまりに深閑とした強すぎる神気に、押しつぶされそうだった。

彼女はよろよろと小屋へ向かつて歩き出した。数歩足が動く、あとは何かに追いかけられるようにして走り出す。小屋へ辿り着くと、彼女は耳を押さえて寢床でうずくまつた。

怖い。怖い。怖い。一人はイヤ。嫌。

ファー。ファー兄さま。

突然、彼が帰つてこなかつたらどうしようという思いに囚われる。怪我したり、もしかして、死んでしまつたりしていたら。

イヤ、イヤ、イヤ、イヤ！ 帰つてきて。早く帰つてきて。どうか、無事に帰つてきて。

神様、お願いです。どうか、ファー兄さまをお守りください。

涙が零れた。彼を失うなんて、堪えられなかつた。そうしたら、この世界にたつた一人だ。それがどうにも恐ろしくてたまらなかつた。

一人でなど、ここで一瞬たりとも生きていけない。今朝した決心がどれほど甘いものだったのか、痛烈に思い知らされていた。

お願いです。どうか、お願いですから、彼を無事にお戻しく下さい。

アリエイラは泣きながら、繰り返し神に祈りを捧げたのだった。

外で足音がした。かたん。それに、小さな物音も。それでもアリエイラは動けなかった。全身を耳にして気配を探す。扉がキツと小さな音をたてた。外側に開かれ、光がさしこむ。

アリエイラは顔を上げた。見知ったシルエットに、立ちあがって駆けよる。彼の胸に飛びこんで抱きついた。

「なんだ。どうした。ここには人を襲うような動物はいないぞ」

そう言いながら、しっかりと抱きしめてくれる。顔を覗きこもうとする気配に、泣いていた痕を見られたくなくて、彼の胸に顔をこすりつけて隠した。

彼の心臓の音が聞こえた。とく、とく、と規則正しく鼓動を刻む体は温かく、また涙がにじんでくる。

ああ。神様。この人が生きていてくれたことに、感謝いたします。「怖い夢でも見たか」

笑いを含んだ明るい声が頭の上から降ってくる。それに、自分のふるまいがいかに子供じみていたか気付き、彼女は身を引こうとした。すると彼は彼女の肩を押さえつけて、ひょいっと身を屈めて視線を合わせてきた。

みっともないのに。情けないのに。

なのに彼は少し驚いた顔をして、すぐに包みこむようにして抱きしめてくれた。

「ごめんな。寂しかったな」

優しい声で、なだめるように何度も背中を叩いてくれた。それが心地よくて、安心してアリエイラは彼に身を任せた。

「罨に獲物がかかっていた。うまそうな野草も採ってきたし、それから、これは土産。甘かったぞ」

彼が腰にさげた籠から葡萄を取り出し、目の前にさしだしてきた。どうぞ、という眼差しに彼女が手に取ると、彼は急に彼女を抱えあ

げた。驚いて動けずにいたら、そのままのしと連れていかれ、
寝床の上で下ろされた。

「さあて、今日は久しぶりに違う味の飯にするか!」

「違う味? 何をつくるの? 手伝います」

アリエイラは彼を見上げて、勢いこんで言った。彼が料理をする
というのなら、ぜひ手伝つて覚えてかつた。

彼はニツと笑つて、葡萄を一粒摘んで、彼女の唇に押し当てた。

「うん。そうしてもらうか。用意するから、それ食べてな」

彼が皮から押し出した実から果汁がしたり、彼女は慌てて口を
開けて受け入れた。

「甘い」

葡萄はとても瑞々しく、驚くほど美味しかった。

「そうだろう?」

彼はくすくすと笑つて彼女の頬を撫ぜた。

葡萄を堪能し終わったところで、洗い場に彼に呼ばれた。

葡萄の残骸はこつちと言われ、小さな籠の中に捨て、その横の桶
の中で手を洗つた。それから、洗い場の中に無造作に置いてある葉
や泥だらけの根菜を、桶の中で洗うようにと言われた。一つ一つ丁
寧に洗いながら、形を覚える。そして、洗つたものは筴おのにのせてい
つた。

その間に彼は、生の肉らしきものを大きな厚い葉の上で小さく切
り分けていた。元はなんだつたのか、薄赤いだけのそれからは想像
もつかなかつた。

彼が一日外に出れば、これだけのものを見つけてこられる。それ
がどれほどすごいことなのか、今のアリエイラには理解することが
できた。

彼は全部切り終わると、別の厚い葉にナイフをのせて、アリエイ
ラに渡してきた。

「切つておいてくれ」

そう言つて、肉を持つて竈かまどの方へと行つてしまふ。彼女は困つてナイフと箸おしの上の物を交互に見つめた。ナイフなど使つたことはなかつたのだ。

でも、さつき、彼がやるところを見ていた。あれと同じにすればいいはずだ。

一人で、よし、と頷いて、右手でナイフをつかみ、左手で洗つた葉をつかんだ。そして刃を当てようとして、どのくらいの大きさにすればいいのか悩む。

彼の方へ視線をやるが、彼は背を向けて鍋をかきまぜている。再びアリエイラは手元に視線を落とし、ちよつと躊躇つてから、口に入りそうな大きさになる場所に、えいっとナイフを押し当てた。ざくり、という感触が手に伝わり、葉が切り分けられる。

切れた！ 彼女は興奮して目を輝かせた。すごい。私にもできた！ 嬉しくて、楽しくて、夢中になる。

幅広の植物は細長いのにあわせて細くしてから切つてみたり、厚みのあるものも工夫して賽の目にしたり、あつという間にやりとげた彼女は、葉の上にこんもりと盛られた成果を満足気に眺めた。

目の端に彼が動くのが見えて顔を上げると、ちよつど彼が振り向くところだつた。手に持つていたナイフを置いて、切り終わったそれを葉ごと持ち上げて見せてみる。

「もう入れますか？」

「ああ。持つてきてくれ」

零れないように慎重に運び、これ、と彼に見せると、それをちよつと見た彼は頷いて、入れて、と鍋を顎で示した。アリエイラは鍋を覗きこんだ。大事に持つたそれを、中にぼとぼと落とす。切つたものが鍋の中で混ぜられる。初めてのそれが、誇らしくて、嬉しくてたまらなかつた。

「どんな味になるんですか？」

彼女はうきうきと彼に尋ねた。

「さあ？」

「さあ？」

おかしな返事に、彼女は彼へと顔を向けた。

「どんな味になるかは、食べてみてのお楽しみだ。昨日までと違う食材を入れたから、違う味にはなるんじゃないか？」

思ってもみないかった、とんでもなく適当な答えが返ってくる。

「ええ？ それだけ？」

アリエイラは思わずそう言った。

「それだけ」

彼女はとても驚いた。切って入れるだけなんて！

「あんまり美味しいから、何か特別な味付けをしているのかと期待していたの。入れて煮るだけだったなんて。とっても簡単なのに、すごいわ」

これならアリエイラにもできそうだった。

「本当だよな。俺も驚いているんだ。初めてにしては、よくできてるって」

えっ。彼も初めてだったの？ それでこんなことができちゃうの？

アリエイラは彼をまじまじと見つめた。なに？ と彼が首を傾げる。どうやら、彼にとってはなんでもないことのようにだった。

彼女は素直に感心した。彼は本当にすごい人だ。

「さすがファー兄さまね」

アリエイラはにっこりと笑って言った。

彼は目を見開いた。それから目を細めると、おたまを放り出した。あ、どうしておたまを落としてしまうの、と目で追っていると、いきなり彼に抱き上げられた。そして、頬にキスをされる。その上、頬擦りまでされた。

どういうわけなのかちつともわからなかったが、彼に熱烈にカワイイと思われているようだった。何度も繰り返される頬擦りに愛情が伝わってきた。それに、心が弾む。アリエイラはくすくすと笑った。

けれど、剃り残しがじよりじよりと当たり、少々痛い。

「もう、いやあ」

彼女は笑いながら、彼の頬を両手で押さえつけた。ところが、彼は面白がって、その手にも、すり、と擦り寄ってくる。掌までちくちくして、くすぐったくて、背筋がぞわりとした。

「ちくちくする！」

手を離せば、また頬へと襲いかかってくる。きゃあ、やだ、と騒げば、彼は声をあげて笑った。

屈託のない、心の底からの笑い声だった。まるで少年のようで、アリエイラはどきどきした。

眼差しが合う。お互いの好意が透けて見えた。アリエイラは彼が愛しくて、その首へと腕をまわした。彼も笑みを深くする。今度は頬をこすりつけないで、ただ触れ合わせてきた。ちゅ、と軽くキスされる。

胸の奥が震えた。愛しさに、心臓をぎゅうとつかみあげられる。彼の深い愛情が感じられるのに、物足りなくて、切なくなった。

もっと、触れたい。もっと。

キスは唇にして欲しい。あの時のように、素肌で触れ合いたい。自分がなにを望んでいるのかを知って、アリエイラは、はっ、と熱い息をついた。そして、彼の首へまわした手で、そっと彼の肩を撫ぜた。指先に感じる彼の肌、筋肉、熱に、愛しさがつのった。

彼女は自分の中に、体の芯が蕩けていくような欲望があるのを知ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645u/>

君に会いに

2011年10月12日08時58分発行